

目次

目次

はじめに

【Q1】『黒田家譜』にみる官兵衛がキリシタンだったことの痕跡

- 1・官兵衛の信仰って？
- 2・官兵衛・棄教説！？
- 3・官兵衛は棄教なんてしてない！する必要がなかったんだ！
- 4・官兵衛＝神道・仏教・キリスト教の三教共存説

【コラム】徳川政権でキリシタンが禁止された経緯、理由は？ ～許可にはじまり迫害へ～

【Q2】官兵衛のキリシタン入信

- 1・年表をみてみよう！
- 2・黒田家の宗旨
- 3・日本にいつキリスト教が到来したか？
- 4・戦国時代にキリスト教が弘まった理由
- 5・官兵衛のキリシタン入信時
 - (1) 入信時期
 - (2) 洗礼名
- 6・キリシタン受洗のきっかけ
 - (1) 14歳で母と死別した葛藤によるもの。
 - (2) 33歳で、有岡城の十年に1年間囚われた葛藤によるもの。
 - (3) 実利目的
 - (4) 特に(1)～(3)のようなことはなかったが、教義が自分の性格や生き方にフィットし共感できたから。
 - (5) まとめ

【Q3】勧誘や教団の保護

- 1・播磨の国で布教する「入口」となった官兵衛
- 2・九州平定戦の時期
 - (1) イエズス会教団への保護・キリスト教徒としての活動—九州平定戦時
 - (2) 勧誘活動—九州平定戦時
- 3・一族の改宗
 - (1) 長政の改宗
 - (2) 利高・直之の改宗
 - (3) 官兵衛の妻、光（てる）の方
 - (4) 他家の武将たちの改宗
- 4・イエズス会教団への保護・キリスト教徒としての活動—豊前時代
- 5・巡察師の上洛の手引き
- 6・加藤清正に捕縛された巡察師らの解放—関ヶ原の戦い直後（@九州）
- 7・まとめ

【Q4】「片手に剣、片手に十字架」

- 1・戦闘行為はキリシタンの教えに反しないのか？
- 2・戦場に必ず修道士を同行
- 3・戦い方（キリシタン入信前）
- 4・戦い方（キリシタン入信後）
 - (1) 亀甲車
 - (2) 高やぐら
 - (3) 旗印
 - (4) 鉄砲、大砲

【Q5】秀吉の伴天連追放令

- 1・秀吉とイエズス会との蜜月
- 2・禁教令、発令さる！
- 3・伴天連追放令とは
- 4・伴天連追放令の動機
- 5・秀吉の伴天連迫害の様子
- 6・各大名たちの対応
- 7・伴天連追放令に対する官兵衛の態度
- 8・秀吉の信仰—無信仰？
- 9・豊後国内の様子—大友義統の態度が硬化

【Q6】わし、隠居する！

- 1・隠居後から関ヶ原の戦いまでの流れ
- 2・官兵衛・隠居する
- 3・一般的な隠居の意味
- 4・官兵衛が隠居した理由
- 5・私の立場

[6・如水の意味](#)

[7・豊前国内での活動](#)

[8・小田原攻め](#)

[9・官兵衛、出家する（文禄の役）](#)

[（1）出家に至る経緯](#)

[（2）巴漬の号の意味](#)

[（3）出家の意味](#)

[10・慶長の役、秀吉の薨去](#)

[11・家康への接近](#)

[12・関ヶ原へ](#)

[（1）キリシタン王国の建設](#)

[（2）官兵衛の活動に対する教団からの感謝](#)

[注釈](#)

[巻末史料](#)

[参考文献](#)

はじめに

平成26年のNHK大河ドラマが黒田官兵衛を題材とされることとなった。

従前的大河ドラマと同様、その主人公を題材とした書籍が、大河放送決定と同時に雲霞のごとく出版されている。その勢いたるや凄まじい。

ただ、それらの解説書の中には、官兵衛がキリシタンだったことに真正面に取り扱っているものが少ないのが実情だ。

その点が、私はどうしても気になった。

江戸時代に黒田藩士であった貝原益軒が藩命により編纂した『黒田家譜』に、官兵衛がキリシタンだったことに全く触れられていなかったり、金子堅太郎の『黒田如水伝』にも、添え物のように書かれていただけだったが、余計興味をかきたてた。

宗教がその人の行動原理とはならないのか。自分で選んでキリシタンになった官兵衛であれば、キリスト教の規範が彼の人生に与えた影響があるはずだ。それを無視して果たして官兵衛の実像を描き切れるのか

—————。

これがこの本を書いた動機だ。

官兵衛は、天正11年(1583)頃、高山右近、蒲生氏郷、小西行長らの勧めによって、大坂城下の教会堂にて受洗した、といわれている。ルイス・フロイスの日本史をはじめ、イエズス会の宣教師たちの書簡に登場する。

しかし、秀吉が伴天連追放令を出してから、進退極まって棄教した、なんていう偽説がまかり通ってしまっている—————なんだって!?

誰だ!そんなこと言うのは!ウソも休み休み、言うな—————つつつつ!!!!!

レポーター「こちら、現場からです。いまから、秀吉・家康に天下を取らせた天才「軍師」官兵衛さんに、直撃したいと思います!

こんにちは、官兵衛さん。棄教したって本当ですか?」

官兵衛「・・・・・・すまぬが、ノーコメントで」

レポーター「そこを何とか!」

官兵衛「それは、長くなるから本編で!」

レポーター「うまいことおっしゃいますな!」

読者のみなさんには、すでに一般に出版されている官兵衛本を読まれているかも知れない。しかし、私の本は、これらとは一線を画している。

いままで見知ったのとは別の視点から、官兵衛を見て頂く機会になれば幸いだ。

本書は、官兵衛に関して、一通りの知識がお持ちの方を中心に想定している。初心者の方は、まず何か1冊、官兵衛本を読まれることをお勧めする。もちろん、官兵衛のことを全くご存知ではない方もスラスラ読めるように極力配慮したつもりである。

それでは、官兵衛のキリシタン・ワールドへ、いざ!

平成26年正月

官兵衛の眠る博多の地で 著者しるす

凡例

■Q & A形式

読者の皆さんにテーマ、ポイントがわかりやすいように、この形式を採用した。
興味が湧いた部分から読んで頂いても、基本的に問題がない構成になっている。

■官兵衛の名前

官兵衛の名前はさまざまあったが、煩雑さを避けるため、すべて官兵衛で統一した。

■引用文及び出典

引用文においては、原文を鍵括弧（「」）で囲み、そのあとに括弧書き（『』）で出典を示した。

■年月日

年月日については、基本的に旧暦（西暦）の形式で記している。

【Q1】 『黒田家譜』にみる官兵衛がキリシタンだったことの痕跡

貝原益軒の『黒田家譜』は、官兵衛の事蹟がふんだんに書かれた最初の書物だ。

その『黒田家譜』には、官兵衛がキリシタンであったことについて、全く触れられていない。

その理由は何だったのだろうか？

そして、官兵衛がキリシタンだったことを知るためにはどうしたらいいのだろうか？

1・官兵衛の信仰って？

秀吉を除で支え、家康に天下をとらせた、といわれる官兵衛。その官兵衛がどう戦い、どう動いたか。それについては類書がたくさん出されている。本能寺の変の知らせを受けた直後の官兵衛の鮮やかな献策は見事なものだ。

しかし、一方で官兵衛は何を信じ、何をたのんで生きていたのだろうか。官兵衛の内面の信仰については、あまり真正面から触れられた本は多くない。

なぜこの問いを発したのかと言うと、それが重要なことだからだ。

官兵衛は、このことを抜きに語られることが多い。でも宗教は、文字通り宗（旨）となる教えだ。人生に指針を与えるもので、戦国の世の人々は何かしらの宗教を信じているのが普通だった。

たとえば、高山右近、小西行長、大村純忠、有馬晴信、大友宗麟。彼らはキリシタンであったことが必ず語られる。彼らの人生にキリシタンであったことが大きく影響している。極端に言えば、それ抜きでは語ることがあまりないほどであったから、必ずキリシタンであったことが出てくるのかも知れない。

官兵衛はどうだったか。彼も熱心なキリシタンであった。しかし、キリシタンとして語られることがほとんどない。類書に書かれている赴きはこうだ。別にキリシタンであろうがなかろうが関係ないと考えて、キリシタンであったことを無視して書かれているか、あるいは、一応キリシタンになったが、途中でキリシタンであったことを棄ててしまった、としている小説や解説書が殆どで、本当にウンザリしてしまう。

では、ほとんどの小説や解説書が底本とする『黒田家譜』や『黒田如水伝』には官兵衛がキリシタンだったことについてどのようなスタンスをとっているのだろうか。

江戸時代に黒田藩が編纂した『黒田家譜』には、官兵衛がキリシタンであったことは触れられていない。このことについて、金子堅太郎（注1）は、『黒田如水伝』の中で、次のように述べている。

「黒田家の書類中には、一も其の事実を記載したるものなし」と。

「其の事実」とは、官兵衛がキリシタンであった事実のことだから、まったく触れられていないという意味だ。私自身も探してみたが、本当になかった。まあ、予想した通りの結果であったのだが。

『黒田家譜』とは、どんな書物かと言うと、江戸時代の前期に福岡藩士の貝原益軒及びその高弟竹田定直が、3代藩主黒田光之の命令で書かれたもので、のちに幕府に提出され、一方で黒田藩士たちに読まれた。官兵衛や長政のことだけではなく、黒田家の先祖から長政以降の藩主の時代のことも書かれている。貝原益軒といえば、『養生訓』が有名だ。彼と彼の高弟たちは、戦国時代の史料や、各地の実地調査に基づいて『黒田家譜』を書いた。史料や実地調査に基づいて書かれた書物だったとはいえ、当時の政治状況や藩士への教育目的からキリシタンのことは全く触れることができなかったことは容易に理解できる。徳川幕府はキリシタンを禁制（禁止）にしたことはご存知の方も多いだろう。踏み絵を踏ませて隠れキリシタンを見つけ出したり、宣教師や信者たちを火あぶりにして処刑したりしたことを学校で習ったかも知れない。そんな時代だったから、藩祖である官兵衛がキリシタンであったことは不都合な真実だった。真実を書いてしまっているのは、かえって幕府に睨まれたり、場合によっては、藩が取り潰される可能性すらあった。だから、官兵衛がキリシタンであったことの証拠が、黒田藩自体によって、徹底的に隠滅されてしまっていて、もちろん、『黒田家譜』にもいっさい触れられなかったのである。

証拠隠滅?なんか物騒だな。歴史ではよく出てくる話だ。余談だが、読者のみなさんも、その点には充分に注意してほしい。

その証拠隠滅の確証の一つとして、よく引き合いに出されるのが、次の掛け軸だ。

掛け軸があるのは、黒田藩の領地のうち家老栗山利安の知行地にある朝倉の円清寺（円清は官兵衛の法号）だ。掛け軸には、官兵衛の画像と、その上に、彼の賛文（たたえる文章）が書かれている。賛文のうちキリシタンに入信したと明記されている部分が、明らかに何者かによって消去された痕跡が残っているのだ。そのことは、金子堅太郎が『黒田如水伝』で触れている（詳細は後述する）。

なぜ、証拠を隠滅する必要があるかったか。それは前述のとおり、キリシタンは禁制であり、さらに、キリシタン大名たちの多くは、幕府から何らかの制裁を受けていたから、黒田藩でも制裁を回避する必要があり、証拠隠滅に走ったのだろう。

江戸時代の前半の1600年代は、徳川幕府による「武断政治」（力のある武家を改易することで幕府権力を誇示しようとしたやり方。強硬路線）が華やかになりし時期だった。幕府に反抗する芽を摘むため、一見、何でもない理由で多くの大名が取り潰しにあっている。幕府から睨まれないようにうまくやらないと、取り潰される危険性があったから、黒田長政や家老たちは幕府を恐れて、種々の証拠隠滅を図ったと思われるのである。関ヶ原の戦いで徳川方の勝利に貢献した福島家は改易され10分の1の大幅減封となり、肥後の加藤家、備前の小早川家は滅亡に追いやられている。関ヶ原の戦いの際に、諸將の調略により大きな戦功をあげた長政は、家康から「末代まで粗略にしない」と相当感謝されており、その言葉を幕府側が重視したからかわからないが、不思議と黒田家はその後何度かピンチを切り抜けて存続している（たとえば、黒田騒動というお家騒動が起きたが、本来ならお家お取り潰しのところ、お咎めなしとなっている）。とはいえ、黒田藩の首脳部からしたらヒヤヒヤして、少しの隙もみせないぞ、という意気込みが感じられる。官兵衛がキリシタンだった証拠を極力隠滅し、さらに進んで、かなり早くからキリシタンを弾圧していたかのように偽装し、幕府への恭順の意思を積極的に見せなければならなかったのだろう。

また、『黒田家譜』により黒田家中で藩士たちを教育するときに、藩祖官兵衛や初代藩主長政が命懸けで頑張ったこそ、藩士である今日の君たちがあるだよ、っていうことだけ書かれていれば十分で、余計なことは書かれていない

方がよかった。「官兵衛はキリシタンを信仰していたからこそ、人を殺さずに極力生かすようにしたんだとか、生涯一人の妻を貰ったんだとか」ということが、キリシタンが禁止されていた江戸時代にあつて、藩士たちの教育上「よいことだったであろうか。そんなことよりも、「普段は儉約に努めていて、いざというときに思い切つて遣つたことが、大勝利につながつたんだ」とか、「戦さがいつ起きてもよいように普段から準備をしておくべきだ」などの訓話しか要らなかつたはずだ。『黒田家譜』は幕府にも提出するものだし。極論すれば、真実なんてどうでもよく、藩士たちの訓話になれば、綺麗事だけでよかったのかも知れない。

『キリシタン研究』の言葉を借りるなら、「日本におけるキリシタン時代の研究は、確かに非常に困難なことである。基礎的な研究が日本においてもヨーロッパにおいても不可能であつた徳川300年の間に、原資料があるいは失われ、破棄され、あるいはと滅されてしまったために、その研究がいかに難しいことになつたかは、私自身のような門外漢でさえわかる。さらに研究者たちが利用し得る文書資料の原典の多くは幾多の国語で書かれたごく古い手書きの原稿で残っているだけで、しかも世界中の幾多の文書館に散在している。」ということで、キリシタン関連史料は日本においては江戸時代の間に散逸・抹消されてしまっている。つまり、キリシタン関連史料や記述がないのは黒田藩に限った現象ではなく、全国的なものだつた。

『黒田家譜』に書かれていないからといって、官兵衛はキリシタンとは縁もゆかりもなかつたのだろうか、あるいは、(Wikipedia高山右近の項目に書かれているように)秀吉の伴天連追放令のあと棄教したのだろうか。

2・官兵衛、棄教説！？

もし、官兵衛が棄教していた物証を挙げよと言われたら、その1つの根拠は、神社や仏閣の再建などをし、神道や仏教勢力と穏当に接していることだ。熱心なクリシタンたちは異教徒の信仰を「悪魔の信仰」と言って、神社仏閣を破壊したりしている。しかし、官兵衛はその真逆の行動をとっている。ということは、官兵衛はクリシタンを棄てたのではないか。

3・官兵衛は棄教なんてしてない！する必要がなかったんだ！

しかし、官兵衛は棄教したのではなかった。もし、棄教していたら、イエズス会の史料に「背教徒」だとか、悪口が書かれるはずだが（他の武将で棄教した者は、悪口雑言を書かれている）、それは一つも見えない。

それに、神社や仏閣の再建など神道や仏教勢力と穏当に接しているのは、官兵衛の政治的配慮によるものだった。官兵衛はキリシタンであったものの、基本的に神仏とも共存を図るスタンスであっただけだった。それは、さまざまな宗教・宗派への信仰があるなかで、特定の宗教以外は認めない、というスタンスをとると、領内には種々の宗教勢力がいるので、領内が混乱する。むしろ、一定の理解を示して共存を図る方がよい。そのことは、大友宗麟など、それ以前のキリシタン大名の統治をみていても明らかだった。領主がキリシタンに帰依したからといって、領民たちにキリシタンを強制したから、領内が混乱し衰退を招いている。同じ轍を踏む官兵衛ではないだろうから、キリスト教勢力以外を優遇したからといって、キリシタンを棄てた証拠にはならない。

『黒田如水伝』にあるように、「如水は信長死去の翌年、天正11年（1583）、高山右近の勧誘によって、キリスト教徒になったが、後年、秀吉の茶席に招かれてから、茶を嗜み、また茶を嗜むによって、禅味を解し、ついに達祖門下の句に参じて、徹底するに至った。故に如水は、世界的宗教の見地から、キリスト教の真理を見破ったものなので、それに限界は、極めて寛大で、キリスト教徒が仏教徒を罵倒し、また、仏教徒がキリスト教徒を排斥したように、狭量である宗教観に、囚われた人ではなかった。」（『黒田如水伝』第13編第5章）

次に、官兵衛が亡くなったのは、慶長9年（1604）であって、その時期は徳川幕府もまだ積極的にキリシタンを弾圧しておらず、黙認の状態で、上級武士（大雑把にいうと大名たち）の禁教が定められていて、高山右近のように追放処分にあったキリシタン武将もいたが、表面上、棄教さえ装っておけば、棄教をする必要はなかった。その段階では、徳川政権によるキリシタン政策は秀吉が発令した禁制を継承しているにとどまっており、その禁制も不徹底で、宣教師たちは日本にとどまって活動を続けていた。貿易のため布教が黙認されている状態であったのである。また、関ヶ原の戦いで家康に勝たせた官兵衛は、キリシタン保護に周旋していた。家康は内心キリシタンを嫌っていたといわれるが、官兵衛が存命中はそれを真正面から出せなかった。もちろん、秀吉の時代も同様にキリシタンの布教は黙認状態だったから、官兵衛が秀吉や家康にはばかってキリシタンを棄教する必要はなかったのである。

また、棄教していなかったと思われる物証も見つかっている。そのひとつは、先ほど触れた、福岡県朝倉市の龍光山円清寺に残されている。朝倉は、官兵衛の股肱の臣である栗山利安の知行地であり、円清寺は彼が官兵衛を弔うために建てた寺である。なお、栗山利安は、官兵衛が有岡城幽閉の際に時々牢屋に忍び込んで会いに行ったり、落城の際に救出にいくなどの活躍を見せており、筆頭家老として官兵衛の臨終にも立ち会ったとされる人物だ。この円清寺にある前述の「黒田官兵衛像」という一幅の掛け軸の絵の上半分には宗儒という僧による官兵衛についての「讃」が書かれている。そこに、「一旦入○○宗門聞法談雖有年」という箇所がある。「○○」と2字○○は塗抹されているが、それは「耶蘇」か、「大白」の2字に相違ないと一般に言われている（『筑紫史読』）が、「南蛮」かも知れない。人目をはばかって少し削られているものの、これら13文字はわずかに読み取ることができ、官兵衛がキリスト教に入信していたことを示している。「一旦入南蛮宗門、聴法談雖有年」とは、「いったん南蛮宗門（キリスト教）に入り、法談（説教）を聴く年ありといえども・・・」ということで、キリシタンに入信していたという意味である。

4・官兵衛＝神道・仏教・キリスト教の三教共存説

『黒田如水伝』を書いた金子堅太郎は、官兵衛が熱心なキリシタンだったが、神道や仏教にも寛大さを示していて、これら3つの宗教に平等に接していた、としている。ちなみに、『黒田如水伝』の著者の金子堅太郎は、福岡藩士として藩校修猷館に学び、黒田長知公の渡米使節団に随行し、アメリカのハーバード大学で法学を修め、その後、明治憲法の起草に携わった高級官僚である。彼は、自分の立身出世の基は留学のチャンスくれた黒田家にあるとし、その恩返しもかねて、藩祖である黒田官兵衛の伝記を書いたと序文で述べている。ただし、『黒田家譜』のような「家譜」ではなく、あくまで日本史の一片として書くのであって、官兵衛のいい面だけを描き出して、恰好よく仕立てあげるつもりはなかったとも述べている。

これに關しての賛否は後述するとして、『黒田如水伝』は、『黒田家譜』のような時代の制約、つまりキリシタン禁制がない時代に書かれている。もちろん、『黒田如水伝』が書かれた明治末期から大正時代にも、キリシタンへの弾圧はあった。しかし、建前上はキリスト教も信教も自由であった。

この『黒田如水伝』では、西洋人が記した著述が引用されていて（ミカエル・シュタイチェン『キリシタン大名』、バジェス『日本耶穌教史』）、これらが官兵衛のキリシタン関連史料となっている。これらの著作は、江戸時代の我が国においては、もちろん入手困難だったから、『黒田家譜』を著した貝原益軒も見たことがなかったであろうが、明治の世となり、西洋から伝わったのだろう。あるいは、アメリカに留学した金子自身が海外から持ち帰ったのかも知れない。

『黒田如水伝』が、官兵衛の信仰に肉薄するために西洋人の書物を引用したように、もし、官兵衛のキリシタンとして側面を知りたいと思ったら、『黒田家譜』をはじめとする江戸時代に日本人が書いた史料だけを見てはダメだ。江戸時代の日本人が書いた史料や文学、講談などを拠り所として書かれた官兵衛論をいくら読んだって、官兵衛を知るためには充分ではない。

では、何を読んだらいいのだろうか。

まずは、イエズス会の宣教師たちの記録からだろう。官兵衛はイエズス会の宣教師から洗礼を受けており、ルイス・フロイスをはじめとするイエズス会の宣教師たちがこまめに書き記して、本国などに報告しており、官兵衛はたびたび登場する。上記のミカエル・シュタイシェンやバジェスは当時の日本で活動した宣教師ではなく、あくまで宣教師が残した書簡史料をもとに研究論文を書いているのであろうから、このような二次史料だけでなく、一次史料、つまり宣教師の書簡を読む必要があるだろう。もちろん、官兵衛自身や彼が関与した人たちの手紙や書簡が一番強力な証拠となりうるが、ことにキリシタン関連となると殆ど残されていない。今後の研究に委ねたい。

長々と書いてきたが、最後にもう一度強調しておきたい。

世間には官兵衛に関する本がたくさん出されている。これらは、『黒田家譜』や『黒田如水伝』を底本としているものがほとんどだ。『黒田家譜』や『黒田如水伝』を丹念に読んだ私にはよくわかる。いくら読んでみても、底本が同じである以上、似たりよったり。多少、他の史料を交えて解説を膨らませている書籍もあるが、似たり寄ったりだ。一部に奇をてらい、官兵衛から教訓を引き出そうとして無理やり飛躍している本もあるが。これらの本だけでは、官兵衛の考え方を理解するのは難しいかも知れないということだ。むしろ読めば読むほど堂々巡りで、誤った官兵衛像が出来上がってしまうかも知れない。もちろん、私が書いていることが、唯一絶対の真実などと言うつもりはない。ただ、今までに書かれた本を鵜呑みにしないで欲しいし、誤解していかれるのが残念だというだけだ。

それでは、官兵衛のより正確な理解を目指して、次のQ&Aからキリシタン関連の史料を見ていこう。

【コラム】徳川政権でキリシタンが禁止された経緯・理由は？

～ 許可にはじまり追放・迫害へ ～



ザビエル像

日本に初めてキリスト教をもたらしたのは、皆さんご存知のとおり、イエズス会（ポルトガル系）のザビエルだ。ちなみに、イエズスというのは、イエス＝キリストのイエスのことである。しかし、スペイン王がポルトガル王を兼ね、ポルトガルが衰退した。これにより、イエズス会が世界各地への布教を独占していた状態が崩れたのである。

秀吉政権末期には、スペイン系のフランシスコ会、ドミニコ会、アウグスティノ会が来日し、イエズス会と対立した。

家康は、慶長3年（1598）にフランシスコ会の宣教師ジェロニモ・デ・ジェズースと会い、スペイン船の関東誘致のための斡旋を依頼した。ジェロニモの江戸滞在を許可し、教会を江戸に建設している。家康はスペインへの接近により、スペイン領の呂宋（マニラ）やメキシコとの貿易を企図していた。

一方、慶長5年（1600）にオランダ船リーフデ号が豊後に漂着し、イギリス人航海士ウィリアム・アダムスとオランダ人航海士ヤン・ヨーステンが家康の知遇を得た。家康は、イギリスやオランダは貿易と布教を分離していることを知った。しかし、家康の生前は両国との貿易は振るわず、ポルトガルとの貿易が依然として大きかった。スペインとの貿易と同時に、ポルトガル船の欠航により財政難に陥っていたイエズス会を援助してポルトガルとの貿易も進めていた。そのため、キリスト教の布教は黙認された状態であり、キリシタンは全盛期を迎えることとなったのである。

ただ、家康は当初から布教禁止を志向しており、天正15年（1587）6月に秀吉が発令した伴天連追放令や上級武士を対象とした禁教令は、決して撤回されなかった。その後の流れは以下になっている。

- ・慶長10年（1605）、フィリピン総督に宛てた書簡の中で、日本は祖先の代から神国であるからキリシタンとは相容れないとして、布教の禁止を通告している。

- ・慶長11年（1606）4月、大坂城下に家康の内諾を得た武士に対する禁教令が出されており、天正15年に秀吉が発令した禁教令の有効性が確認されている。

- ・慶長17年（1612）3月、岡本大八事件が発生。この事件は、家康の側近本多正信の与力岡本大八と肥前国日野江城主有馬晴信との間の贈収賄の絡んだ疑獄事件。取り調べが進むうちに、駿府城の旗本や侍女の中にもキリシタンが存在することが明らかとなった。家康はキリシタン禁止を表明してその摘発を行った。

- ・同年6月、メキシコ総督宛の書簡で、日本は神国であり、主従・領主間の誓約が神仏への起請によってなされるから、キリシタンとは相容れないと述べている。

- ・同年8月、幕府は5箇条の禁令を出し、「伴天連門徒制禁」とキリスト教禁令を発令。秀吉政権では容認されたキリスト教の信仰自体も禁止された。

- ・慶長18年（1613）12月、崇伝起草による排吉利支丹文がだされ、將軍秀忠により全国に布告。幕閣の筆頭年寄大久保忠隣がキリシタン総奉行に起用され、京都で弾圧が始まった。

- ・慶長19年（1614）1月、各地の宣教師、高山右近ら有力なキリシタンが、長崎に集められ、同年秋にマカオやマニラに追放された。

- ・同年冬、慶長21年（1615）夏の大坂の陣で弾圧が中断。翌年家康が死去。

といった流れで、徳川政権下でキリシタンが禁止され、寛永14年（1637）の島原の乱につながっていくのである。

江戸時代初期には旧豊臣系大名を中心に大名廃絶政策が取られたために、家康、秀忠、家光の3代のあいだに、外様大名812家、親藩・譜代大名419家が改易された。幕府は改易、減封によって生じた空白地を天領（直轄地）にし、親藩・譜代大名を新たに配置し、外様大名を遠隔地に転封するなどして幕府権力の絶対優位を確立していった。関ヶ原の戦功で大大名となった黒田長政としては、もちろん幕府に対抗する力も意図もなく、幕府に憚ってキリシタンへの弾圧を強めていった。その過程で、官兵衛がキリシタンだったという物証を隠滅することになったのだろう。

【Q2】 官兵衛のキリシタン入信

官兵衛がキリシタン入信に至った動機や経緯は何だったのだろうか。

1・年表をみてみよう！

ここで官兵衛の年表をみてみよう。ここでは、四国平定戦あたりまで。ぼ～と眺めてみてほしい。

和暦 （西暦） 年齢	官兵衛に関係が深い事項	一般的な事項
天文15 （1546） 1	11月 姫路城で生まれる（姫路城主小寺職隆の長男、幼名は万吉）。	
弘治元 （1555） 10		10月 毛利元就が陶晴賢を厳島で破る。
永禄2 （1559） 14	11月 母（明石氏）が亡くなる。	
" 3 （1560） 15		5月 織田信長が桶狭間で今川義元を討ち取る。
" 4 （1561） 16	小寺職隆の近習として御着城に出仕（禄高81石）。	
" 5 （1562） 17	父、職隆に従い、初陣。	
" 7 （1564） 19	2月 祖父重職が亡くなった。	
" 1 （1567） 22	家督を継ぐ。	
" 11 （1568） 23		9月 信長、足利義昭を擁して上洛。
" 12 （1569） 24	5月 青山合戦（赤松政秀を破る）	
元亀元 （1570） 25		6月 信長、姉川の戦いで、浅井・朝倉連合軍を破る。
天正3 （1575） 31	7月 織田家に従属するため、使者として岐阜に赴く。	5月 信長・家康連合軍、長篠・設楽原の戦いで、武田勝頼を破る。
" 4 （1576） 31	4月 英賀合戦（毛利方の浦宗勝を破る） 9月 松寿丸を人質として差し出す。	2月 信長、築城中の安土城に入る。
" 5 （1577） 32	1月 秀吉が中国計略のため播磨に下向。居城姫路城を秀吉に提供。 11月 作用城（福原城、西播磨）攻略。上月城攻略。	1月 信長に謀叛した松永久秀、信貴山城で自害。
" 6 （1578） 33	2月 別所長治が叛旗を翻す。 5月 宇喜多直家が織田方に転じる。 1月 摂津国有岡城に幽閉される。	7月 上月城が落城。 11月 木津川河口の戦いで、織田水軍が毛利水軍を破る。
" 7 （1579） 34	1月 有岡城落城。官兵衛が救出される。	6月 竹中半兵衛、平井山の陣所で病没。
" 8 （1580） 35	2月 小寺政職が御着城から出奔。官兵衛は小寺姓を捨て、黒田姓に復姓。 3月 人質となっていた松寿丸が黒田家に戻される。 4月 国府山城を築き、これに移る。 6月 因幡、伯耆の国境に出兵。 9月 播磨国揖東郡に1万石を与えられる。	1月 三木城の別所長治が自害し、開城。
" 9 （1581） 36	3月 揖東郡で加増され、2万石となる。 6月 因幡国鳥取城攻め。 7月 淡路国志賀城に入り、四国の長宗我部元親に備える。	1月 鳥取城の吉川経家が自害し、開城。
" 10 （1582） 37	3月 備中国に出陣。 4月 宮路山城攻め。 冠山城攻め。長政の初陣。 高松城攻め。 6月 山崎の戦いで明智光秀を破る。	6月2日 本能寺の変で信長が明智光秀に包囲され自害。 6月27日 清洲会議にて織田家の後継者及び領地再配分問題の決着。
" 11 （1583） 38	8月 大坂城の普請総奉行として秀吉から5箇条の掟を受ける。 9月 大坂城築城開始。	4月 賤ヶ岳の戦いで、秀吉が柴田勝家を破る。
" 12 （1584）	1月 秀吉の媒約で、長政に蜂須賀正勝の娘を迎える。	4月 尾張の長久手で、池田恒興・元助父子、森長可が徳川軍に討たれ

39	3月 蜂須賀正勝とともに、毛利・宇喜多との国境画定のため中国に赴く。	る。
" 13 (1585)	5月 四国攻めの軍監として、讃岐・阿波に進攻。阿波国岩倉城を攻める。	7月 秀吉、関白に就任。
40	8月 父、職隆が亡くなる。	

(「黒田如水―百姓の罰を恐るべし―」小和田哲男著 ミネルヴァ書房 2012年1月発行 の巻末年表に加筆修正して作成)

2・黒田家の宗旨

江戸時代には檀家制度により家族の宗旨は基本的には固定されたが、戦国時代や安土桃山時代には、個人の信仰は自由であった。信じたいものを自由に信じていた時代。一方、官兵衛の家は、キリシタンではなかった。キリシタンの存在自体を知っていたかわからない。高山右近や小西行長のように家族ぐるみでキリシタンになった武将もいたとは大きく異なっていた。

黒田家の宗旨は何だったのだろうか。出身地の播磨国には、一向宗の拠点もあつて活動が活発であつたが、官兵衛の家は代々真言宗を信奉していたようだ。その傍証としては、

- ・当時、奈良の長谷寺（真言宗豊山派）は戦乱で荒廃していたが、父職隆が参詣のための長廊下を寄進している。



奈良の長谷寺の長廊下

「むかし、官兵衛の父の職隆は長谷寺に続く参道にアーケードを気付いて、参詣者が雨に濡れないようにした」（「黒田家譜」巻之十五 官兵衛遺事）。

- ・官兵衛の母の先祖（衣笠氏）が文永年間、明石郡友清村に新長谷寺を復興している。
- ・愛用した合子の兜を着用した姿は『御伽草子』の鉢かづき姫である。それは、もともと奈良県長谷寺の説話であつた（注2）。



ふくおか製鉄株式会社

愛用した合子の兜を着用した姿

- ・息子の長政が、若い時に使っていた異制吹返し（かきかえし）の兜には、三尊仏の梵字と豊山派真言宗の紋、輪違（りんご）いがつけられている。

- ・長政が、筑前領内の鞍手郡の長谷寺を復興している。

以上の理由から、黒田家は当初真言宗を信奉していたと思われる。ということは、官兵衛自身が黒田家の中で初めてキリシタンになったということになる。

3・日本にいつキリスト教が到来したか？

ここで、官兵衛がキリスト教に出会うまでのことについて話をしたい。

日本にキリスト教が伝来した時期は、ネストリウス派キリスト教（中国で景教と呼ばれたもの）が、秦河勝などによって伝えられた5世紀頃とする説がある。しかし、歴史的証拠や文書による記録が少なく、はっきりしない点も多い。

歴史的・学問的に見て証拠が多く最初の伝来とされているのは、イエズス会のフランシスコ・ザビエルによる布教である。戦国時代のさなか、天文18年（1549）のことであり、当初はほぼザビエル達イエズス会の宣教師のみで布教が開始された、とされている。宣教師たちは日本人と衝突を起しながらも布教を続け、時の権力者織田信長の庇護を受けることに成功し、順調に信者を増やした。

4・戦国時代にキリスト教が弘まった理由

キリスト教が日本に伝来したはいいものの、人々に受け入れられなかったら、立ち消えになっていただろう。そもそも何故、戦国時代の民衆にキリスト教（カトリック）が広まったのだろうか？

キリスト教団の側からの分析としては、以下のとおりとなる。要約すると、

(1) 戦国時代は統一権力の不在の長い騒乱が続いたことで、人々の信仰には大きな変化が生じていた。人々は万物を超越する絶対神を求めるようになり、その神の下での救済される方向に変化しつつあった。

(2) キリシタンが日本社会に浸透していった背景に布教に伴う社会事業があり、受け入れる側にも現世利益を期待する心理が働いていた。

(3) 一方、在来の宗教（仏教、神道など）は個人の魂の救済に向き合うことができなかった。

(4) さらに、戦国大将たちが理解を示し、保護したことで、影響下のある人々が従ったこと。

では、詳しく見ていこう。

(1)については、戦国時代は統一権力の不在の長い騒乱が続いたことで、人々の信仰には大きな変化が生じていた。人々は万物を超越する絶対神を求めるようになり、その神の下での救済される方向に変化しつつあった。

当時のカトリックは、終末時における聖母マリアによる救済へのとりなしを信じる信仰があり、「アベ・マリア」の祈りがその中核だった。最後の審判を下す神デウス、その代理人イエス、人々の救済を仲介する聖母マリア、この信仰は、仏教の大日如来・阿弥陀如来の下における審判と死後成仏の信仰、罪を犯した者も死後成仏に向けて救済する観音菩薩という日本の信仰と類似している。

ザビエル布教の核心は、天地創造、神の恩顧、最後の審判であると述べているので、当時の日本人の信仰心を深く分析していたのだろう。

キリスト教布教書の日本語訳（「どちりいな・きりしたん」カトリック教会の教理本、他に「妙貞問答」や「天地始之事」などの布教書がある、しかし聖書全訳はなかった）を行なった宣教師が、当初はデウスを「大日」と訳し、その間違いに気づいた後は「天道」と改訳したもの（日本の宗教事情を考慮して仏教用語を多く借用したが、後に仏教用語を払拭した改訂版を作成した）、日本人に広がっていた唯一神信仰に注目し、その違いにも気がついていた事を示している（注3）。

日本の大日も天道も超越した神だが、宇宙の創造神ではなく、最後の審判を下す神でもなく、人間を超越した自然を神格化したものだった。宣教師もこれに気づき、日本の神と西洋の神で最も似通っていたのは観音菩薩と聖母マリアであり、どちらも別け隔てなく人々に慈悲を及ぼし救済の手を差し伸べる神で、これを布教の中心に据えている。

(2)については、キリシタンが日本社会に浸透していった背景に布教に伴う社会事業があり、受け入れる側にも現世利益を期待する心理が働いていた。

宣教師は貧しい民衆に教えを伝えるために隣人愛を実践した（全国各地で病院や孤児院、学校経営、巡回治療）に当たった。長崎には、男女別の慈悲屋（養老院、孤児院、難民救済所）や養生屋（ハンセン氏病のための病院）が、農村では農繁期に託児所を作り、農業技術を伝授したりした。信者は棺かつぎや墓掘りも行い、娼婦の救済、殉教者の遺族の保護など、さまざまな活動を行ったが、こうした事もキリスト教の広がりにも寄与したのではないかと、言われている。

(3)については、在来の宗教（仏教、神道など）は個人の魂の救済に向き合うことができなかったことがあろう。

比叡山や高野山をはじめとして、諸行無常（すべてのものは必ず変転して常がない）の世の中で、自分は死んだらどうなるのか、無上菩提（崩れない幸福）を求めて、山に入って修行する者は昔からいたものの、時代を経るに従って、仏道修行という本来の目的から逸脱するようになった。

たとえば、比叡山延暦寺については、次のような記述がある。

「天下の嘲弄を恥じず、天道の恐れ顧みざる淫乱」（『信長公記』）

信長の家臣であった太田牛一が記したものであるため、「比叡山の焼き討ちをした」と言われている信長を擁護して、比叡山側を悪く書いた面が疑われるものの、少なくとも、一個の武装集団あったことは他の史料にも出てくる。

延暦寺は天台宗の最澄が開いた女人禁制の山で、浄土宗の祖法然、浄土真宗の開祖親鸞、臨済宗の栄西などの一宗を開いた僧たちが皆修行する聖域であった。王城鎮護の靈山として君臨しながら（御所の鬼門の方角につくられた）、山法師と称された数千人の僧兵を擁し、特に、4階層（院来、堂衆、学生、公人）のうち、最下層の僧兵と呼ばれる公人たちが腐敗していた。合戦で敗れた者たちが比叡山に逃げ込み、形だけの出家を装っていた者もあったと言われる。

天台宗の僧侶と言うと、剃髪しているのかと思いきや、普段は有髪で、いわばごろつきのような輩であった。常に叡山の権力を笠に着て、扇を怒らせて山領の年貢の督促などをし、有事の際には有髪を隠すために白布で頭を巻き、黒衣をまとい、武器を手に暴れ、日吉大社の神輿をかついで都大路になだれ込み、要求貫徹するまでデモをやっていた（その様子を記した絵巻物もある）。



（上の絵図：僧兵が神輿を担いで強訴している様子）

彼らの多くは、叡山の門前町坂本や下坂本にたむろし、女色を漁り、魚鳥を喰らい、遊興費に困って料米、灯油、法儀料、布施などをくすね、不正な賄賂を貪り、あこぎな高利貸などをやり、脅し・かたりの果ては暴力を振るっていたのである。

延暦寺の門前町の坂本は、交通の便がよく、天台宗の栄えとともに、北陸、東国から大量の荘園年貢米が入り、全国の多数の末寺から得度、灌頂、加行のために集まる宗門の人たち、延暦寺に参詣する団体の人たちで賑わっていた。その人たちのための旅籠、精進料理、接客業者が増え、酒を般若湯、遊女を蓮葉と呼ぶ歓楽の巷が各所に出現していた。

公人と称する前記の破戒坊主たちは、山門領からの年貢米収納管理のほか、三千僧徒の食糧、消費物資の調達を掌り、警備も担当する役得をよいことに、歓楽の巷で、あこぎな生き様に我を忘れていたのである。

日本各地にも武装集団と化していた仏教勢力はたくさんあった。世俗化した既存の仏教に、個人の魂の救済に応えることは難しかったのかも知れない。基督教（カトリック）に救いを求めて洗礼を受ける者が続出した。

(4)については、戦国大将たちは、基督教の宣教師がもたらした西洋の文物や知識に感銘を受け、その西洋の宗教ということで興味を持って聞いているうちに、共感できる部分が出てきたり、宣教師たちの「まじめな」生活ぶりへの好感があって、人によっては受洗するほどに信仰が深まったということなのだろう。

イエズス会の宣教師たちも権力者をキリシタンにしてしまうことの重要性に気づいており、積極的に大名たちに接触を図っていたようである。キリシタンに理解を示した戦国大名のもとで、保護を受けた教団が盛んに布教活動を行い、集団改宗などが行われた。

5・官兵衛のキリシタン人信時

このようにして日本に伝来し、弘まっていたキリスト教が、いよいよ、官兵衛の目前にやってくる。

『黒田如水伝』には、ミカエル・シュタイシェン著『キリシタン大名』の記述を引用し、官兵衛が入信した時のことを述べている。これによれば、大坂にいたときに高山右近の勧めによりキリシタンとなり、洗礼を受けたようである（洗礼名サイモン）。

「これ以前に、高山右近はキリシタンとなったが、今は大坂に参集した諸侯を歴訪して、キリシタンの教理を説き、熱心に勧誘したので、小西行長は一族を挙げて、その宗教に帰依して、前田利家、蒲生氏郷、石田三成らをはじめ、多くの諸侯も、これを信仰するに至り、のちに、黒田官兵衛も右近の勧誘により、キリシタンとなり、洗礼を受け、「サイモン」と称した」（『ミカエル・シュタイシェン』著 キリシタン大名）（『黒田如水伝』第4編第4章）。

「以上は西洋人の著述による記事なので、あるいは布教のため、誇大に書いた嫌がないわけではないだろうが、如水がまさしく、キリスト教徒になって洗礼を受け、名前を「サイモン」と称したことは事実である。まして、如水が常用した印章は、確かにこの事実を証明している。ここでその印章をみると、丸の中に十字架を刻み、その周囲に、羅馬字によって、「サイモン・ジョスイ」と彫っている。そのため、如水は信長死去の翌年、天正11年（1583）、高山右近の勧誘によって、キリスト教徒になったが、・・・」（『黒田如水伝』第13編第5章）

と述べられており、天正11年（1583）に高山右近の勧めで入信したとしている。

（1）入信時期

しかし、官兵衛がキリシタンとして洗礼を受けた時期には諸説ある。

- (1) 10代 （まさか・・・）
- (2) 20代 （もしかしたら・・・）
- (3) 30代前半（十分ありうる・・・）
- (4) 30代後半（通説）

(1)については、イエズス会の書簡の記述に基づくものだ。

「本年、大坂に関白殿の家来で身分が高く、31年位前にキリシタンになった貴族の小寺官兵衛（黒田孝高）という名の人が居合わせた。」（1586年10月17日付、下関発信、ルイス・フロイスのインド管区長アレシャンドロ・ヴァリニャーノ宛書簡）とあり、「31年前」であれば、官兵衛がまだ1歳のときである。親族にキリシタンはおらず、寺で読み書きを習っていた時期である。

この「31年前」というのは、書き間違いだろう。

イエズス会の他の書簡には、「2年前」とされており、「2年前」という方が正しいのだろう。「31年前」だと、我が国にはすでにキリスト教は伝来していたが、將軍足利義輝がキリスト教の布教許可を出す永禄3年（1560）よりも前であって、京都に比較的近い播磨で宣教師に出会うのは至難だったと思われる。ちなみに、永禄8年（1565）に扇町天皇が京都からイエズス会を追放するよう命じるほどだったから（義輝は命令を無視しているので実現しなかった）。

(2)については、京都周辺でのイエズス会による布教が行われていたため、何らかの理由で京都へ行った官兵衛がキリスト教に触れたことは十分に考えられる。ただ、それを明確に示す史料はない。

(3)については、(2)と同様、小寺家の使者として信長を訪問した際に京都に立ち寄り、そのときに信長に保護されていたキリスト教に触れた可能性が十分に考えられる。

それを明確に示す史料はないが、宣教師のあいだで「小寺官兵衛」として通称されており、官兵衛が小寺姓を捨てて黒田姓に復帰する1579年より後の宣教師の書簡などにも出てくる。これは、1579年よりもっと前から宣教師とのつながりがあった可能性はあったとする説もあるが、単に宣教師が「小寺」か「黒田」か区別せずに勘違いして記載していた可能性もあり、確実ではない。

また、福本日南氏は、「官兵衛は親交があった摂津国主荒木村重（引用者注 織田家中で村重が官兵衛を取り次ぐ役だった。親交があったことを示す秀吉の書状が残っている）を通じて摂津高槻城主高山右近に知り合って、キリスト教の教義に触れていた可能性を指摘している」（『黒田如水』7）としており、官兵衛が信長に拝謁したのが31歳であるから、その後、村重を通じて高山右近に30代前半に出会っていた可能性がある。

(4)については、これが一番確実であって、教会側の史料によれば、秀吉が播磨国を平定した後から、秀吉が柴田勝家を倒して大坂城を築城し城下町にイエズス会の教会堂が建てられたあいだのどこかと言われている。

イエズス会の記録では、この時期には、京・大坂近辺で多くの武士たちが受洗したことが伺える。用心深い官兵衛はミサに出かけてもなかなか改宗せず、その決断を下すのには時間をかけている。

1585年7月のイエズス会の宣教師の書簡に受洗したとあるので、1585年7月以前には、受洗していたのは確かなようだ。

「小西行長が官兵衛を動かし、網をかけたのであるが、高山右近と蒲生氏郷が受洗に導いた」（1585年7月13日付、牛窓発信、フランシスコ・パシオの書簡）。



小西行長(左) 高山右近(右) 像

また、福本日南氏の『黒田如水』では、彼がフィリピン・セヴァスチャン教会を訪れ、その教会の記録から「五十余名のキリシタン大名中、オーギュスチン（前田利家 引用者注）と同じく羽柴殿の眷顧を受けた一貴族に、クデラ・カムビョイドノがいた。ジュスト（高山右近）の勧誘によって、キリシタンとなり、それ以来、その名をシモン・クデラと称し、ジュストを鑑として、大いにその徳を修めた」とあり、福本氏は「しかし彼のキリスト教に接触し、高山右近の導きで受洗した（「衿式する」）のが何時なのか分からない」とし、入信時期の特定はしていない。

ただ、当時の戦国大名の間では、茶の湯とキリスト教が流行しており、高山右近ら茶の湯をたしなむキリシタン大名との付き合いの中で、官兵衛が徐々にキリスト教への関心を深めていったとも言われている。

官兵衛は、はじめ茶の湯なんて武士のすることではない、と嫌がっていたが、秀吉から茶の湯の効用を聞いて納得し、以後は嗜むようになった。もし、秀吉と官兵衛が屋敷で会っていたら、諸将は何事かあったと訝るであろうが、茶の湯と称して茶室で会えば疑われずに、重要な話もできるというわけだ。少しあとの時期になるが、聚楽第では千利休の屋敷と隣同士であったこともあり、茶の湯の手ほどきを受けている。

どのような形にしろ、官兵衛は秀吉が勝家に勝利し大坂城を築城したところに受洗したとするのが素直だろう。

ちなみに、官兵衛に受洗に導いた高山右近と小西行長は共に一族で受洗していたが、蒲生氏郷はそうではなかった。彼は、キリスト教に入信する前、高山右近に追い回されるほどしつこくキリスト教の話突き付けられたことがあった。興味がなかった氏郷は頑なに耳を塞いでいたが、右近が「茶の湯」の話を持ち出すと急に興味を持ち出すようになり、キリスト教に入信したといわれる。その後、逆に氏郷が右近を追い回すほど深く没頭してしまっただけだ。

（２）洗礼名

次に、官兵衛の洗礼名は「Simeon」で、和文では「シメオン」と表記されることが多い。



上記は、官兵衛が書状などに用いた印判であり、中央に十字架があり、周囲に「simeon josui」と記されている。

この「Simeon」だが、ヨーロッパ言語の発音を、日本語の表記に無理やり落とし込むため、聴く人によって「サイモン」「シモン」と聞こえることもあろう。ハーバード大学で法学を修めた金子堅太郎は『黒田如水伝』に「サイモン」と記している。私は特にこだわりはないが、「サイモン」はアメリカ英語読みに近いからポルトガル語発音と異なるし、「シモン」は毛利（小早川）藤四郎秀包の洗礼名として表記されるので、「シメオン」と表記しておく。ちなみに、官兵衛の洗礼名は「ドン・シメオン」と書いている本や資料が散見されるが、そもそも「ドン」は洗礼名ではなく、ポルトガル語の男性の尊称だから、洗礼名は「シメオン」が正しい。宣教師たちが「シメオン」と呼んでいたのを、名前まで「さん付け」で呼んでしまっているのはおかしな話だ。

ちなみに、宣教師の書簡には、「小寺シメオン官兵衛（くわんびょうえ Quambioye）」などと記されていることがある。「官兵衛」は「かんべえ」ではなく「くわんびょうえ」と当時発音されていたのだろう。

洗礼名「シメオン」とはどういう意味があるのだろうか。

官兵衛自身が決めたのか、司教や宣教師がふさわしい名前を選んで授けたのかはわからない。「シメオン」とは、旧約聖書の創世記によるとヤコブとレアの第二子であり、イスラエルの12支族の内シメオン族の祖とされる。「シメオン」は、聖人ではなかった。かなり血の気の多い性格で、シケムという名のカナン人によって妹のディナが強姦された際、妹のために街中の男を殺し、略奪を働いている（34章）。父親ヤコブも、シメオンの「怒りは激しく、憤りは甚だしいゆえに」、「怒りのままに人を殺し」たと言って死の間際まで嘆いている（同49・5-7）。その名前が果たして、官兵衛の人生と符号する部分があったのかどうか、残念ながら現時点ではよくわからない。



6・キリシタン受洗のきっかけ

では、なぜ官兵衛はキリシタンになったのだろうか。実家は仏教を信奉していたのに、キリスト教に惹かれた理由は何だったのだろうか。

まず、官兵衛にとって身近な宗教といえば、官兵衛が少年時代に読み書きなどを学んだ寺、仏教であった。しかし、前述のとおり、仏教界はその当時の日本では、人々の魂の救いを与えるものではなく、腐敗・墮落していた。また、江戸時代のように戸籍と檀家制度がリンクしている時代ではもちろんないので、何の宗教を信じるかは基本的に個人の自由だったと考えられる。もちろん、郷村における周囲との軋轢を避けるために保守的だった面も否定できないが、現代に近い信教の自由があったのである。

仏教ではなく、キリスト教に入信した動機は内心の問題であるし、宣教師の書簡の中でさえも直接的に書かれていないため、推測するほかしかない。諸説あるが、

- (1) 14歳で母と死別した葛藤によるもの。
- (2) 33歳で、有岡城の土年に1年間囚われた葛藤によるもの。
- (3) 実利目的。宣教師との交流による西洋技術の習得、鉄砲・火薬の入手の斡旋を受けるために入信したとする説。
- (4) 特に(1)~(3)のようなものはなかったが、キリスト教の教義が自分の性格や生き方にフィットしたから。

(1) 14歳で母と死別した葛藤によるもの。

官兵衛が14才のときに母明石氏と死別したことにより受けた心の傷が原因となって入信したというものである。その当時は、官兵衛は和歌にのめり込んで傷を癒そうとしたが、僧侶に諭されて和歌を封印して戦国武将として生きる決意をするのが、『黒田家譜』に書かれている。どうして和歌にのめり込んだのか。

官兵衛は、7歳の頃から円満寺の僧侶から読み書きを学び、そうした勉強より、弓馬や他の子供たちと合戦の真似をして遊ぶのを楽しんでいたが、母の死を境に読書に耽ったのである(『黒田如水伝』)。母親が愛読していた『古今和歌集』をはじめとする八代集、『伊勢物語』『源氏物語』などに耽溺したという(崇福禅寺の墓碑銘)。

黒田官兵衛の母方の祖父・明石宗和(正風)は、播磨国明石郡の枝吉城主であった。隠月斎の号を名乗り、関白・近衛植家・前久父子の歌道の師範だったという。武家にして、公家に歌を教えるほどの腕前だった。その娘、やがて官兵衛の母となる岩姫も都育ちで父の薫陶を受けて育っている。母からその道を習い、母を亡くしてショックから、母を偲んで和歌を詠み祖父と同様の道を進もうとしたのだろうか。あるいは、単に思春期に文学青年に変わったということなのか。

母を若くして亡くしたことはショックだったことを想像に難くない。幼い頃に父母を亡くしたショックで、出家して菩提を求めて修行に入った人は数多い。ただ、官兵衛が母親と死別したのは、元服の直前の14才である。多感な時期に母を亡くしているとはいえ、養育してくれた乳母や侍女もまわりにおり、父職隆も存命だった。職隆の継母との軋轢があったのだろうか。しかし、当時は戦国の世。弱肉強食の時代。見かねた円満寺の僧に「戦国の武士がそのようなことをしている場合ではない」と諭されて、我に返った官兵衛は、その心の傷に蓋をして、その後多忙な日々を送っていたが、賤ヶ岳の戦いで勝利して大坂城を築城し、秀吉の天下取りの可能性がぐっと大きくなった時期に父の間の平和の中で、ふと、その蓋が開き、亡くなった母はどうなったのだろうと思い悩んだ、ということがきっかけだったのかも知れない。その時期に、和歌の再開していることは偶然の一致だろうか。

(2) 33歳で、有岡城の土年に1年間囚われた葛藤によるもの。

有岡城の土年に1年間囚われたことは、非常に過酷な体験だったことは想像に難くない。『黒田家譜』『黒田如水伝』司馬遼太郎氏『播磨難物語』など、名場面として描かれるのが、この有岡城の幽囚だ。

○村重に捕縛された歴史的背景

一応、官兵衛が村重に捕縛された歴史的背景について話しておく(ご存知の方は読み飛ばして頂いて構わない)。天正6年(1578)、一時は播磨国の大部分を平定したかにみえた織田勢であったが、尼子勢を入れた上月城を救援することができずに毛利勢に落とされると、毛利勢の調略が成功し、3月、三木城の別所長治らが謀反を起こした。播磨の織田方であった小寺家も毛利方につくかどうか判断に悩み、その後、1月、摂津有岡城の荒木村重まで謀反を起こしたとき、官兵衛は荒木村重に織田方につくように説得に行く。自分が過日、弁舌によって播磨の国人たちを織田方に誘うと信長の面前で宣言した手前、それがいったんは実現したものの、逆転して毛利方の巻き返しにあった状況を打破しようとしたのである。しかし、村重に捕縛され、有岡城の土年に幽閉されてしまう。一説には、一時信長についた小寺政職が、毛利方に寝返ろうとした官兵衛が邪魔になったとか、信長や秀吉に重用される官兵衛を快く思っていなかった政職が、わざと荒木村重を説得して織田方に引き戻せば自分も織田方につこうと官兵衛に言い、官兵衛を荒木村重に許に行かせ、村重に殺させようとして画策したとされている。

だが、村重は官兵衛を殺さなかった。生かした理由には諸説ある。この件は、改めて別の巻にて述べることにさせていただきます。



有岡（伊丹）城跡

○牢屋の中での“名”場面

通説によると、不潔で日があまり当たらない土牢の中で、1年間過ごしたことになる。これは単に、座敷に軟禁状態に置かれたのと環境が全く違う。もちろん、現代日本の刑務所とも全く違う。非常に過酷な環境であつたに違いない。

その土牢の中で、播磨国にとっても難局であるにもかかわらず、秀吉も主家も一族も何も助けられない。それどころか、自分自身の命が危うい。外がどうなっているかわからない。信長に人質に出した松寿（のちの長政）は殺されてしまうかも知れない。父上は松寿を助けるために織田方に残ることをご決断されるだろうが、孤立して他の国人に攻められていないだろうか。ああ、話し相手がない。牢屋の中での思考がぐるぐる堂々巡りに入っていく。体が錆び付いていく。そんなギリギリの状況の中で、日差しがほとんど刺さない壁に蔦を張ってキレイに咲く藤の花に気づく。それで藤の花を家紋にする・・・というエピソードは、金子堅太郎が初めて『黒田如水伝』で書いた話だ。『黒田家譜』には、腹心の栗山利安が度々牢屋に忍び込んで情勢を伝えていたり、話し相手や身の回りの世話をしてくれる人も現れている（話し相手となった加藤某という武士の子供は、後に家臣として取り立てている）。

ドラマや小説で名場面として描かれているが、果たして、想像通りの過酷な環境だったのか。官兵衛に衝撃を与えるほどの悲惨さだったのか。謎が残る。

○『黒田家譜』の描写

まず、『黒田家譜』では、どのように描写されているのだろうか。

「官兵衛は長らく獄中であつて、とても窮屈であつた。この間、家臣の母里太兵衛、栗山善介、井上九郎二郎（のち九郎右衛門、晩年周防）などが交代で商人の恰好をして、官兵衛の牢獄の近くまで行って、官兵衛の安否を確かめていた。中でも栗山善介は、伊丹の町の銀屋に知人がいて、官兵衛と話しをしようと頼んだところ、銀屋はうやうやしく承知して、善介を我が家に隠しておいて、夜になって善介と共に、官兵衛の牢屋の辺りに近づこうとうろうろしたが、牢の表の門番も警戒が厳しく近づけなかった。牢の裏にはため池があつて、牢番を置いていなかったのを見つけ、夜陰にまぎれて善介はひそかに池を泳いで渡り、牢に近づいて、播磨の情勢、天下の成り行きを話した。かの銀屋の知恵で牢番にながしかを渡して取り入り、しばらくのちは、話をするのも多少自由になった。

このとき摂津国の武士で伊丹兵庫頭の親類、加藤又左衛門という者がいた。荒木摂津守が摂津を治めてから兵庫頭と同じく荒木に属して、伊丹城にいたが、官兵衛が牢屋で苦しんでいるのを見て、気の毒だと思つた。その間、ずっと仲良く接していた。官兵衛はその情が深いことを感じて、又左衛門に語つたのは、私がもし無事に本国に帰れたら、あなたの息子を一人私のところに送ってほしい。松寿丸の弟のようにして養育するだろうと、堅く約束した。こうして有岡城落城後、その子である加藤玉松が幼少であつたが、官兵衛の許に來たのを、官兵衛はこれに黒田姓を授け、自身の子供のように愛育した（玉松は後に三左衛門と名乗った。このとき官兵衛の家臣井ノ口兵介（のちに村田出羽と名乗る）が母の妹で、荒木に仕えていたが、官兵衛が幽閉されていた間、衣服などを洗い清めてくれた）。・・・（中略）・・・

11月滝川左近、伊丹城を陥し、孝高の牢番も逃げ去つた。ここで孝高の家臣栗山善介が来て、孝高がまだ獄中にいるのを見て、牢の口の鎖を打ちこし、孝高を牢から出したが、長らく幽閉されていたので、弱つて足がすくんで歩くことができず、頑丈な者に背負わせ、町屋がすべて焼き払われたので、近くの百姓の家に入り、寄せ手の武士に孝高の知人があつたので、事情を話すと、その者から衣服と食べ物が送られてきた。孝高は、それから有馬の湯に滞在し、池の坊左橋右衛門の家に寄宿し、湯治をした。池の坊左橋右衛門は甲斐甲斐しく世話し、有馬の者たちを使つて、数人で播磨まで送つた。こうして、播磨に戻ると、一族の者たちが亡くなつたと思つていたが生きていたことを皆で喜んだ。その数日後、孝高はだんだん氣力が出来たので、秀吉に面会した。秀吉は孝高の手を取つて、一命を捨てて敵城へ赴いたのは、本当に忠義であつた。長らく獄中にあつたときの苦しさは、耐え難いものだったろう。しかし、命をつないで再度対面できたのは大変うれしいことだと言って、涙を流した」（傍線筆者）とあり、官兵衛の内面にまで踏み込んで書かれていない。

○『黒田如水伝』の描写

『黒田如水伝』には、上記の『黒田家譜』を引用し、それをベースにしつつ、官兵衛の内面に踏み込んだ記述をしている。

「いま官兵衛が入れられていた獄舎は、有岡城の西北の隅にあつて、その後ろには、水底が深いため池があつた。三方は竹藪で囲まれていたので、太陽の光を見ることができず、陰鬱で、湿気が常に皮膚を覆い、さながら今生の地獄であつた。しかし、官兵衛に一筋の光明が差し、絶望から救つたものがあつた、それは、小寺家からの付け人母里太兵衛、栗山善助、家臣の井上九郎次郎が、この間に官兵衛の安否を確かめるため、商人の姿に変装して、姫路から交代代で有岡城に行つて、その探索に奔走した。栗山善助は、伊丹の銀屋（金銀細工商）に、新七という知人があつたので、まず彼にその内意を明かに相談した。新七は元来義侠心に富んでいたので、善助をわが家に隠しておいて、ひそかに有岡城内の状況を調べてみると、官兵衛が入れられている獄舎の後ろに、ため池があることを見つけ、しかし、昼間は警戒が厳しくて容易に近づくことができないので、夜暗闇に乗じて善助を伴つて、ひそかに城内に忍び込み、善助にため池を・・・（中略）・・・

官兵衛は、栗山たちの苦勞と、銀屋新七の義侠心によって、そのときの天下の形勢を知り、天がまだ自分を見捨て

ていないことを喜んだが、いつ牢屋から出てお日様を拝むことができるのかと思ってた。・・・（中略）・・・
今や蓋世の雄図（世を覆い尽くすほどの遠大な計画）を抱いた官兵衛は、有岡城内の獄舎に呻吟し、座ったり寝たりすることも不自由で、陰鬱な草むらの下に、空しく時運の変転するのを待っていたが、不思議なことにある日、藤の若蔓が、牢屋の柵を伝って伸びてきていて、新芽を出し、紫の花が咲きだして、官兵衛に向かって、未来の瑞祥を告げているようだった（筑前古老の話）、官兵衛がひそかに思ったのは、これは天が私を助ける吉兆だろう、いずれ遠からずこの牢屋を出て、私の胸中に鬱屈する経緯も、藤の花のように再び咲きだすときがあるだろうと、大いに自分を励まし、一日千秋の思いで待っていた。

梅雨も終わって、夏となった。肉がそげ落ち、残り少ない血も蚊に食われて、ますます憔悴していた」（傍線筆者）と書かれている。

○あらためて、牢屋の中での様子

土牢というのは、罪人を閉じ込めるところだ。牢の後方に池があったということは湿気がすごかっただろう。蚊に食われたことだろう。しかも、日が差さなかった。そのような閉塞した空間に、不自由な状態で、食事も満足に与えられずに、ずっと閉じ込められる。気分転換に体を動かすこともできない。1年あまりの間、官兵衛はその暗くて狭いジメジメした土牢の中で、身動きもままならず。人を生かす最低限の食事を与えられるだけで、いつ解放されるとも知れない生き地獄のような日々を送ることになった。しかも、いつ終わるとも知れないのだ。当時の織田方の不利な状況や家臣たちが時々知らせてくれた状況の変化からして、多少時間がかかるかも知れないと覚悟していたかも知れないが・・・

○官兵衛の思考のループ

この延々と続く独りきりの時間の中で、できることは限られていた。時々やってくる家臣や世話をしてくれる人と話す以外は、何もすることはない。信長の前で大見栄を切って、自分の弁舌で播磨の国人を織田方に勧誘した。合戦でも寡兵で敵を打ち破る手柄を立ててきた。しかし、今の自分はどん底にある。官兵衛の頭の中で、次のようなことが脳裏を浮かんできて、思考のループに入ってしまったと想像できる。

なぜ俺がこんな目に遭わなければならないのか。

誰も助けてくれない。

このような無為な日々の意味はあるのか。

いつそあきらめて死んでしまえば楽になるのではないか。

光、父や家臣たち、何より信長に人質となった長政はどうなっているのだろう。

秀吉は自分の失策によって窮地に陥っているのではないか。

信長はこの事態に対してどう出てくるだろう。

俺はこれで終わるのか。

それにしても、荒木村重を信じた俺が、馬鹿だった。

おそらく村重の裏で糸を引いていたのは、村重へ説得を命じた小寺政職だ。

あんなに小寺政職に尽くしてきたのに、こんな仕打ちをするとは、憎んでも憎み切れない・・・

ぐるぐる結論の出ない思いを巡らせることだけが、官兵衛にできたたった1つのことだった。屈辱感と情けなさ、やるせなさにうちのめされ続けたに違いない。

苦悩する官兵衛の姿は、現代の私たちにとっても象徴的だ。うまくいつている自分の能力を鼻にかけて、有頂天になっていたところ、とんでもない落とし穴にはまって、なかなか抜け出せずにもがく姿。自分はこれで終わってしまったのだからと、先が見えない不安に陥る姿。家族は、仲間はどうしているだろうか、でも自分にはなす術がない。誰が俺をこんな目に遭わせるのだ！と犯人探しをしてみたりする姿。あいつを信じた俺がバカだったと自己嫌悪にしてみたりする姿・・・

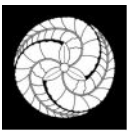
○藤の花

そんな官兵衛を励ましてくれたのは、一房の「藤の花」だったという。季節は秋から冬、やがて年を越して、春となり、初夏がやってきた。官兵衛はある日、牢の柵のところに「藤の花」が咲いてくことに気づく。その美しく可憐な花に勇気づけられて、官兵衛は生きる望みをつないだというのである。この印象的なエピソードは貝原益軒の『黒田家譜』には記載がなく、金子堅太郎の『黒田如水伝』によって「筑前古老の話」として紹介された。この「藤の花」のエピソードはおそらく江戸時代の創作だと考えられているが、その虚実はどうあれ、絶望的な獄中であつて官兵衛に希望を与えたものがあつたという心の真実を象徴する物語として、「藤の花」の話が人々の心打ってきたのは確かであつた。「藤の花」は、落とし穴にハマってもがいている者にとって、何を象徴するのだろうか。



藤櫓

ちなみに、藤の花でいえば、黒田家の家紋は藤巴であり、これは福岡黒田藩に受け継がれている。松本清張をはじめ、多くの作家がこの「藤の花」のエピソードを描いた最後に、官兵衛が自家の紋章に藤を思いついたのは、牢屋の中で咲く藤の花に励まされた経験によるとしている。しかし、それは誤解で、主家の小寺家が「藤橘巴」紋であるところから来ている。牢獄を脱出してから、官兵衛が思いついたとするのは、ドラマチックで面白いが、もともと藤巴の家紋だったと思われる。



黒田家家紋「藤巴」



小寺家家紋「藤巴」

ただ、この主家に倣って決めたと思われる藤巴の家紋を、小寺姓から黒田姓に復帰した後も使い続けているだけでなく、有岡城の幽囚の裏で糸を引いて自分を窮地に追いやった小寺政職の助命を願い、さらに政職の長男氏職を召し抱えるなどしているのだ（氏職は福岡藩士になったと伝えられている）。

主家の恩を忘れず、その裏切りさえも許したということなのだろう。

最初に自分たちを取り立ててくれた主君の恩を忘れなかったのは美談であるが、自分を死の淵まで追いやった政職を許すのは並大抵のことではなかったはず。仕返しをせずに、受けた恩は恩として返すことは官兵衛や父職隆でこそできたことだろう。そのことについて『黒田家譜』に書かれているが、別巻で述べることにしたい。

○この幽囚が人信のきっかけだったか

まとめると、この壮絶な体験から受けたショックを抱えたまま、しばらく多忙な日々を送っていたが、つかの間の平和が訪れたときに、傷ついた魂の救済をしてくれそうなものがあることを人づてに聞いて、興味を持ったのかも知れない。実際に『黒田如水伝』に描写されているような悲惨な体験を官兵衛がしていたとしたら、そのまま平然と生きていけるだろうか。

たとえば、津波災害に遭って、からくも生き延びた方々が、津波が去ったから、はい終わりましたって何もなかったかのように平然と生きられるだろうか。その傷が深いほど立ち直るのに時間もかかるし、独りで立ち直るというよりも、何かに頼りし、力を得て立ち直っていくのではないだろうか。

そのときに力を得るものが宗教だという人もいる。むしろ、それこそが本来の宗教の役割かも知れない。あるいは、他人との助け合いから力を得ることもあるだろう。官兵衛にとっては、家族や家臣たちとの絆もあったから、そのあたりには問題なかったが、のちにその当時のキリスト教と出会い、心の傷を癒すために頼りとしたというのは自然な成り行きだったと思われる。

その時点では、聖書の知識がまだあまりなかったとしても、頭のいい官兵衛のことだから、のちに宣教師から色々話を聞いて、自分が味わってきた経験のひとつひとつに、神の導きと自分への語りかけを見いだして、より一層信仰を深めていったに違いない。

○獄中体験が及ぼした影響

なお、獄中での体験が、その後、小田原城などの敵方の城に単身乗り込むというような大胆な行動をとるような、より大きな器にしたのではないかと、とも言われている。

あの明治維新の功労者、西郷隆盛も自分を見出してくれた主君島津斉彬の死後、次の主君久光の時代に左遷され、罪人として島流しにあっている。このときは、官兵衛のように1年ではなく、7年。いつ終わると知れない島流しにあって、懊悩の日々を過ごしたことだろう。島流しから戻されたあとの活躍は、皆さんもご存知のとおりだろう。現代においても、左遷された先の会社で、より大きな人間になって飛躍していく人々もいる。やはり、沈むことが深い分だけ、それを突破したら、浮かぶのも大きくなる、ということなのだろうか。

○獄中体験が本当にあったか？

という風に、ここまで官兵衛が有岡城で壮絶な体験をした前提で話を進めたが、『黒田家譜』や以下の『新武者物語』には記載されていない話である点は強調しておきたい。

ちなみに、『新武者物語』には、荒木村重が官兵衛を捕縛した『新武者物語話巻』が載240 荒木摂津守が小寺孝隆を留めおくこと）。

そもそも、『新武者物語』とは慶長が承応間の武辺物語などを記述した『武者物語』の続編で、具体例を引きつつ武士のあり方を説く『武者物語』（明暦2年刊）、そして『武者物語の抄』（寛文9年刊）、ユニークな武辺咄集『新武者物語』（宝永のように記載されている。要約すると、

・官兵衛は荒木と無二の魂だったので、説得に行った（引用者注 信長と官兵衛との間の取次に入ったのは摂津の領主であった村重であり、二人は親しかったと言われている）。

・荒木は官兵衛を城内に招き入れ、力の強い者をたくさん隠しておいて、無理やり押さえ込んで誘拐し、人をたくさん監視につけて姫路に帰さなかった。

・小寺（黒田）家の家臣たちが会合をし、職隆に言ったのは「息子の官兵衛殿を助けて毛利に味方するか、孫の松寿（のちの長政）殿を助けて信長に味方するか」どちらがよいか、ということだった。

・職隆が言うには、「自分の本意は信長に味方することで、松寿はそのために人質として差し出した。官兵衛は荒木のところにいて拘束されたのは荒木が不義をなしたことだ。もし、荒木に官兵衛が害されたら、不慮の事故と思えば良い。どうしても、本意を曲げて敵に従おうか、絶対に従わない。」と言ったので、一族郎党もつともだと感心して、ますます忠勤に励んだ。

・翌年11月伊丹城落城のとき、栗山善介が馳せてきて、官兵衛を同道して本国に帰った。

というように、官兵衛の幽囚の実態には全く触れられていない。

『新武物語』が刊行された1599年であり、『黒田家譜』が著されたのえ、武辺話から官兵衛の幽囚には触れておらず、父職隆が義を貫く側面丹城（有岡城）落城の際に救出されたただけ書かれたのかも知れない。

○最近の説

また、最近では、村重の抑留が過酷ではなかったかも知れないとする説が出てきている。それは、有岡城の落城から5年余のち、村重と官兵衛が交わした書簡（写し）において、官兵衛が村重に恨み言を述べていないからだ（兵庫県伊丹市立博物館発表。2013年12月2日付）。

本能寺の変の翌年の天正11年（1583）に書かれた。書状の存在は昭和初期の歴史書に記載されていたが、検証されたことはなかったという。神戸女子大の今井修平教授（日本近世史）は「幽閉は過酷なものではなく、二人は変わらずに親しい関係だったのでは」と分析、当時、官兵衛は秀吉の配下で、茶人となっていた村重は茶道を通じて秀吉との関係を深めていた。（同教授）「書簡は、村重から光源院の領地問題の相談を受けた官兵衛が返書を出し、これを村重が書き写し、交渉が順調だと伝えるために光源院に送ったもの」「幽閉後の二人の交流を示す唯一の史料。官兵衛は非道な扱いをされた印象があるが、両者には一定の信頼関係があったことが分かる」「文面からは遺恨は感じられない。茶人となった村重が政治に関与し、秀吉の下で力を合わせて政策を実現しようとする二人の関係を示す貴重な資料だ」と評価している。

とはいえ、この史料だけをもって判断するのは早計だ。

「どっちなんだよ!」と読者の皆さんに怒られそうだが、この真相は研究を待つしかない。まだ未発掘の史料もあるかも知れない。

“官兵衛の遺恨が文面から見られない

→遺恨はなかったのでは？

→抑留も厳しくなかったのでは？”

という論もありうるし、

“官兵衛の遺恨が文面から見られない

→遺恨を官兵衛が乗り越えた（村重は出家しているし）

→抑留もあったかも知れない”

という論もありうる。

もっと直接的な証拠を見つけるしかないだろう。

どちらにしても、村重に抑留されて、身動きがとれなかったことは確かであり、一番の働きどきだったこともあるし、自分の家が危機に陥っているときでもあり、そのときに身動きが取れない自分の不運を嘆いていた可能性はありうる。

（3）実利目的

これについては、宣教師との交流による西洋技術の習得、鉄砲・火薬の入手など、特に合戦を有利に進めるために信したとする説だが、これについては否定的な見解があり、筆者もそう思う。



○鉄砲、実利を求めた織田信長

たしかに鉄砲によって戦い方に大きな変化をもたらしたことは事実であり、その新兵器の鉄砲という武器は重要なアイテムであった。織田信長は鉄砲という新兵器に目を付け、それをうまく利用していたといわれる。將軍足利義輝が保護したことでも一時、京都や畿内周辺でキリシタンが広がりを見せたが、義輝が三好三人衆と松永久秀により殺されたあと、キリシタン嫌いの松永久秀によって迫害された。しかし、その後上洛した信長は、イエズス会を保護した。これにより、イエズス会の布教が隆盛となる。この信長の南蛮びいきの本音は、あくまでも南蛮文化、南蛮技術などを少しでも早く天下統一を達成するのに役立たせたいという、功利的な側面にこそあった。そのため、信長は、「南蛮」や宣教師に肩入れしても、ついにキリスト教の教え、デウス（神）を信じようとしなかった。そのことについて、ルイス・フロイスは、

「信長は本来、善良な素質を備えていたとはいえ、彼にはデウスを認めるという最も大切なものが欠けていた」

（『日本史』）

と述べている。

○鉄砲なんかに頼ろうとしたのか

一方、官兵衛はどうだったのだろうか。

もちろん、新兵器が戦いにてどういう効用があるかも理解していたであろう。

しかし、鉄砲のような兵器に頼るのは、戦略を重視し、戦上手の官兵衛らしくないことだ。栗山利安の子・栗山大膳が「黒田の軍法は特に秘伝は無い。七書さえ学べば十分である」と述べている（『磐井物語』）ように、シンプルに、相手の心理を巧みに突く戦い方をしていた。鉄砲隊をむやみに増やせばお金もかかるし、増やさずにちよつこと使っても効果は薄い。鉄砲は運用も難しい（先込め式のため、火薬を詰めてから弾を発射するまでの一連の動作にかなりの練度と時間を要した）。それだけで勝てる保証がないことも理解していただろう。官兵衛はむしろ戦わずして

勝つのが最上で、むやみやたらに鉄砲を使って勝とうなどということは考えていなかったであろう。しかも、鉄砲の威力で勝利したと思われがちな長篠の戦い（設楽原の戦い）では、実際に鉄砲隊を三段打ちにして武田の騎馬隊を打ち破って勝利した、という通説にも疑問が呈されている。鉄砲の威力が勝因ではない可能性があるのだ。

○そんなにインスタントに入信できたのか

また、ポルトガルと貿易をして利益が欲しい！、だからキリシタンになったら宣教師が斡旋してくれるはず！と、言っても、キリシタンになるのはそんな簡単にできるものではなく、一定期間、じっくり教理を学び、内面の厳しい決断を迫られた上で、その信仰が明確になっていなければならなかった、とされている。誰でもよいから来る者拒まずで、どんどん洗礼を受けて、トコロテン式にキリシタンの出来上がり！というようなものではなかったらしい。もし、トコロテン式であれば、もっと信者が爆発的に増えていただろうし、何より秀吉が禁教令を出すことも、殉教者が出るようなことも、反乱を起こすようなこともなかったであろう（にわか造りの信心は、すぐにコロッと変わるから、権力者から捨てよ！と言われたら命が惜しいので、はい！捨てますということになる）。

確かに、戦国武将で貿易の利益に目をつけて入信した者がいないわけではなかった。例えば、大友宗麟・大村純忠・有馬晴信ら九州のキリシタン大名（巡察師ヴァリニャーノ「日本巡察記」）や、小西隆佐（小西行長の父）のような堺の商人たちだ。

しかし、官兵衛は、受洗した当時、まだ播磨国の一武将にすぎず（石高1〜3万石規模）、九州平定後によりやく豊前国を与えられたのであつて（石高1万石規模）、確かに九州平定戦をうまくやれば一国以上を与えると秀吉から内約されていたから必勝を期したとはいえ、官兵衛の部隊は主力ではなく、むしろ全軍をコントロールする役目为主だったものであり、この時期に急に貿易の利益やに目をつけて洗礼を受けたとするのは、かなり無理がある。

この説が生まれた背景には、キリシタンになるメリットはそんなものしか思いつかない、キリシタンになるとはその程度のことだ、宗教なんて現世をどう生きるかのためにあるのだという、キリスト教をはじめとする宗教への本音があるのだろう。キリスト教から見ると、そのような現世利益の宗教観は、対極にある考え方なのである。何より官兵衛は、そんな軽々しい、浅はかな気持ちでキリスト教に近づくような人物とは思えない。

よって、この説をとるのは、若干難しそうだ。

（４）特に(1)〜(3)のようなことはなかったが、教義が自分の性格や生き方にフィットし共感できたから。

これについては、官兵衛の心の中には他人に寛容に接するなど自己の考えとキリスト教の教義が一致する部分が元々にあつて、キリスト教の教義を受け入れやすかつた面があり、人の勧めで聞いてみたら納得できたから受け入れたとするものだ。

母との死別や幽囚というような地獄の体験に比べれば、割とスマートな動機。いいものはいいと受け入れるし、昔から受け入れられてきたものであつても良くないものは良くないと排除する。

宣教師が語る西洋の知識・制度、持ち込んだ文物をみて、そのすごさに目を見張り、それらを作り出したヨーロッパの人々の発想ってどんなんだろう、それらの人々が信じているものってどんなんだろう、と興味を持ったのかも知れない。

そして、宣教師や高山右近、小西行長などに、キリスト教について深く突っ込んで聞いてみると、何とスマートで合理的な発想をしていることか！と共感できたのではないだろうか。

官兵衛が後に残す遺訓にも、武士の誇りや体面よりも、合理性を重視していると思われるふしがあり、彼の生き方にフィットしたのではなからうか。

たとえば、官兵衛の残した遺訓や生き方として、

・秀吉の死後、乱世を終息させ天下泰平とするために、家康に天下を取らせるように画策した。自家の安泰、手柄を立てるため、豊臣家のため・・・いろいろな目的をもって諸大名は動いていたが、天下万民の平和な世を作るため、私利私欲は優先度を落とし、世間を俯瞰して捉え、何が必要か考えて働いた。

・関ヶ原の戦いでの戦功は世を覆った。武勇や智略は人より優れていた。しかし、殺戮を好まなかった。和議によって敵を降参させ、助命したことは数知れなかった。百戦して百勝するのがよいのではなく、戦わずして相手を負かすことが一番よいことだ。

・家臣に慈悲をもって接し、一生で一度も家臣を手打ちにしたことがなかった。家臣のなかで官兵衛を恨んで出奔した者はなかった。罪科によって追放され、切腹したものも稀であつた。家臣が悪事をしたら、思いっきり叱り、根深い罪科がなければ、すぐに用事を言いつけた。このように慈愛が深く、人を活かすことが多く、人を殺すことを好まなかった。

・天罰より主君の罰、主君の罰より臣下・百姓の罰を恐れ、決して家臣領民に罪を及ぼして嫌われないように心がけなければならない。（『黒田家譜』巻之十五）。

・当時はよく行われていた殉死を禁止した。優れた家臣たちを無駄死にさせず、次の世代に奉公して欲しいとして、殉死を厳禁した。

・自分が死んだら、葬祭を厚くしてはならない。ただ国を治め、民を安んずることで追善とせよ。（『黒田家譜』巻之十四）

・儉約を常とし、自分のためにお金を遣うことはなく、華美を嫌っていた。官兵衛を知らない者は、ただ単にケチなのだったと思った。しかし、儉約は国家を保ち、身を治めるのに最も肝要で、昔から優れた人は必ず儉約していた。しかし、いったん有事があれば惜しみなく遣った。

大大名の藩祖であれば、プライドがあつて、もっと我を通しそうなものだが、そんな君主像とはまるっきり反対ではないだろうか。もちろん、同じような発想をする人には、この時代にはほとんどお目にかかれない。

○信長が共感した部分

ちなみに信長はよく「異能の人」とか「わが国最初の近代人」だとか形容され、時代の常識とか伝統などに徹底してとられることがなかった。挑戦者であつたと言われる。しかし、彼はキリスト教の教義に理解を示したわけではなかった。

彼が理解を示した宣教師たちもまた、意味合いは異なるにせよ、やはり果敢な挑戦者だつた。

布教というただそれだけの目的のために、万里の波濤を越えて東海の島国にやってきた（異説もある。植民地化を狙っていたという説もある。ただ、布教することも大きな目的の1つだつた）。その道中にも、あるいは目的地にも、どのような危機が待ち構えているか測りがたいのに、それも覚悟のうでで信仰に殉じようとした。

フロイスは信長との二度目の会見の際、胸を張って次のように語つたという。

「（自分は）日本においていかなる名誉も富も名声も、その他何らかの現世的な一時的な利益は求めておらず、ひたすらデウスの教えを説き、人々に宣布することだけを望んでいる」（フロイス『日本史』）。

信仰に一身を賭した使命感、そして果敢な挑戦者としての彼らの姿勢は、みずからも乱世を終息させようという「天下布武」の使命感に生き、果敢な挑戦者としてあり続けた信長に、強い感銘と共感をおぼえさせたはずである。ギリシア哲学やローマの学問を醸成していたイスラムから、それらを吸収してルネッサンスが花開いていたヨーロッパからやってきた宣教師たちに対して、一定の共感というか、共振というか、そのようなことが起きたのも、信長が中世の人々にとって型破りな発想をする人間、近代人だつたからだろう。中世の人とどちらがよいかわ優勢を言っているわけではない（それは一種の進歩史観だ）。

○官兵衛の価値観

一方、官兵衛はどうだつたか。

信長と程度の差や方向性の違いはあるものの、中世の既成の価値観とは一風違つたものを持っていた。官兵衛の生き方は、私利私欲の権力闘争とは一線を画していた面があつた。他の武将たちが必死になって秀吉に取り入って出世しようとしていた中で、そのようなことをせず、自分に与えられた才を活かして、万民のため天下をより良く変えるためには何かしら貢献したい、というような発想があつた。彼が長政に与えた遺訓には、家臣・領民のための政治をせよ、それらの人々のために自分たちは存在していることを忘れないようにせよ、と言い残している。民主制の世の中にどっぷり浸かっている私たちにとっては、理解しやすい考え方だ。しかし、当時の武家では（平均的に）そうではなかった。その時代に、現代に近い発想をし、それを実行していた。いわば芸術家肌、天才肌の武将のように感じられる。

一段高いところから俯瞰して、天下の趨勢を見通していたような発想は、中世の日本にはなかった。武田信玄、上杉謙信をはじめとする戦国大名たちには、足利将軍を補佐して既存の秩序を保とうという発想しかなかった。これでは、いつまで経っても、抗争が繰り返され、弱いものたちが泣かされ続ける。

このような気質を持った官兵衛だつたからこそ、純粋に、既存の宗教や価値観とは異なつたキリスト教に惹かれたのかもしれない。

（５）まとめ

決定的な確証がないため、推測の域を出ないが、有岡城幽閉が真実であれば、これがきっかけとなつた可能性がある。

官兵衛は、智謀や弁舌をあてにして、播磨の国人たちを織田方につかせ、毛利の大軍を撃退するなど、うまくやってきたが、別所家をはじめとする播磨の国人たちの離反、それを阻止するために、乗り込んだ有岡城で囚われの身となり、挫折した。

土牢の中で死線を彷徨い、一回り大きくなって生還した。智謀や弁舌のような、そんな小手先のテクニックで自分のために手柄を立てようとするのではなく、もっと大きなもののために働こうと思ひ至つた。

体も癒え、備中高松城攻めや中国大返し、賤ヶ岳の戦い、毛利との国境線確定、四国攻めなど、東奔西走していたが、秀吉の天下が間近となり、ふと束の間の平和が訪れて、忙しさから我に帰ると、自分の魂がどうなるのか不安がよぎり、救いを求めた。

大名たちとの交際の中で、高山右近の勧めにしたがつて、用心深くキリスト教を聞いてみると、官兵衛は性格的に革新的・合理主義精神があつたので、キリスト教や西洋の考え方に共感できる部分もあつたし、煩惱九出しの仏教僧たちと比べて、宣教師や修道士たちの真面目な生活にも共感できるし、自分もこの教えを実践すれば、魂の救いを得られるのではないかと思ひ、受洗を決意したのだろう。

【Q3】 勧誘や教団の保護

官兵衛はキリシタン入信後、「片手に剣、片手に十字架」と宣教師が言ったように、九州平定戦の軍監として采配をふるう傍ら、同行した武將たち、一族郎党をキリシタンになるように勧誘した。その活動はどのようなものだったのだろうか？このことが、既存宗教勢力の反感を買い、秀吉との関係に亀裂が入るきっかけとなる重要な事実なので、探ってみたい。また、九州平定戦後にも勧誘や教団保護の活動をしており、それについても見てみたい。

1・播磨の国で布教する「入口」となった官兵衛

官兵衛は入信すると、当時の領国である播磨国でのキリスト教布教を後押しした。

天正13年（1585）のフロイス書簡（総長宛）に、三木城主・前野長康と官兵衛が、播磨の国で布教する「入口」という記事がみられる。前野長康は間もなく但馬国の出石城へ移るから（その後、三木城には、中川秀政（注4）が入城）、播磨においてキリシタン布教が本格的にはじまったのは、官兵衛の力によるところが大きい。

この時期以来、播磨にはかなりの数のキリシタンが存在するようになったらしい。また、のちにキリシタン大名の小西行長が播磨国の室津においてキリシタンの布教を保護したことで、播磨国にはキリシタンが広まった。

関ヶ原の戦い後、播磨は池田輝政の領国となった。そのころでも池田輝政の重臣をはじめ播磨にはキリシタン信徒が多数いたといわれている。「キリシタン地蔵」という地蔵が、兵庫県西脇市黒田庄町黒田に残されている。墓石の刻文には、「寶永8年／卯2月12日」と命日記載がある。宝永（寶永）8年（1711）という年代からすると、官兵衛が死去して百年以上経った時代のものである。江戸時代になってキリシタン禁教後も、播磨には隠れキリシタンとして信徒が存続したのだろう。それだけ、キリシタン信仰が根強い地域があったのだろう。

なお、英賀御影堂があり一向宗のメッカであったとはいえ、すでに本願寺は政治的・軍事的な力は以前ほどではなくなっていたことや、既存仏教には飽き足らない人々がいたということだろう。

2・九州平定戦の時期

さて、官兵衛は播磨国に3万石前後の知行地があったが、飛躍するチャンスが訪れる。それは、九州平定戦である。官兵衛は軍監に任じられ、うまくやれば1〜3カ国を与えると、秀吉とのあいだに事前の約束があったという（秀吉の書状などに残っていれば、確証となるが、それは見つかっていない）。

その後、豊後の大友氏が島津の侵攻を受け、秀吉に救援を求めると、秀吉は九州平定戦の大義名分を得て、九州に侵攻することが決まる。その当時はまだ秀吉の敵対勢力も多く、秀吉が長らく都や大坂を留守にするわけにもいかなかった。そこで、まず、先駆けとして毛利勢を始め、秀吉に服属した中国・四国の大名、秀吉旗下の武将たちの一部が九州に進出した。官兵衛はその軍勢の軍監として出陣した。軍監とは軍目付として総大将に対して戦の情勢分析をして助言する役割であり、このとき総大将は秀吉、副将秀長で、二人とも上方にいたので、2人が出馬するまでは官兵衛は実質的に秀吉軍の先遣隊を率いていることになる。先遣隊の中心は毛利勢と四国勢であった。毛利勢は、毛利元就の時代から北部九州にたびたび侵攻しており、土地勘もあったし、吉川元春や小早川隆景の武勇を九州の豪族たちによく知っていた。しかし、九州の豪族たちの多くは、秀吉を成り上がり者と侮り、一方で、南から侵攻してくる島津勢の脅威にさらされ、島津方になびいた者も多かった。そのため、官兵衛や毛利勢は下関から門司への渡海、そこからの豊前や筑前への侵攻も決して平坦な道のりではなかった。この間、豊後の大友宗麟は居城臼杵城に追い詰められ、イエズス会から大砲を借りて島津勢を追い払っている。一方、筑前岩屋城の高橋紹運（立花宗茂の実父）は小勢で島津勢に抵抗を試み、粘り強い抵抗の末、壮絶な戦死を遂げている。

多少脱線してしまった。

秀吉軍の軍監として出陣した官兵衛に対して、秀吉軍の諸将の態度はどうだったのか。諸将は良からぬ動きをして官兵衛から秀吉に報告されてしまうと困るし、自分たちがあげた手柄を正確に報告してもらう必要があったので、官兵衛に対しては鄭重に接していただろう。また、官兵衛は鋭いから、ごまかしも効かなかっただろう。官兵衛は、その立場も利用して（人信するよう圧力をかけたわけではなく）、

- ・合戦で混乱している豊後のイエズス会の保護を毛利家に頼んでいる。
- ・他の武将たちや一族郎党を勧誘した。

陣中において、修道士を同行し、軍務の傍ら、彼らと起居を共にして教えを聞いた。また、軍議の前に十字を切つて祈りを捧げる姿を諸将に見せている。諸将はこの姿を見て驚いていたようだ（フロイス『日本史』）。また、出撃時には、ひざまずいて祈りを捧げ、1字を切っていたと言われる。

では、それらについて具体的に見てみよう。

（1）イエズス会教団への保護・キリスト教徒としての活動—九州平定戦時

官兵衛のイエズス会に対する保護施策について、見ていこう。

九州平定戦の時期はどうだったのだろうか。

豊後では大友宗麟がキリシタン王国の建設を目指した。しかし、そのために領内でキリシタンと反キリシタンに分かれて内紛が起き、嫡子大友義統がキリシタンを迫害した。そして、耳川の戦いで敗北した大友氏は、島津氏の侵攻に伴い、治安が悪化して、キリシタン教団や信者たちは苦境に立たされた。

そこで、官兵衛は、豊後で迫害されていたキリシタンを、ザビエルゆかりの山口に移した。山口では、大内家が布教を許して教会が建設された時期もあったが、その後、大内家を滅ぼした毛利元就はキリシタンを迫害したため、山口にはキリシタンの跡形もなかった。官兵衛は毛利輝元に掛け合い、毛利領の山口にかつて同地にあった教会の敷地を用地として確保し、通常寺社には賦課される夫役を免除させた。また、赤間関（下関）には司祭が定住することを認めるとともに、山口や赤間関において司祭に無期限で土地を提供すること、自由に布教することなどを認めさせた。これにより、下関では名声のある貴人たちに説教を聞かせ、およそ60人が洗礼を受けたほか、官兵衛の2人の弟にも説教を聞くよう命じ、2人は他の者とともに洗礼を受けた。

毛利家自体はキリシタンに対しては消極的であったと思われるが（元就がキリシタン嫌いであった影響もあるのだろう）、ルイス・フロイスは、「官兵衛は毛利の役人たちから恐れられており、そのような措置も何ら問題が生じなかった。」と述べているように、毛利家の者たちは官兵衛に気を遣っており、官兵衛の言う通りにした。

なぜ、気を遣っていたのだろうか？それは、

- ・秀吉の軍監としての権限があつて逆らえなかったこと。
- ・領土交渉を通じて官兵衛のことをよく知っていたこと、つまり、官兵衛の能力の凄さ（頭の回転の速さ）を理解していただけではなく、人柄の良さを知っていた

これらのことから毛利側は、官兵衛の要請に応じたのだろう。

その官兵衛の振舞いが毛利家の人たちに驚きを与えている。「毛利輝元の重臣たちは官兵衛の前では輝元の前に出る時以上に緊張していたが、その官兵衛が司祭に対しては深い尊敬と恭順を示したので、キリシタンを顧みない毛利家の人々はこれを見て驚嘆した」とフロイスは述べている。

（2）勧誘活動—九州平定戦時

九州平定戦時の陣中の様子として、官兵衛が陣中で修道士から教えを聞きつつ、諸将に勧誘していたことが記されている。これらの勧誘によって、諸将がキリシタンを受洗したことは前述のとおりである。陣中に修道士を帯同し、時間が許す限り自分の手元に置き、自ら世話をしながら兵たちに説教を聞かせるようにした。時には自ら教義について質問し、教えを聞くことで満足し喜んだ。官兵衛が不慣れな手つきで十字を切り、祈り終わると頭と両手を床に付けて伏す姿は、真心がこもったもので一同に感銘を与えるものであったと言う。

官兵衛は諸城の用件を処理し武器等を補給しながら陣営内の武将達に書状を送り、自分のところに説教を聴聞にく

るように勧め、説教を聴いた者についてはその回数、理解の程度、受洗を決意した日にちなどを把握していた。このように、官兵衛は一方では戦いに明け暮れながら、他方では布教活動を主導し、支援していた。

具体的には次のように宣教師の書簡にみえる。

「薩摩の兵が、豊後において、あのような破壊を行ない、また嫡子が豊前の城に引きこもっていたあいだ、小寺（官兵衛）は共手傍観していたわけではなく、諸手で、片方の手では敵と死をかけて、もう一方の手ではできる限り改宗を伸ばそうと地獄と戦っていた。この武士が我らの聖教の掟を弘めようとした努力と熱意が、如何に大きいものであるが、また、その改宗（の業）が、我らにとっていかに有益であったかを簡単に述べるのが難しい。（高山）ジュスト右近殿の弟子（彼の説得と仲介により改宗した）のであったことから、彼の改宗にかける熱意の点でも弟子となろうとしたものと思われる」（1587年度イエズス会日本年報 傍線引用者）。

官兵衛がキリシタン大名と異なっていたのはこのように伝道に熱心だったことである。身近に宣教師を置いて、常にその教義や知識を学んでいた。宣教師から世界情勢やヨーロッパの文化文明に聞き及ぶ一方で、戦国の殺伐としたなかにあつて、「戦のない平和な国」を作りたいという気持ちになったのかも知れないと読める記録が残っている。それは、フィリピンのマニラのサンセヴァスチャン教会の記録で、

『予（引用者注 官兵衛自身のこと）はこのたびの戦（引用者注 九州戦役）で成功したならば、閩白がその功績によって一国の主に取り立ててくれることをデウス（引用者注 キリスト教の神）において期待している。予は、その国の住民がすべてキリシタンのみから成り立つように定めており、この国の教会の権限を委ねるために、一人の司教を呼ぶ考えている』」

とある。官兵衛は九州の地に、キリシタン王国を建設しようと意欲に燃えていた可能性がある。

3・一族の改宗

次に、自分の一族の者を受洗に導いたことについて述べたい。黒田家の中では、長政、弟利高、直之、直之の妻、長政の従姉妹が改宗している。以下で、それぞれ史料を見てみよう。

(1) 長政の改宗



黒田長政像

まず、息子の長政について。

官兵衛は長政に基督教の教えを聞くことは勧めたが、受洗については自分自身で選択することだとして強制せず、あくまで本人の信仰に委ねている。

「最後に、関白殿が小寺官兵衛殿の名誉を顕彰し恩顧を与えるため、小寺自身（引用者注　すでに黒田姓に復していた黒田官兵衛のこと）の息子でその唯一の後継者（引用者注　長政）を訪問させたところ、これに対し最初に願ったことは、息子が自分自身の掟に従うことであり、息子に何か強制するつもりはないが、説教を聴き、心が動かされれば、キリシタンになってほしいと言った。この青年は、非常に良い性質であり、理解力も高かったので、説教に満足し、多くの家族の者たちと共にキリシタンになる決意をした。そして父の大いなる満足の下で洗礼を受けた。」（1587年度イエズス会日本年報　傍線引用者）

長政は九州平定戦後の天正15年（1587）に、中津城下で受洗した。なお、長政が洗礼名を授けられたのは、そのときではなく、天正18年（1590）暮れに、秀吉への年賀を奉じるために上洛した際であった。巡察師ヴァリニャーノ神父が4人の少年使節を伴って秀吉に会いに行く途中、最後の許可が出るまで室津で待機していたとき、上洛のために室津を通った長政がヴァリニャーノ神父を訪問し、ダミアンの洗礼名を授けられたのである。

洗礼を受けた天正15年（1587）には教理を学ぶ機会がなく、間もなく秀吉が伴天連追放令を発令した。上述のようにヴァリニャーノや他の随員と話したときに、教理について質問し満足を得たという記録がある（1591・2年度イエズス会日本年報）

しかし、長政が家督についてのち、最初は秀吉（後には家康）に対して極めて慎重な態度をとっていたので、全く信仰から離れてしまった。こうして、教会の記録で最初は「不熱心者」として、後に「異教徒」とされており、筑前国内で布教していたマトス神父は「背教者」と呼んでいる（『マトス神父の回想録』）。

黒田長政も父と同様、ローマ字印章を使っていたが、中にはキリシタンの洗礼名（ダミアン）はなく、ただ、curo NGMS（黒田長政NaGaMaSa）という略字が入っているのみである。官兵衛が洗礼名シメオンを入れて「SIMEON JOSUI」という印章を使っていたのとは大きく異なる。

(2) 利高、直之の改宗

次に官兵衛の弟、利高と直之。

「小寺自身の兄弟で、関白殿に仕えて、兵を連れて来ていた2人も改宗した。」（1587年度イエズス会日本年報）とされており、利高と直之が、官兵衛から勧められて入信している。

①黒田利高

利高は早くも1596年には亡くなっている、洗礼名は不明。

ちなみに、利高（1554～1596）は、職隆の次男で、官兵衛の同母弟（生母は明石宗和の娘）。別名利隆。通称兵庫助、幼名小一郎。実直な性格で長政の後見役をし、家中の諸士から慕われた。官兵衛に従って、播磨各地で戦功をあげ、弟たちとともに秀吉の馬廻りとなった。小牧・長久手の戦いの岸和田城の戦いや四国攻めに独立武将として参戦したあと、官兵衛付属として黒田家に戻った。九州平定では先手をつとめて長政を援けた。豊前で一揆が起きた時には宇佐神宮を守り抜いた。泉州堺で養生中に亡くなった。



黒田利高像

②黒田直之

一方、直之は黒田家が関ヶ原の戦い後に筑前国に入封後もキリシタン教団を保護し続けた熱心なキリシタンであり、イエズス会の書簡に度々登場している。

直之（1564～1609）は、戦隆の四男で、官兵衛の異母弟（生母は母里氏の娘）。通称惣右衛門、図書助、幼名惣吉。キリシタンで洗礼名はパウロ。



黒田直之像

直之のことをご存知ない方が多いと思うので、多少長いが彼のキリシタンとしての事蹟を中心に紹介したい。

直之は、黒田二十四騎、黒田八虎の一人。永禄7年（1564）3月に姫路に生まれた。母は母里小兵衛の未亡人。最初は、兄と同じく秀吉の馬廻となり、のちに羽柴秀長に仕えて大和国郡山に住んだ。重臣の藤堂高虎と屋敷が隣同士であったという。豊前国に入封した官兵衛に呼び戻された。九州平定戦のとき、官兵衛が戦友や家臣のあいで熱心にキリシタンのことを呼びかけた結果、九州平定後の1587年の中津城下での復活祭で、多くの武士に洗礼を受けた際、黒田一族の何人とともにキリシタンになった。それは、官兵衛の弟利高、直之、と子の長政であった。直之はミゲルという洗礼名を受けた。小田原の陣では官兵衛に同行し、北条家家臣由良新六郎の娘を妻とした。その妻もやはり後に洗礼を受けマリアと言われた、彼の三子もみな、熱心なキリシタンであったので、この一家こそ、典型的なキリスト教家庭であった。

朝鮮の役でも活躍し、関ヶ原の戦いの時には九州で官兵衛に従って出陣し、毛利秀包の居城久留米城の城番を務め、城内のキリシタンも保護している。秀包は官兵衛の勧めで受洗していたので、娘（母は友友宗麟）を直之に差し出している。

慶長5年（1600）に黒田長政が筑前一国を拝領した際に、直之は「御家門」として秋月領1万2千石を拝領した（『黒田三藩分限帳』）。ただし、日常的には福岡に滞在していた。それは、家臣は知行地ではなく藩府に屋敷を持ち、そこに常住しなければならない、という徳川の政治方針があったためであろう。直之は彼の知行地秋月はかりでなく知行地秋月ばかりでなく博多の教会にとっても大きな助けとなっていた。

また、筑前だけではなく、他の地方でもキリシタンのために極力働いた。かつて戦友であった福島正則に働きかけて、その城下町広島で教会を再会することに成功したばかりでなく、1604年に京都から九州へ行く途中、福島正則を訪れ、自分の費用で広島での伝道所を立て直している。

1608年頃から直之の健康は次第に衰えていった。その年の冬、かろうじて江戸までの旅をして將軍に「挨拶」したが、九州に帰ってから、状態がますます悪化していった。それで黒田長政との相談のうえ、彼はまた京都に行き、京都の医師のもとで静養することになった。

海路大坂に行き、そこで教会を訪れて秘跡を受け、京都に向かったが、慶長14年2月3日に亡くなった。遺言に従って彼の遺骸は長崎のキリシタン墓地に埋葬された（1610年度イエズス会日本年報）。『黒田家臣伝』には、彼の墓所は不明とされ、惣右衛門の次男正直に続く黒田家は、のちに博多明光寺を菩提寺にして代々を供養した。

彼の死後、キリシタンの有力な守護者が筑前からいなくなったことと、長政が幕府に配慮してキリシタンにさらなる弾圧を行ったことから、明石掃部は国外に逃れ（一説には柳河城の田中吉政を頼ったとも、長崎の教会に逃れたとも言われる）、直之の長男であるパウロ左平次直基は博多で死を遂げることとなる。

長男直基（洗礼名パウロ）は官兵衛の葬儀の際、その柩をかついでいたキリシタン武士の一人であった。

1611年度イエズス会日本年報では、彼の死の経緯が記録されている。

「彼（引用者注 直基）は大胆な若者であつただけに、ある過失を犯した部下を自らの手で討つたが、その時にこの処刑された者の一人の部下に注意していなかったで、彼もまた、その主人の死の復讐として殺された。」

ということと、怨恨説がとられている。しかし、長政は父直之の死のすぐ後、直基にキリスト教の棄教を迫って拒絶されており、直基に嫡子がいない時期であり、このあと弟たちには相続を許していないので、長政が謀殺して秋月領を没収しようとした可能性がある。一番利益を得るのは、長政だったからである。

長政は直基の死を好機として、秋月の知行地を没収した。その後、三男長興に秋月藩を立藩させている。

（3）官兵衛の妻、光（てる）の方

官兵衛の妻である光（てる）の方は、最後まで洗礼を受けなかったようである。

彼女の実家櫛橋家は浄土宗であり、彼女自身その信仰を曲げるつもりはなかったのだろう。官兵衛の葬式のあとで、長政が彼女にキリシタンになるように勧めたそうであるから（長政も官兵衛の遺言で一時的にキリシタンに対し

て軟化した時期があった）、彼女キリシタンではなかったことが明らかである（1604年11月23日、ロドリゲス・シラノの書簡）。ただし、もう少しでキリシタンになりそうだという記録もあり、宣教師からの勧誘は受けていたものと考えられる。

（４）他家の武將たちの改宗

次に、官兵衛が改宗に導いた他家の武將たちのことについて述べたい。

① 大友義統



大友義統は、大友宗麟の嫡子で、彼の隠居後家督を継いだ。しかし、当初はキリシタンに冷淡であった。母親（奈多夫人）がキリシタンを嫌っており、その影響もあったと言われている。しかし、母親の死後は九州平定戦に豊後に赴いた官兵衛の勧めもあり、受洗した。

『黒田如水伝』には、「また、官兵衛は、大友宗麟の嫡子義統に面会し、父宗麟の怒りを解き、帰国の恩命を得るには、父の信仰するキリシタン教に帰依するのが一番よいと、勧誘したことにより、義統は天正15年4月27日、中津において、キリシタン教の洗礼を受け、名を「コンスタンチン（コンスタンチノ）」と称するに至った」（第14編）。

豊後国内でキリシタンを保護し、神社仏閣の破壊活動を行って、混乱を招いた。

しかし、秀吉の伴天連追放令の発令後は、再びキリシタンに対して冷淡になった。九州での石垣原合戦で官兵衛に降伏した際、官兵衛に諭されて改心し（1587年度イエズス会日本年報）、再び敬虔なキリシタンとなったと言われる。彼は、関ヶ原の戦いで西軍についたので、関東へ配流となっている。配流先で信仰を深めて喜びを得たとも伝えられている。ちなみに、大友義統が豊後国の書類の整備を命じたおかげで、現代の私たちが豊後国の様子を知ることができたとされている。

② 毛利秀包（小早川藤四郎秀包）



また、キリシタン嫌いであった毛利元就の死後、小早川隆景の養子であった小早川元総（秀包）（注5）は九州平定戦の功により、小早川隆景が筑前・筑後を与えられると、筑後国のうち久留米城7万5千石を領した。教会側の史料では、九州平定戦の戦功により筑前国一国を拝領した小早川隆景（のちに養子の秀秋が相続）に代って、筑前国に統治権も代行していたと記されている。

九州平定戦のときに、彼は官兵衛の勧めもあってキリシタンに改宗することを決意し、1587年に官兵衛が主催した中津城下での復活祭（3月29日）で盛大な洗礼式が行われ、黒田長政、大友義統、熊谷元直らとともに受洗した（洗礼名シモン）。なお、彼の妻は、キリシタン大名であった大友宗麟の次女・桂姫であった（洗礼名マセンシア）。

教会側の史料の一つを引用してみよう。以下は妻マセンシアを中心に記されたものである。

「マセンシアはすでにデウスの御許にある（引用者注 亡くなった）国主フランシスコ（大友宗麟）の娘である。彼女はすでに述べ、また昨年詳しくしたために（小早川）シモン藤四郎（秀包）殿と結婚している。シモン藤四郎殿は小早川の養子の兄弟で、山口の国主（毛利輝元）の所有に帰する9カ国の総司令官である。彼は戦さに従っている時官兵衛殿の説得によってキリシタンとなったが、それはほんの昨年のものであったから、我らが聖法についての教育を必要にして十分というほど受けていなかった。彼は兄弟の小早川にかわって筑前の国の大部分の統治権を有している。すでにしたために関白殿がこの人物に彼女のいる筑前の国を与えたのである。・・・（中略）・・・そこでは彼女らを診察する医者であるとの体裁を装うことにした（引用者注 秀吉が前年伴天連追放令を出したため、医者を装って宣教師の潜伏を助けた）。かの国はすべて異教徒からなっているうえ、彼の兄弟の小早川（引用者注 小早川隆景）は関白殿に対して卑屈なまでの恐れを抱いているからであった。このたびの迫害の後、彼は関白殿への配慮から我らのことに対して常にきわめてよそよそしく逃げ腰の態度を示すのであった。」（1588年度イエズス会日本年報 傍線引用者）

ちなみに、『黒田如水伝』には、秀包を受洗に導いたことについて、次のように述べている。

「天正15年、官兵衛が九州平定戦のために、下関に下向したとき、毛利輝元に面会し、キリシタン教の依頼に応じて、輝元を説得して、豊後から長門に移住したキリシタンたちが、毛利領内において虐待されたことについて、今後、毛利氏に豊後から逃れてきたキリシタンの僧侶たちを保護し、かつ下関および山口に居住することを許可させた。さらに官兵衛は、しきりに耶蘇教の優越であることを説明したことにより、輝元の伯父毛利秀包は、ついにキリ

スト教に入り、洗礼を受け、名を「サイモン」と号するに至った。」

金子堅太郎は、官兵衛の洗礼名と同様に「サイモン」と表記しているが、それと区別して教会側の史料の和訳「シモン」とする。

関ヶ原の戦い後は改易され、毛利輝元より長門国内に所領を与えられる。その頃、小早川秀秋の裏切りへの謗りを避けるため、小早川姓を捨てて毛利姓に復し、大徳寺で剃髪して玄済道叱と称した。帰国後は体調が悪化し、長門赤間関の宮元二郎の館で療養したが、翌慶長6年（1601年）に35歳の若さで病没。

死因については、持病か、朝鮮の役や関ヶ原の戦いの疲労によるものか、あるいは、後述する熊谷元直と同様、幕府を憚った毛利輝元らによる毒殺の可能性もあったかも知れない。

遺体は当時の秀包の知行地で、館があったと伝えられる現在の山口県下関市豊北町滝部に安置される。後に久留米には秀包を祀る小早川神社が建てられた。

③ 熊谷元直



熊谷元直（注6）は、毛利氏の家臣で、彼も秀包と同様、九州平定戦の際に官兵衛から勧められて入信した1人であった。前述のとおり、1587年の復活祭（3月29日）に豊前の中津で盛大な洗礼式が行われ、大友義統（洗礼名コンスタンチノ）、黒田長政（洗礼名はのちにダミアン）、毛利秀包（洗礼名シモン）、岐部左近一辰（引用者注 石垣原合戦で大友方として戦死）らとともに受洗した。

4・イエズス会教団への保護・キリスト教徒としての活動―豊前時代

次に九州戦役後、豊前国に入封した官兵衛は、中津にグレゴリオ・セスペデス神父を招いて城下に教会を建てていることだ。信者は3千人という教会側の報告もある。1587年に中津城下での復活祭が行われたことについては前述したので省略する（3・（2）（4）②など参照）。

5・巡察師の上洛の手引き

その後、伴天連追放令の撤回などを求めてイエズス会の巡察師が上洛して秀吉に拝謁できるように影ながら取り計っている。

九州平定戦の直後に、秀吉が発令した伴天連追放令により、建前上は、宣教師たちの国外退去を命じられたが、実際には各地で身を隠して密かに活動していた。キリシタン教団や大名たちは追放令の撤回を望んでおり、秀吉に拝謁して直接その要望を伝えようとし、官兵衛らのキリシタン大名が、奉行である浅野長政を通じて秀吉に面会を求めた。その使節の内容や体裁について、キリシタン大名たちはさかんにアドバイスしていた。たとえば、

「これがため、（黒田）官兵衛殿や津の守殿（小西行長）、その他のキリシタン武将たちは、（巡察）師に宛てた書状をしたため、『（巡察）師は、（イエズス）会の者を少数にして、ポルトガル（の商人や船員）の数を多くして上洛するよう心がけていただきたい。さもなければ（閩白殿に）なおいつそう（先に述べたような）疑念を深くさせることになり、いよいよ使節を軽視することになろう』と通告した。そして（有馬）ドン・プロタジオ（晴信）、（大村）ドン・サンチョ（喜前）およびその他の下の領主たちも、それと同じ見解であった。」（1591、92年度・イエズス会日本年報）

6・加藤清正に捕縛された巡察師らの解放―関ヶ原の戦い直後（@九州）

そして、関ヶ原の戦いの際には、南肥後の小西行長領に侵攻した加藤清正が、キリスト教団関係者を捕縛するなどしたが、官兵衛が清正を説得し彼らを解放させた。



加藤清正像

このことについて、『黒田如水伝』には

「慶長5年関ヶ原の戦争後は、如水は殊にキリスト教徒のために尽力し、如水はこのときすでに、熱心なキリスト教の保護者になったので、かの小西行長が滅亡すると、キリスト教徒は、彼らが唯一の信徒と頼りにしていた行長を失い、この宗門の将来はどうなるだろうかと心配していたが、如水は宣教師を慰め、将来は自分の力の及ぶ限り、彼らを保護することを自分の義務とする旨を言明し、また小西氏の領内のキリシタンが、新領主加藤清正に反抗しようとする様子があったため、彼らを説得して、新領主に服従すれば、清正にキリスト教に対して、厚意を保たせようとする約束をして、ついに肥後の領内に、キリスト教徒の騷擾を起さないようにするためだった。」（第13編 第5章）

一方、教会側の史料には、

「宇土城を包囲し、・・・（中略）・・・—その中でアロンソ・ゴンサレス、ペロ・ラモン神父・ジョアン・ベルナルデス修道士とマシモ（班鳩）と称する日本人修道士を捕虜にした。—三人のヨーロッパ人は、『黒田』官兵衛のとりなしで釈放されてさっそく自由になった」（『マトス神父の回想録』 傍線引用者）

「捕らわれていた我らの司祭たちの自由と解放に関しては、（加藤）主計殿（引用者注 加藤清正）は、当初はただ彼らに対し、きわめて厳しく、しかも憤慨していたが、その後、彼らについて得た非常に良い情報やまた書状によって幾度となく万事交渉していた国主（黒田）シメアン官兵衛殿からキリシタン宗団について抱くようになった同僚や愛情によって、回を重ねるごとにますます穏やかになって、ついにはローマに赴いた四人（の公子）の一人で、修道士である（原）マルチノを通じて（巡察師は彼と）全き親睦を結ぶに至った。巡察師（ヴァリニャーノ）は、彼は自分の側から（加藤）主計殿自身のところへ訪問のために派遣し、そして彼にまた我らの諸問題について陳述させたが、その第一は、我らが日本にきている状況と目的について、その第二には、日本の全諸侯と友好を望んでいるが、我らが外国人であること、また巡察師が当地に来てからは、常に彼とこのような友好を結ぼうと努めて、そのために数人の修道士を何度も彼のところへ派遣したが、彼と（小西）ドン・アゴスチノの間に生じた断絶と不和のために彼と交わることができなかった次第（を告げさせた）。そして最後に司祭たちが宇土城の人々と城を引き渡すよう交渉するのはよくないと考えたことについて、幾多の当然の根拠を挙げ、すべてこれらの理由が正しかったとみなすとともに、司祭たちは彼に対して、何ら罪を犯してはいなかったことゆえ、（捕えられている同僚たち）を釈放し、そして貴地には大勢のキリシタンがいることだから今後は厚意を示してもらいたいと頼んだ。

修道士は、これら、およびその他の情報を自分のごく親しい人の一人に伝えたところ、彼はそれらに大変満足し、主君の（加藤）主計殿も満足するに違いないと語ったが、それらに接すると事実、彼は満足して、すぐに（投獄中の）司祭たちの釈放を決意した。だが、彼がいとも尊敬する（黒田）官兵衛殿は、もし自分の願いによって（司祭たち）を釈放しなければ大いに抗議してくるので、（主計殿）は、修道士に逢ったり司祭たちと親しくなる以前に、自分は（黒田）官兵衛殿から懇請されたことに基づいて彼らを釈放する気になったのだと言った。そしてそのことで、彼のような（立派な）殿に役立ちたいからするのだと言って、すぐに（司祭たちを）釈放し、司祭たちには、（黒田）官兵衛殿に感謝せよと言わしめた。」（1599－1601年、日本諸国記（フェルナン・グレイロ編『イエズス会年報集』） 傍線引用者）

「（黒田）官兵衛殿は、その権威と懇請によって、我らの抑留中の同僚らを釈放してもらうことについて、（加藤）主計殿（引用者注 加藤清正）のもとで熱心に直接交渉にあたったところ、主計殿は日ごとにずっと心を和らげて、ついには我らの友となった。・・・（中略）・・・

会員の一人によって陳情書にしたためられたこれらのすべては、（加藤）主計殿の腹心の家臣に手渡され、家臣はそれに満足すると、その主君と我らを和解させた。会員たちはただちに牢屋から釈放された。しかし彼らが釈放してもらえたのは巡察師の嘆願によってではなく、（黒田）官兵衛殿の希望をかなえてあげたいとの熱意からであったことを一同が理解するように、（加藤）主計殿は、牢屋から出された同僚たちが長崎へ向けて出発するに先立って、巡察師から彼らのもとへ遭わされた一人の会員（修道士）の所へ（挨拶に）行くことを望まなかった。そして我らの同僚たちに対しては次の任務が課せられた。彼らはその釈放の恩人は（黒田）官兵衛殿であることを認め、また彼の名において己れ自身に対して感謝するように、と。その後で一人の会員（修道士）に、（彼らと）話しを交わす許可が与えられ、また巡察師から指図を受けていた事柄を知らせる許可が与えられた。これらすべては不思議なほど（加藤）主計殿の氣に入った。そこで彼は同僚（修道士）に対して大いなる敬意を抱いた・・・（中略）・・・

もし彼（加藤清正）が（小西）アゴスチノの所領であった地を内府様から得たとしたなら、この時キリシタンになっている人々は、彼らの信仰を保つだけでなく、その信仰を偶像崇拜者たちの間に広めるという大きな希望があり、そして我らはこれらの人々が非常に喜んで、大きな利益となるキリシタンの洗礼の軛（キリシタンになれば多くの掟を守らねばならぬ）を受けるであろうと期待している。」（1601年2月25日付、長崎発信、ヴァレンティン・カルヴァーリュのイエズス会総長宛、日本年報補遺（ジョン・ヘイ書簡集） 傍線引用者）

多少まどろっこしいが、多めに引用した。上記の史料では、教団関係者を捕縛した加藤清正ではあったが、官兵衛からキリシタンについての話を聞いて、徐々にキリスト教への態度を軟化させていることがわかる。清正はバリバリの日蓮宗徒であった。しかし、清正が尊敬する官兵衛から諭されたことが大きかったようである。清正が家康から、旧小西行長領を与えられたときに、いままで通り布教活動が続けることができるかも知れない、という希望を抱いていたようだ。

なお、その後の筑前国に入封して以降の晩年の官兵衛の行動については、天の巻（中巻）Q7で述べたいと思う。

7・まとめ

以上見てきたように、官兵衛はキリシタンとしての熱心さで、自らの信仰を深めるとともに、それを他の武将たちや自分の一族にも伝えていった。ただし、彼は決して入信を強制したわけではなかった。また、イエズス会教団の保護に努め、自身の居城中津城に神父を招いて教会堂を建て、領民たちにも伝道していった。

【Q4】 「片手に剣、片手に十字架」

官兵衛はキリシタン入信後、「片手に剣、片手に十字架」と宣教師が言ったように、九州平定戦の軍監として采配をふるった。

キリシタンになったあと、その戦場での様子に変化があったのだろうか？

九州平定戦以降の変化について見てみたい。

官兵衛は永禄5年（1562）17歳で初陣（注7）を飾ってから、大小さまざまな戦闘に参加し、動かした軍勢の規模も様々であった。記録を見る限り、抵抗が激しい城や裏切った城を徹底的に殺戮したという記録はほとんど見らない。むしろ、殺戮を避けて調略によって敵を味方に引き入れることに徹していたようだ。

これも命を大切にした彼の性格や生き方が関係しているのだろうが、それだけではなく、キリシタンとしての信仰が影響しているとも言われている。では、具体的に官兵衛が合戦に臨んだときに、どのような様子だったのか。合戦における官兵衛の行動全般を見てみよう。

1・戦闘行為はキリシタンの教えに反しないのか？

ところで、「汝人を殺すことなかれ」というキリスト教の教えは、合戦に臨む上でネックにならなかったのだろうか？もし、人を殺せないとしたら、武士にとって商売にならないのが戦国時代であった。江戸時代であれば、武士でも人を殺さずに生きることはできたろう（人を斬ることなく、一生を終えた者もたくさんいたことだろう）。果たして、官兵衛はどのように折り合いをつけていたのだろうか。

これについては、殺戮が日常的に発生する戦国時代に、戦闘を生業とする武士たちに向かって、「殺してはいけない」というような非現実的なことは強制されなかったようである。

次のような逸話が伝えられている。大友宗麟が島津勢に攻め込まれて臼杵城に籠城した際に、宗麟はキリスト教徒もそうでない者も城に避難させ、自ら握り飯等を配った。宣教師はそうした行いを記録にまとめ、その中で宗麟のことは「王」と記している。その記録の中で、キリスト教には「汝、殺すなかれ」という教えがあるが、戦闘行為はその教えに抵触しないのかという、宗麟の質問に対して、宣教師は「戦さの上で殺生は何の問題も無い」と返答したという。

戦いを生業とする武士に対して、「殺してはいけない」なんて、そんな杓子定規なことを宣教師たちは言えなかっただろう。もし、そんなことを言っていたら、あんなに多くの武士たちに受け入れられるはずはなかった。宣教師たちがやってきたヨーロッパでも、当時は戦争が絶え間なく、クリスチ안의軍人も多かった。彼らは、自分がやっている殺人と、信仰している教えとの間の矛盾に悩んだかも知れないが、戦うほかなかったのであろう。ただ、できるだけむやみに人を殺さないように配慮することはできただろうし、宣教師も勧めたかも知れない。

官兵衛としては、できるだけ「無益な殺生」を避け、「殺さずに生かす方法」を考えて行動していた。これが、官兵衛が現代人の日本人の感覚に近いと言われることの一つの理由だ。

もちろん、殺人はやむを得ないという戦国時代の現実を優先して、キリスト教の教えを無視して殺人してもかまわないというわけではなかった。キリスト教は単なる社会福祉でもないし、また、逆にたましいの救済だけに矮小化されるものでもない。

このように、キリスト教の教えの理解によって、現実と理想とのあいだのギャップに悩みながら、できるだけ、「隣人を愛する」「人を殺すな」ということを実践しようとした官兵衛の姿があったのだ。戦国の世を早く終わらせれば、そのような殺人もしなくても済むから、そのためには、とにかく今、戦うしかなかったのである。

2・戦場に必ず修道士を同行

軍監として赴いた九州平定戦の陣中において、修道士を同道して、彼らと起居を共にし軍務の傍ら、彼らから教えを聞いた。これについてはQ3で述べたとおりである。

3・戦い方（キリシタン人信前）

官兵衛がキリシタンに入信する前後で、戦術にどのような変化があったか見てみよう。もちろん、キリシタンに入信したから変化したとは必ずしも言い切れないが、いったん前後の変化をみてみよう。

まず、官兵衛が入信した時期は、すでに説明したとおり、秀吉が大坂城を建てた頃が有力だと考えているので、それ以前の合戦となると、秀吉の播磨国平定戦から賤ヶ岳の戦いあたりまでということになる。これらを列挙してみよう。

- ・青山合戦
- ・土器山（かわらけやま）合戦
- ・英賀合戦
- ・第一次上月城攻め
- ・淡路島の由良城攻め
- ・因幡国鳥取城攻め
- ・備中高松城攻め
- ・山崎の戦い
- ・賤ヶ岳の戦い

これらの戦闘において、官兵衛はどのように戦ったのであろうか。

『黒田家譜』における、これらの合戦の記述をみると、官兵衛の戦術について多くを理解できる記述は少ない。兵糧攻め、水攻め、要所をおさえて勝利を得たとか、記述するのみで、鉄砲や大砲などの新兵器を使ったかという記述はほとんど見られない。

そもそも官兵衛が織田家の評価を一新したのは、長篠の戦いで武田の騎馬隊を打ち破ったというニュース（秀吉が喧伝したガセネタという説もある）を聞いたからであり、その合戦の中で、織田軍が鉄砲隊をうまく運用していたと言われている。その数ヵ月後に小寺家を織田方につかせ、自ら使者となつて岐阜城を訪れている。つまり、その時点で官兵衛が鉄砲の威力を知っていた可能性があるということだ。

そして、官兵衛がその利用価値を検討していたであろう。しかし、仮に鉄砲を利用していても、『黒田家譜』の性格上、鉄砲という兵器の威力があつたから敵を打ち破ったというのでは、藩士たちに示しがつかない。むしろ、武芸を磨いて、いざ鎌倉に備えよ、みたいな訓話にならないだろうから、『黒田家譜』には鉄砲の使用については書かれなかっただろう。そもそも鉄砲自体を大量に投入したからと言って、容易に合戦に勝てるようなものではなかったのである。

ちなみに、播磨国の有力な国人である別所氏が、信長の鉄砲戦術を真似ていたとする記録がある（『吉田家伝録』）。土器山に陣取つての決死の戦いで、龍野城の赤松政秀を撃退したとき、それに呼応して置塩城下に攻撃を仕掛けた別所安治勢2千5百に対して、官兵衛は、八代与次右衛門に精兵3百を預け、中入り隊として密かに背後を突かせ、自らは正面攻撃で百余人を討取つたという。ただ、八代与次右衛門は鉄砲の銃撃で戦死し、中入り隊がほぼ全滅したらしい。別所氏が早くも信長の戦術をまねて鉄砲隊を作っていた可能性が高いことが窺える。

いずれにしても、土器山での戦いの時点では官兵衛は鉄砲隊を持っていなかったらしい。

ちなみに、鉄砲は天文12年（1543）に種子島に伝来し、近江国の国友村で翌年生産が始まつた。発注したのは、室町幕府第十代将軍足利義植と言われる。織田信長をはじめ、各地の大名が鉄砲を戦争に導入し、戦争の仕方が大きく変わった。官兵衛は鉄砲の存在は知っていたであろうが、鉄砲自体が高価であるばかりか、運用時に必要な火薬は輸入品で高価であつた。そのため、播磨の弱小の土豪では、鉄砲には財政的に手をつけられなかったものと思われる。それに、官兵衛は、鉄砲に頼らずとも兵法を心得ているから、大丈夫だつた（？）のかも知れない。

播磨平定戦でも秀吉本隊は鉄砲を持っていたかも知れないが、官兵衛自身が鉄砲を運用した記録は見られない。備中高松城の戦い、山崎の戦い、賤ヶ岳の戦いでも同様だ。

4・戦い方（キリシタン人信後）

では、キリシタン人信後はどう変わったのだろうか。

人信以降の主な合戦は次のようなものであった。

- ・四国平定戦
- ・九州平定戦
- ・豊前国内平定戦
- ・朝鮮の役
- ・関ヶ原の戦いin九州

官兵衛の戦闘の記録の中で、海戦の記録はない。

陸上の戦闘には、野戦と攻城戦の大きく2つあり、野戦における強力な兵器としては、鉄砲や大砲があげられる。これらを駆使したことが明確に現れるのは、関ヶ原の戦いin九州のときである。朝鮮の役において、戦術に変化が現れた。鉄砲を使用した戦闘が主流となったのである。また、豊前国12万石の大名となって財政的規模が大きくなってから入手が可能となったから鉄砲を入手したとも、キリシタンとなり宣教師とのつきあいが緊密になり、入手の斡旋を受けたとも考えられる。

さらに、攻城戦の兵器として、四国平定戦での高矢倉（攻城櫓）、朝鮮の晋州城の戦いでの西洋の亀甲車（戦車）の使用が『黒田家譜』にもみえる。

ちなみに、一般的に攻城法には、以下のようなものが挙げられる（『日本城郭大事典』）。

孫子、呉子、墨子、六韜の三略が攻城の戦術としてつぎの12の方法を説いている。

- (1) 高臨・・・城外に土を盛り上げ、高いところから攻撃する方法。
- (2) 長鉤・・・長い鉤を城壁にかけて攻めのぼる方法。
- (3) 衝車・・・堅固に作った車で城壁を破壊する方法。
- (4) 雲梯・・・車付きの大梯で城内に侵入する方法。
- (5) 堰皇・・・池濠を埋めて城に近づく方法。
- (6) 水攻・・・水攻めにする方法。
- (7) 穴攻・・・トンネルを掘って城壁の下をくぐって攻める方法。
- (8) 突攻・・・城壁に穴をあける。一説では、不意をついて俄に攻める方法。
- (9) 空洞・・・城壁に穴をあけて攻め入る方法。
- (10) 蟻傳・・・兵がアリのように密集して城壁にとりついて攻める方法。
- (11) 憤慍（共にくるまへん）・・・囲いのある四輪車に兵が乗り込み、城壁下に攻め込む方法。

- (12) 軒車けんしゃ・・・八輪車に櫓を作った車で攻め込む方法。

しかし、これらはシナで生まれた戦術であって、平地の中に、掘がなく城壁で囲われた城、という形式が多い大陸の場合と異なり、我が国には山城が多かったため、上記の戦術のうち、現実的に使用できたのは、(6)水攻、(7)穴攻くらいだろう。(6)水攻は、秀吉が備中高松城などで繰り出しており、(7)穴攻は、武田信玄が金山の金堀衆を使って繰り出している。

次に、兵学書に記された攻城兵器は、中国の兵学書から移入されただけで、我が国の実戦に登場したという記録は乏しい。

- (1) 攻城車
- (2) 塔天車（雲梯、行天橋）／飛梯
- (3) 憤慍（共にくるまへん）車／尖頭木驢／木牛車
- (4) 釣井楼
- (5) 亀甲車・・・車軸の低い頑丈な四輪か六輪の車の上に、亀の甲状の牛皮か鉄板で覆ったもので、中に兵が入り、城壁や城門に近づきこれを破壊して突破口を作る。
- (6) 木（櫓車）
- (7) 竹束牛
- (8) 投げ橋
- (9) 火車
- (10) 持備
- (11) 我屈洞
- (12) 継橋

上記の(5)については、我が国の実戦で使用したというわけではないが、朝鮮の役で黒田隊が使用した記録が残されている。次に、その亀甲車についてみてみよう。

（1）亀甲車

亀甲車は、古代シナが由来とも、ヨーロッパで使用されていたものをポルトガルのキリスト教宣教師がもたらしたとも言われている（西洋の城に所蔵された亀甲車の模型がある。もちろん、シナとアラブ、インド、ヨーロッパは交流があったから、純粹な西洋起源ではなかったかも知れない）。官兵衛が兵書を読んで製作したか、宣教師から知識を得て作ったものと思われる。宣教師たちも各地の領主の関心をひいて、布教の許可や保護を取り付けるためには、あらゆる手段を使った。武将たちが関心のあったことの一つは、合戦を有利に進める方法だったことには間違いないだろう。宣教師が官兵衛に書籍を見せて説明したか、あるいは亀甲車の模型を見せたかも知れない。

・亀甲車の構造

亀甲車はどのような構造だったのだろうか。それについては、次のような記録がある。

「その製法は乗り物のようであって、上を亀の甲のように中が高くて、牛の生革を張り、火が付かないように毛の方を内側にし、下に車の輪を付け、転じやすく、柱を四隅に建てて、堅く厚くして、大石を投げかけられて破れないよ

うにして、後に大縄を付け、引き戻すことも自由にできるようにしていた。孫子がいうげうけん車に似ている。日本において使用されたのは、今回が初めて。

この中に人を入れて、石垣の七、八間ほど掘を崩したので、櫓が傾いて城中が騒ぎ立て、なげ松明で亀の甲を焼こうとしたが、牛の生革なので、焼くことができなかった。ついに、櫓を掘り崩し、清正の手の者が城内に侵入した」（『新武者物語』）。

・亀甲車を使用したという記録

そして、朝鮮の晋州城攻めにおいて、日本で初めて使用されたとされている。

使用したときの城攻めの状況について、『常山記談』に次のよう記載されている。

「晋州城を攻めたとき、後藤又兵衛基次が亀甲車を造った。厚板の箱で、内側は強い梁で補強し、石が落とされても箱が壊れないようにして、中に後藤が入って棒の棹を差し、箱には車を付けて、進退自由にして、城壁の側まで押し寄せ、石垣を壊して乗り入れた。」（『常山記談』）

もちろん、晋州城攻めは長政が行っているから、官兵衛は直接関与していないが、亀甲車という発想自体は、官兵衛を通じて得ていたのであろう。晋州攻めに至る状況としては、秀吉の朝鮮の役において、和議成立により捕虜の朝鮮の王子2人を解放したにもかかわらず、ゲリラ活動を続ける反日朝鮮軍に対して、日本軍は慶尚道の晋州城を攻めて、和平の条件である朝鮮半島南部の占領を既成事実としようとして晋州城を攻めた。

黒田長政と加藤清正が共同で「亀甲車」という戦車数台を造り、大手門を破った。水戸東照宮に徳川斉昭奉納の戦車が現存しており参考になるだろう。黒田隊の後藤又兵衛、明石久七が一番乗りを果たした。久七はこれを記念して堀右衛門と改名している（『武家事紀』『黒田家譜』『清正記』『別本黒田家臣伝』）。

また、関ヶ原の戦いin九州における官兵衛の軍事行動において、亀甲車が城攻めに使用されたとされており、急場の寄せ集めの兵で、あれだけの戦功をあげた背景には、鉄砲や亀甲車という兵器の運用がうまくいったからだとも言われる。

（2）高やぐら

次に、攻城用兵器として、高櫓・井楼を使ったという記述が若干残されている。それは、四国平定戦において官兵衛が阿波国岩倉城攻めに使用した「黒田家譜」の記述である。四国平定戦の時期は、官兵衛が受洗していたかどうかは微妙な時期ではあるが、宣教師と接触はしていた可能性が高い時期である。この兵器に関しては、亀甲車とは異なり、山がちな我が国でも使用可能な兵器であり、宣教師から教えてもらって使ったかどうかははっきりとはいえない。

高櫓・井楼は、丸木を高く組み上げて展望性をよくした火の見櫓のような構造で、城門の警護や陣城の物見専門として作られた。

構築目的としては、

- ・物見櫓として遠方の敵の動静を見る。
- ・本陣の背後にあげて見方の指揮をする。
- ・組立式なので臨戦時の応急の矢倉として使用。

と言われているが、官兵衛は攻撃用にも用いた。

過去の使用例としては、

- ・永享の乱（1440年）の結城合戦で、攻撃側の千葉・土岐軍が、1丈余り（約30メートル）の井楼を組み上げたという（『鎌倉大草子』）。
- ・応仁2年（1468）に山名軍が船岡山城に7丈（約20メートル）の井楼を築き、細川軍は相国寺に1丈余り（30メートル）の大井楼をあげている（当時多くの井楼が洛中にあがり、「大矢蔵」と呼ばれた。）（『碧山日録』）
- ・天正2年（1574）、後北条氏が小田原城内に井楼を築いている（『相州古文書』）。
- ・近世に入っても、大坂の陣や島原の乱で多くの井楼があげられた。

<官兵衛の使用目的と戦闘の状況>

では、官兵衛はどのように使ったのであろうか。せっかくなので、『黒田家譜』の岩倉城攻めの原文（筆者現代語訳）をご覧下さい。

「秀長は一宮城を攻め、秀次は岩倉城を攻めた。秀長・秀次は孝高が来たのを喜び（引用者注 官兵衛が、長宗我部元親が仕掛けた四である讃岐国植田城を相手にせず阿波国に入り秀長らと合流したことを秀長・秀次が喜んだことを指す）、孝高に秀次を助けてほしいと言ったので、岩倉城に向かった。この城は天険要害であり、城の守将は長宗我部掃部頭（引用者注 親興）といって剛の者であった。秀次は城を攻める謀を孝高に尋ねたところ、孝高が言うには、この城は要害なので力攻めではいけません。謀をめぐらせて敵の心を圧迫し、城を破ることとしましょう。その旨が秀吉の耳に入り、秀吉から謀は大小にかかわらず孝高に任せよとの指示があった。孝高はまず一つの謀があるといって、材木を集め城楼よりも高く組み上げ、城中を見降ろし、ここかしこから大鉄砲を撃ち掛け、1日に3回打ちかけた。城兵は勇猛であったが、4万あまりの大軍が山野をぐるっと取り囲み、闇の声を上げたので、大山を崩さんばかりであった。城中では降参の兆しが見えた。孝高はこれを察知して、使者を派遣した。城兵はやがて同意して開城した。掃部頭は兵を率いて土佐に帰った。孝高の謀で兵力を減らすことなく、19日の間に城を降した。岩倉城陥落と聞き、隣の城（引用者注 脇城）に籠城していた長宗我部新右衛門（引用者注 親吉）なども、城を捨てて土佐に帰った。そのほか、讃岐の諸城も、孝高がかねて図ったように、降参するか、城を捨てて逃げ、ことごとく平定された。」（傍録引用者）

岩倉城は阿波国西部の重要拠点として、重臣の長宗我部親興（元親と従兄弟）を置き、5千の兵を入れて守ったと言われる。長宗我部の動員兵力からすると、割と多めの兵力を割き、天険に拠って防衛するつもりだったのだろう。いくら頑張っても、相手方の兵糧が尽きたり、相手の領国で反乱が起きたり、援軍の望みがなかったのでは、籠城戦の意味がない。

秀吉軍は基本的にそれらの心配は少なかったし、すでに、紀州の雑賀・根来も平定され、上方は秀吉自身が抑え、

中国地方は毛利勢が押さえていて、援軍の望みはなかった。もちろん、九州からの援軍は望むべくもなかった。そのため、兵力で不利だったが、天嶮によって逆襲を仕掛ける戦法を取るしかなかったのだろう。

しかし、その目論見は叶わなかった。秀吉軍と小早川軍（伊予方面に侵攻）の方が圧倒的に兵力は大きかった（秀吉勢6万、小早川勢3万の合計9万）。長宗我部勢は土佐勢6千を含めた総勢2、3万程度だった。兵力2乗の法則があるので、9万対3万だとしたら、兵力はその2乗の比で、9対1となる。圧倒的に多勢に無勢だ。秀吉勢6万が淡路から阿波へ、備前から讃岐へと、小早川勢3万が安芸から伊予へ、三方向から四国に進軍してきた。一方向から来る敵であれば、大軍の身動きが取りにくい地に誘い込んで戦うこともできようが、それもできなかった。狭隘地に陥として築いた植田城も官兵衛に見破られ、長宗我部の防衛線は後退していき、劣勢に立たされた。兵力の差だけでなく、秀吉の方には、官兵衛や小早川隆景を始め、スタープレイヤーが多い。一軍を引き入れる大将や軍師が揃い、武器や兵糧の補給も十分だったから、到底勝ち目はなかっただろう。

ただ、岩倉城については要害であったため、官兵衛は力攻めは避けて相手方の疲労を待つて犠牲を最小限に抑えた。

（3）旗印

また、官兵衛は、戦闘時の軍勢の旗印を、十字架と聖杯が書かれたものとしていたようだ。



おんり えど ごんぐじょうど

そもそも旗印とは、たとえば有名な武田晴信（信玄）の「風林火山」、徳川家康の「厭離穢土欣求 浄土」（汚れた世を捨てて、浄土を実現せよ）、織田信長の「永楽通宝」、真田家の「六文銭」などは時代劇でご覧になった方はあろう。これは一種のスローガンやシンボルのようなものであった。要はそれだけ重要なメッセージ性のあるものだったし、武将の個性が現れるものでもあった。官兵衛は十字架と聖杯を旗印にしていたのだ。

イエズス会の書簡には以下にある。九州平定戦における官兵衛の軍勢の様子を記したものだ。「海にも陸にも十字架がひるがえる多数の旗でいっぱいになり」（1587年度イエズス会日本年報）

また、関ヶ原の戦い当時の九州における官兵衛の軍事行動の様子を記したものには、

「このたびの戦さの当初から、この国主は内府様に味方することを決意し、その全生涯の告白をし、戦さの準備をしながら、多数の家臣たちを集め、自分の兄弟で立派なキリシタンである惣右衛門殿とともに、キリストの十字架がついた自分たちの旗を掲げて豊後の国に侵入した。その地において、携えて行った至聖なる十字架の力によって前述の勝利を収めた。」（1599年度イエズス会日本年報 傍線引用者）

この他には、

「（黒田）官兵衛殿・・・（中略）・・・は自分たちの旗幟に一同の眼につくように救済の十字架像をつけた。なぜそうしたのか、これを軽々しいこととして誰も軽蔑してはならぬ。なぜならこの下の地では、この主君の威勢は大きく、彼が公にした輝かしいキリシタン信仰の証言によって、偶像崇拜者たちのもとでキリシタンたち一同を大いなる栄誉へ導くであろうことは疑いないからである。」（1601年イエズス会日本年報補遺）

また、福本日南氏は、自ら取材したフィリピン国マニラ市のサン・セヴァスチアン教会の記録を引用し、「関白殿が九州平定戦のとき、その前衛將軍ケラ・カムビョウイ殿（官兵衛のこと）らは、その旗印の徽章に十字架を用いていた」（『黒田如水』7）と書いている。

この記述を信用するのであれば、官兵衛が九州平定戦と「九州関ヶ原」ではキリシタンであることを鮮明にして、キリストの名のもとに戦いに挑んでいたということになる。なお、官兵衛は九州平定戦後に隠居しており、その後、朝鮮へ出兵しているが、このときにはどのような旗印を使っていたか、知ることはできない。

（4）鉄砲、大砲

すでに朝鮮の役以降の戦術の変化により、鉄砲が主戦力として運用されていた。朝鮮在陣の武将に発した秀吉の書状に倭城一つに大筒一門の指定もあるくらいだ。それまでの戦闘では、弓矢にあたって死亡するのが7割ほどと言われていたが（以下にも白兵戦での死亡は2割程度）、弓矢に変わって鉄砲が死因の第1位になっている。時代劇などで白兵戦での亡くなったことが多いような雰囲気になってしまっているのは、戦前の日本陸軍がそのような教育を行い、銃剣突撃による局面打開を図ろうとしたためといわれている。戦場では、弓矢や鉄砲などの「飛び道具」での殺傷が中心であり、時代劇のイメージとは全く違う点には注意して欲しい。

官兵衛は、関ヶ原の戦いin九州のうち石垣原の戦いにおいては、陽流抱え大砲を使用し、大友軍の国崩しの大砲に対抗したと言われている。ちなみに、陽流抱え大砲の砲術はその後黒田藩の砲術として現代に伝わっている。また、国崩しの大砲は、島津家久の豊後侵攻で臼杵城に籠城した大友宗麟が、ポルトガルから購入したこの大砲2門の火力で島津勢を撃退している。



秋月林流抱え大筒礼射の様子

【Q5】 秀吉の伴天連追放令

秀吉が天正15年（1587）に発令した伴天連追放令により、官兵衛をはじめとするキリシタンや教団の運命が大きく変わっていく。その影響と官兵衛の行動はどうだったのだろうか。

秀吉は九州平定戦後、天正15年（1587）、九州博多において、伴天連追放令を突如発令した。これにより、秀吉とイエズス教団とのそれまでの親密な関係は一転した。追放令を発した動機には諸説あるが、いずれにしても、この追放令により、原則として教団の国外退去が命じられるなど、キリスト教団の布教活動は打撃を受けたことには違いない。官兵衛の人生にも微妙な影を落とした。

このことに関して、『黒田家譜』には全く記述がないことは既に述べたとおりだ。

『黒田如水伝』では、追放令そのものについては触れられていない（九州平定戦の論功の場面で、豊前六郡しか与えなかった理由として、キリシタンだったことを秀吉が嫌がったことを理由にあげている著作が紹介されているだけだ）。福本日南著『黒田如水』にも、禁教令そのものについては触れられていない。

1・秀吉とイエズス会との蜜月

まず、秀吉とイエズス会の関係からみていこう。

以下は、秀吉とイエズス会の蜜月の様子がわかるように、詳しく記したので、雰囲気をご理解頂ければ、ざっと読んでいただいても構わない。

さて、秀吉は、当初キリシタンに対し、厚意を示していたようだ。天正12年（1584）イエズス会日本年報には、「今羽柴秀吉殿・・・（中略）・・・はただデウスの教えに反対しないばかりではなく、大いに我が聖教を尊び、坊主の欺瞞の宗旨よりも真なるものと認め、キリシタンに信頼し、側近にある大身たちの子息がキリシタンになることと聞いて喜んでゐる。ジュスト右近殿については、毎日城中で語り、彼を称賛し、その模範的生活に驚嘆し、青年でかくも欲を制するものは珍しいと考えている」とある。

また、秀吉の重だった武将であつた高山右近、小西行長、池田教正、安威了佐らは、大いに宣教師のために尽力し、秀吉の大奥にさえ幾人かのキリシタンがいたくらいであつた（それらの女性たちが持っていた洗礼名のような西洋風のあだ名で女性たちは呼び合っていたらしい）。しかも、彼らは公然と信仰を続け、秀吉はこれを信用し重んじていたようである。

天正14年2月13日（1586年4月1日）に、秀吉自ら信長の一子、ならびに諸將を同伴して、突然大坂の天主堂を訪ねて、バードレと気軽に談話を交え、「予は、おぬしが教えについて語ったところごとく満足し、キリシタンとなるについて、大勢の妻をもつことを許さぬ戒律以外には困難を感じぬ、もしこの点を緩くすれば、予もまたキリシタンとなるであろう」と秀吉一流の冗談を飛ばし、出された砂糖菓子等をむしゃむしゃ食べたという。

副管区長コエリョは、北政所を通じ、以下のことを秀吉に願ひ出た。

- ・全領内で自由にデウスの教えを説き、一切妨害を受けない。

- ・我が駐在所（カーサ）及び天主堂に対して、坊主や僧院の一般に課された義務を免除し、兵士の宿泊所とすることを免ずる。

- ・外国人としての一切の義務を免除する。

以上三箇条の特許状を願ひ出たところ、秀吉は直ちにこれを容認し、特許状二通に自ら署名して下げ渡した。

その後まもなく（天正14年3月15日（1586年5月3日）、大坂城の秀吉を訪問して異常な歓待を受けている。大坂築城には、30余ヶ国の大名を動員して工事を進め、天正12年8月に大坂城に移った。その全景は、黒田家の「大坂冬陣屏風」その他に、工事の状況は大村由己「秀吉軍記」に見えるが、それよりバードレの書簡に詳しく書かれている。

コエリョはバードレ4名（コエリョ、フロイス、オルガンチノ、セスベス）など合わせて30余人の同行を引き連れて長崎を発し、キリシタンの安威了佐、キリシタン嫌いの施薬院全宗両人の案内で登城した。高山右近がキリシタンだったため取持ち役を命じられ、フロイスが通訳となり、秀吉に面会した。

秀吉がバードレから近い場所に座って、彼らと話し、その心中を話したことに人々は驚いた、とある（武将が庶民と言葉を交わすことは稀であつたため、驚いたのである）。

日本在住の宣教師たちが教えを説いて弘める以外に他意がないことを称賛し、天下を平定したら、美濃守（弟、秀長）に譲り、自分は朝鮮、シナ征服を考えている。そのために2千艘の船を作る予定であるが、バードレたちに望むところは、十分に武装した大帆船2隻を入手する斡旋をしてもらいたい。対価は望みに任ず。いったんシナ人が帰服してしまえば、別に野心はなく、その時になって各地に聖堂をたて、皆がキリシタンになることを命じて日本に帰る。また日本の半分、あるいは大部分をキリシタンとすべきだ」とさえ言っている。

ついで、他の随行者たちを呼び寄せ、城内をくまなく案内させ、ある場所では、秀吉みずから案内に立って、天守閣に登って工事について説明したりした。最後に酒肴を供し、みずからバードレやイルマンらにサービスをした。これは、秀吉がキリシタンに厚意を寄せていることを天下に示したものであった。

しかし、このことがあつてわずか一年後に、伴天連追放令は下つたのであつた。

2・禁教令、発令さる！

島津義久の降伏によって九州平定戦は終わり、秀吉は西征の諸将とともに箱崎（現 福岡市東区箱崎）に凱旋する前、秀吉は5月14日、肥後の八代で、副管区長コエリョ、ルイス・フロイス、その他パードレほか、ポルトガル人の一行が、小西行長の率いる水軍に伴われて秀吉と会談した。そのときの秀吉は甚だ上機嫌で、ポルトガルの人々の日本来航を歓迎し、その通商の自由を保証し、さらにポルトガル船が京畿地方の一港に来て欲しいことを希望すると述べた。

秀吉は、箱崎に約1ヶ月間軍を留めて論功行賞を行い、九州処分を完了し、（少弐・龍造寺、大友氏らの）兵火により焦土と化した博多の復興を図った（官兵衛と石田三成が奉行に任命されている）。

なお、この秀吉が箱崎滞在中、当時平戸にいたコエリョは、秀吉の戦勝祝いに博多に至り、博多港内でフスタ船（砲備をした船）に乗って舟遊びをし、「ポルトガルの食物と葡萄酒」で歓待した。船中では吹奏楽が奏され、秀吉は満足して上陸後、宣教師らその他を招待した。たまたま同席していた博多の豪商で茶人である神屋宗湛が、そのときの様子を簡単ながら日記に記している（『宗湛日記』）。フスタ船とは、長崎で建造されたポルトガルの快速船で、平時は教会の関係者や長崎商人の荷物運送・旅行に使われていた。小型であったが、数門の大砲を積み、戦時には軍船として用いられ、「日本の一艦隊に対抗しうる」（フランチェスコ・パッシオ）ほどの威力を発揮したと言われる。

そのとき秀吉は船の構造をみて賞賛し、コエリョに対して、この年平戸に停泊していたポルトガルの定期船を博多に回航しよう船長にへ伝言を頼んだ。かつてポルトガル船をみたことがなかったから、実際に見たいということであった。コエリョはこれを船長に知らせたところ、博多の港は浅く回航は不可能である、しかし、秀吉の怒りを招く恐れがあるとして、船長自ら秀吉にあって、親しく不可能である旨を伝えた。秀吉はこれを受け入れ、船長たちが弁解のために来訪したことに満足し、彼らに同伴した宣教師たちに荣誉と恩恵を与えた。

また、秀吉はコエリョから請われるままに博多に教会堂の建設を許可し、そのための地所を与えたという。

このような秀吉の様子だったから、官兵衛をはじめとするキリシタン大名やイエズス会の宣教師たちにとっては、秀吉の態度を急変させ、伴天連追放令を発令したことは晴天の霹靂だったに違いなかった。

3・伴天連追放令とは

次に伴天連追放令の中身をみてみよう。

秀吉は、天正15年（1587）6月、九州平定戦後の戦後処理で博多に滞在中に、伴天連追放令を発令した。

まず、6月18日付の覚書で同宗門に対する禁制を発布している。

全文11ヶ条の骨子は、

- ・領主の領民に対する恣意をいましめ、キリスト教信仰の強制を禁止すること。
- ・上級武士（2百町・2～3千貫以上）の入信を許可制とすること。
- ・「天下のさわり」となった一向一揆をとりあげて「本願寺勢力」を批判し、
- ・人身売買と、
- ・牛馬の屠殺・食用を禁止している。

ただ、この法令には、一般庶民や下級武士層の信仰は「心ざし」次第であり、キリスト教は「八宗・九宗の儀」であると明記されていて、キリシタン宗門が体制内の宗教であることを明記している。伴天連追放令がキリシタン＝邪法と決め付けているのと同照的である。同令は、11条の人身売買禁止の条項からみて、秀吉が九州陣中で聴取したポルトガル商人の日本人奴隷輸出情報等に触発されたものであろう。

だが、翌19日、秀吉は、陣中の高山右近を改易し、陣営につめた多数の大名や家臣に19日の一連の経過を説明し、ついで博多湾上のコエリヨに対し、「天下の君の決定」として、キリシタン宣教師は21日以内に日本を退去せよとする、五箇条の定めを通告した。この定めを一般に伴天連追放令と呼び、現在その写しが平戸の松浦史料博物館に残されている。キリシタン宗門は体制外の宗教と規定した（前日の覚書では体制内と規定）。同令で秀吉は、日本は神国、キリシタン宗門を邪法と断じ、伴天連らに対し21日以内の日本退去を命じた。黒船に対しては来航を認め、商教分離策を明確にしている。



五箇条の定め

○高山右近の改易

秀吉は、博多の陣営にいた右近に使者を送って、彼がキリスト教の弘布に尽力したことや、家臣を強制的にキリシタンにしたことなどを取り上げて、キリスト教を棄てるか、大名としての身分を棄てるかと詰問した。

高山右近は熱心なキリシタンで、彼に接した多くの人々に信仰上の感化を及ぼしたという。

秀吉の詰問に対する右近の回答は、大名の地位を捨てて信仰を選ぶというもので、妥協の余地のないものであった。天下人としての意識を高めていた秀吉にとって、この返答は彼の激昂を誘ったことであろう。右近の所領（播磨国明石6万石）は没収され、追放された。

九州平定に動員された秀吉軍には、「海陸ともに十字架の旗」（1587年イエズス会日本年報）が多数立てられているという。かなりのキリシタンの将兵が従軍していたと観られる。その中で右近が信仰を理由として、ただひとり禁制の槍玉に挙げられたのは、彼が小西行長・黒田官兵衛ら秀吉旗下の有力武将を改宗させた活動的なキリシタン大名であり、信仰に燃えて領内の寺・社を破壊するなど、ラジカルな面があったためであろう。

4・伴天連追放令の動機

では、なぜ秀吉は伴天連追放令を発令したのだろうか。

何事も信長の政策を受け継いだと言われる秀吉であるが、キリシタンに対しては、信長の政策を受け継いでいなかった。

禁教令の理由としてあげられているのは、以下の通りである。

(1) 九州でのキリシタンの盛んな実態を目の当たりにしたため(信者の数、教団施設の規模、長崎の植民地化)。

長崎は、迫害からの防備や貿易の利益を守るために現地の強制改宗が行われ、天正8年(1580)以来純然たるキリシタンの街となり、砦と濠を周辺に築いて一種の要塞と化し、かつ砲備をした軍船さえも持っていたのである。また、宣教師らの間に、本格的な軍備をもつべきか否かの論争さえあったくらいで、そんな噂も自然に秀吉の耳にも入ったであろうから、秀吉が危険視するのは当然といえた。これでは、九州がいずれ全部キリスト教の領土となってしまうと危惧したとさえ言われている。

(2) イエズス会の野心説

イエズス会不穏当な動きがあり、領土的な野心があると秀吉が認めたためとする。

(3) 本願寺的性格説

教会を中心とするキリシタン勢力が、本願寺(＝一向一揆)的な体質をもっていると判断されたためとする。信長・秀吉ともにさんざんに手を焼いた一向宗、本願寺門徒の横暴がおもい合わされ、危険極まりないものと考えたのであろう。

(4) 日本神国説

キリスト教が日本古来の伝統的・民族的・風土的思想と抵触したためとする。

(5) ポルトガル商人の失策説

ポルトガル船はイエズス会を援助して密接な関係をもっていたが、平戸にあったポルトガル船の博多湾への回航拒絶や、日本人奴隷の売買・そのほかの品行が重なつて、秀吉が疑惑を持ったため、キリスト教に累が及んだためとする。

(6) 仏教僧侶の画策説

秀吉側近の施薬院全宗らにより、反キリシタン観をもつ者たちによる中傷が原因とするもので、特に全宗はキリシタン婦女子に関する奸言を行い、権力者秀吉の怒りを誘って、発作的に発令に導いたとする。

反キリシタン分子の不平等利用の声は、当然秀吉に届いていた。秀吉の左右にあった反キリシタン分子(例えば施薬院全宗)がこの機会を利したことも当然考えられる。この前後に、秀吉がその信仰を制圧しかねていたキリシタンの巨塔、大友宗麟、大村純忠が相次いでこの世を去り、一種の気安さを覚えたこともあるだろう。今や災いを未然に防ぎ、禍根を絶つには絶好の機会と考え、むしろあわてて禁教令を出したと考えて良いかも知れない。

(7) キリシタン宗門の過激な活動説

神社仏閣を破壊するなど、日本古来の伝統や宗教を圧迫し、信者のなかに不穏当な言動があったとする。このような私闘は、惣無事令に抵触する。キリシタン大名領では、集団改宗と寺社の破壊がなされる場合があった。天下統一を目指す秀吉にとって、宗教勢力の徒党化を抑止することと、宗教間における惣無事を実現することが現実の重要課題であったと言われている。

(8) 秀吉政権の武家官僚による画策説

宣教師の政治干渉を排して、武家支配の道理を貫徹するため、石田三成ら官僚たちの画策で発令されたとする。

(9) 好色の秀吉が有馬地方に美女を求めて、それがたまたまキリシタンだったために成功しなかったから、虫の居所を悪くしたとする説

これについては特に言及しない。

秀吉はどこまでも、宗教の問題と貿易の問題を区別しており、貿易の方は彼の熱望するところであった。しかし、当時の宗教と貿易とは密接不可分の関係にあったため、秀吉の対キリシタン政策そのものが甚だ不徹底なものとなつてしまった。禁教令を出しながら、禁教されたことでかえって信仰熱を煽ることとなつてしまったのである。

禁教令が出た当時、日本国内にいた宣教師は113人であったといわれている。この年ヨーロッパ船の来航として知られているものは2隻で、うち1隻は、禁教令が出た前後によく天草に入港し、他の1隻は、翌1588年に至って出帆した。コエリヨは一時に退去することの不可能であるゆえんを説いて6ヶ月の猶予を乞い、さらに平戸に会合して善後策を講じた。

一方、キリシタン大名を通じて、禁教令の取消運動を開始し、とにかく、いったん住院を閉ざして謹慎し、おもむろに秀吉の心境の変化を待つことにした。九州西部の諸侯はそれぞれ宣教師たちをその領内に匿い(大村氏12人、籠手田氏5人、毛利秀包2人、天草氏9人、五島氏2人など)保護を加えた。一方、秀吉は直ちに長崎をイエズス会の手から没収して直轄領とした。

宣教師たちは秀吉の命令通り退去する気かといえば、決してそうではなかった。信者たちを残して、日本を退去する気は毛頭なかったのである。コエリヨは密かに有馬地方に会議を開き、どんなことがあつても断じて日本を離れない決心をして、聖堂を閉じて俗人の服を身に付け、各地に潜伏して布教に従事することにした。もちろん一方で秀吉の側近に対し、十分運動を試みたのである。

禁教令によって、かえって信者の数が増えていった。禁止されるとかえって信仰熱が燃え上がるものだ。信仰が浅い者は脱落し「ほんもの」の信者だけ残った。また、禁教令が不徹底で、人信は禁止しながら、貿易は続けようとしていた。さらに、上級武士以外の武士のほか一般庶民の信者の信仰は問題にらなかった。

ちなみに、井沢元彦氏の「逆説の日本史」では、秀吉がイエズス会を含めたキリスト教団を警戒した理由を読み取

れる部分がある。「逆説の日本史」シリーズがロングセラーで、ここには従来の日本史の考え方とは異なる井沢氏の考え方が提示されていて、そのなかで、秀吉の唐入りの要因として次のように述べられている。ここから、同氏が考える、秀吉がイエズス会を含めたキリスト教団を警戒した理由が読み取れる。イエズス会を含めたスペインやポルトガルの領土的野心を察知した秀吉が、先手を打って伴天連追放令を出して、楔を打ったと考えられている。

「秀吉はイエズス会の明征服計画を明らかに察知しており、支那大陸が白人の支配に陥れば、日本自体の安全が危険にさらされる。スペインが兵力不足なのを知って、彼らの計画を先取りする方策を立てた。秀吉はコエリヨを大坂城に招き、外航用大型帆船二隻を船員付きで売却してほしいと頼んだ。交換条件として秀吉が提示したのは、明でのカトリックの布教の自由だった。しかし、コエリヨの意図はあくまで日本の支配にあった。彼は二年度に渡海には役に立たない平底のフスタ船に乗って博多にいた秀吉の前に現れ、その火砲の威力を誇示したが、これによって伴天連追放令に繋がる。

まず、最も熱心な高山右近（洗礼名ジュスト）に棄教をせまり、拒否されると国外追放処分にした。キリシタン大名は他においたが、最も熱心な教徒である右近を処分することで一種の「見せしめ」にしたのだろう。また、博多湾上のフスタ船にいたコエリヨには、「バテレン追放令」を直接伝えた。注意すべきは、これは伴天連の追放や処刑までを規定したものではない、ということだ。あくまで貿易の利は確保しておきたかったのである」。同氏の説について紙幅はないから、論ずることは差し控えるが、「キリシタンの人たちって迫害されて可愛そうね」なんてのんきなものではなく、秀吉がイエズス会の陰謀に対して非常に警戒していた可能性はあるだろう。

5・秀吉の伴天連迫害の様子

では、伴天連追放令の発令の影響はどのようなものだったのだろうか。

追放令は、博多や京都などで高札とされ、天下に周知された。秀吉は都の南蛮寺をはじめ各地の教会堂を破却ないし接収したが、追放断行は避けている。ポルトガル船の来航断絶が懸念されたためであろう。伴天連追放令は、正親町天皇の禁令の継承を意味し（将軍足利義輝はその禁令を無視したため現実の適用はなかった）、徳川政権が発動するキリシタン禁制の先例となった。

先にも述べたとおり、博多の町の再建にあたり、秀吉は官兵衛の口添えもあったのか、イエズス会がもっていた土地を返して、教会を建てることを許可した。ところが、一週間も経たないうちに、キリスト教禁止令を発した。しかし、この実行を強制しないと伝え、宣教師たちを戸惑わせていたようだ。当初は不徹底な状態だった。

しかし、時間が経つにつれて、徐々に厳しくなっていく。教会の史料には、

「関白殿のこのキリシタン宗団および司祭たちに対する迫害は悪化の一途をたどった。特に都の諸地方と豊後の諸地方においてそうであった。・・・（中略）・・・関白殿は、この迫害は着手した以上決してその手を緩めないことを明らかに示そうと、我らが都の市、堺の市、さらに大坂の城下に所有している修道院や教会を引き倒して打ち壊すよう命じた」（1588年度イエズス会日本年報）と記録されている。

6・各大名たちの対応

各大名たちはどう対応したのだろうか。

イエズス会の宣教師の書簡には、秀吉に対する恐怖やキリシタンへの憎悪からキリシタンの迫害を始めた者がいると記している。

「異教徒の殿たちの中には、或る者は国王の布告に対する恐怖から〔なぜなら国王は、些細な理由からでもたびたび殿たちの地位を剥奪したからである〕、或る者は（キリシタンに対する）憎悪によって〔彼らはこの憎悪によってキリシタン宗門を迫害していた〕、自分の支配に服属していたすべての（キリシタンの）信者たちに偶像崇拜を強制することに決定した。」（1597年3月15日付、ルイス・フロイスのイエズス会総長宛、長崎における二十六殉教者に関する報告書）

また、キリシタンに厚意を示していたはずの石田三成が手のひらを返して、迫害に転じたことが記されている。

「これらの不信仰の人々の中で重立った者の中に太閤様の非常な愛顧を受けていた博多の奉行がいた（引用者注 石田三成）。彼は己がキリシタンたちに対して〔その数は千名にのぼっていた〕重大な脅迫に加えて、こう命令した。キリシタン（宗門）に対し背教し、すべてのロザリオを自分のもとへ返し、彼らの家々の門戸には異教徒たちが偶像神の名前や、その他の幾つかの文言を書くのを常とした板を打ち付けておくように、と。」（1597年3月15日付、ルイス・フロイスのイエズス会総長宛、長崎における二十六殉教者に関する報告書）

石田三成にとって、キリシタンなんてどうでもよく、単に秀吉が厚意を抱いていたから自分もそのようにし、秀吉が迫害するとそれに従っただけなのだろう。

7・伴天連追放令に対する官兵衛の態度

次に、官兵衛の伴天連追放令に対する態度を見ていこう。

秀吉が追放令を発令することを事前に知っていた者はどれくらいいたのだろうか。追放令の内容が決して緻密ではない点を見ると、あまり深く検討せずに、秀吉が独断で出した可能性もあるかも知れない。もちろん、官兵衛らキリシタン大名たちに事前相談などあるはずもない。驚いた官兵衛は、秀吉の暴挙をいさめたが、かえって遠ざけられた。

『黒田家譜』には、キリスト教関係の記事は一切触れられていないことは既に述べたが、この時、官兵衛が受けた秀吉の勘気について、暗にこの事実を匂わせる記述がある。官兵衛が、豊前六郡を封じられたときの記述だ。

「官兵衛の大志あるのを忌み嫌ひ、石田三成などの家臣たちも、官兵衛の才能があつて、自分に媚び諂わないのを嫉んで、度々秀吉に讒言を述べていたので、その功績が大きいにも関わらず、大國を与えられなかった。ただでさえ、今回日向にあつたとき、秀吉への報告は、官兵衛に誤りがないにもかかわらず、誤りがあつたように見せかけて、無実の罪を着せて、恩賞を厚くしなかった。これにより、恩賞が忠義や功績に釣り合わなかった」（第4巻）。

キリシタン大名は官兵衛以外にも多い。高山右近はみせしめのために改易処分にしたが、官兵衛の知恵はこれから必要であつたし、南蛮貿易も続けなければならない。秀吉は官兵衛を改易にすることなく、一応許し、やや遅れて約束の恩賞を与えた。しかし、それは一国ではなく豊前国六郡であつた。残りの二郡には森吉成（毛利勝信）が封じられた。

ここで、官兵衛が棄教したという説が浮上してくる。高山右近が棄教を迫られたのに、断つたために追放処分にされたのだから、官兵衛も迫られて棄教したものと早とちりしてしまつたのかも知れない。その説によると、日本人を見下し、宣教師が信者の上において、平等に接しない宣教師を何人か見た官兵衛がキリシタンに不信感を抱き、カトリックを捨て禪宗に帰依したとしている。確かにこの頃、イエズス会の日本の布教責任者となつたカブラルは、日本人を見下しており、そのために布教が滞り、教団の発展が阻害されたという事実がある。また、秀吉の側近である官兵衛が率先してキリスト教を棄てたことは、篤く遇していた宣教師やキリスト教を信仰する諸大名に大きな衝撃を与えた、とする誤解が生じている。もしかしたら、秀吉の目を暗ますためにとつた行動の一端が誤解を生んだのかも知れない。

その証拠に、官兵衛がキリスト教を信仰し、教団を保護する姿勢を打ち出していることが読み取れる史料がある。

それは、次のようなものだ。多少長いが、引用してみたい。

1つ目は、九州平定戦の前後の状況が記されている。

「副管区長（コエリヨ）が、イエズス会の関係者に手紙を出し、なんとかして「暴君」関白に取り入って伴天連追放令の撤回を策した。そのためには、多少の資金を使つてもよいと要請した。

これらの手紙を受け取つた人々は、特に官兵衛のもとに行き、働きかけた。官兵衛は博多の秀吉の許に行つた。官兵衛は関白の軍勢に参加した他のすべての者よりも勝利を博した。すでに豊前の国が約束されていた。

しかし、官兵衛が到着しても秀吉は会おうとせず、「官兵衛はそれに値せぬ。国を統治する能力もない。さらに、官兵衛はキリシタンになつたばかりか、諸侯や貴人たちを人信させ、当初の信仰を捨てるように説得してきたのであるから、官兵衛に国を与えるわけにはいかない」と言つて、さらに官兵衛を罵倒した。」（完訳フロイス日本史4 豊臣政権Ⅱ 秀吉の天下統一と高山右近の追放）

2つ目は、小田原の陣の折の状況が記されている。

「官兵衛殿が関東にいた時のことであるが、ある時、彼が我らの使節一行（引用者注 秀吉に拝謁しようとして九州から上京していた伊東マンショや巡察師たち）のたれを思つて発言すると、関白は、汝はまだ性懲りもなく伴天連どものことを話すのか。汝が伴天連らに愛情を抱いており、また汝がキリシタンであるために、汝に与えるつもりでいたものうち、多くを取り上げたことを汝は心得ぬか」と答えた。かくて彼は官兵衛殿に対して、もはや何も言わなかつたので、官兵衛は我らのことを関白の前で話したい気持ちに強く駆られておきながらもうさうすることができなかった。・・・（中略）・・・出陣中に多数の人々をキリシタンに改宗させたという理由だけで、関白から数ヶ月不興を被り、関白は彼と引見しようとしなかつた。その後、関白は彼に三カ国を授けるような期待を抱かせておきながら、豊前国しか与えず、しかもなおその豊前国の一部を接収して（毛利）峯岐守に授け、汝がキリシタンのゆえにこそこれを没収したのだ、と言つた。」（完訳フロイス日本史5 豊臣政権Ⅱ 「暴君」秀吉の野望）

いざ知らず、官兵衛が何となく秀吉を説得して、伴天連追放令を撤回しようとしてみていたことが読み取れる。秀吉の意図に反して信仰を保ち続け、教団の保護に動いていることが秀吉の不信を招き、本来与えるべき知行地の一部を与えられなかつたと宣教師は記録しており（この点は別の巻で論じたいと思う）、秀吉に会つてもらえないなど、この頃の官兵衛と秀吉の関係は冷え込んでいる。秀吉の播磨下向の際には「弟小一郎と同様に思っている」というホットな関係だったのに。これが後に、家康への接近、豊臣家衰亡の遠因になつたといわれる（後述する）。

まとめると、官兵衛は棄教していたわけではなく、むしろその逆に、秀吉になんとかして立ち向かつていったのである。

ちなみに、秀吉に官兵衛のことを讒言したのは、反キリスト教の施薬院全宗であるという説がある点はすでに述べた。それだけ、官兵衛の伝道がすさまじかつたのだろう。秀吉の側近だつたということも、官兵衛が標的にされたことに関係しているかも知れない。一方、前田利家、小西行長や蒲生氏郷はターゲットになっていない。熱心な勧誘をしていなかったからかも知れない。

ここで、上記の史料では、秀吉が官兵衛に与える約束をしたのが、1カ国か3カ国か、情報が錯綜している。上司がそのような期待を抱かせて部下を操縦することはよくある話で、部下を気に入らなかつたら難癖つけて褒美を削るなんてことは、ありうろ話だ。その「難癖」が、キリシタンの熱心な伝道、しかも相手が、社会的影響力のある他の武将だつたことだつたというのは、非常に重要なことだと思う。

その後、天正19年（1591）閏1月8日、官兵衛と小西行長の取り持ちによって、イエズス会の使節が秀吉との面会を許され、巡察使ヴァリニャーノと伊東マンショら遣欧使節の4人が、聚楽第で秀吉に引見された。ちなみに、そのときの使節一行の姿が予想に反して非常に美しかつたので、京・大坂の街の人々が非常に喜んだという。以前にやつて

きた朝鮮の使節一行の姿がみすばらしく、行儀も悪かったので、京・大坂の町衆はポルトガルの使節も同じだろうと思っていたところ、予想に反して、美しく着飾って気高さを持っていたからであったと記録されている。これを見た秀吉が、これまた手のひらを返して使節を歓待するように命じた。追放令の撤回を求める意図がみえみえだったので、秀吉は使節との面会に難色を示し続けていたが、このように民衆が使節の美しさに感嘆したので、使節をもてなし、逆にこれを利用した、と教会側の史料に記録されている。

8・秀吉の信仰—無信仰？

秀吉自身がキリシタンを統治のためには危険視して、商教分離策をとろうとしたことは既に述べた。では秀吉自身は何を信仰していたのだろうか。つまり、秀吉自身が既存宗教との関係があつてキリシタンを弾圧したのだろうか。

結論からいうと、秀吉は特定の宗教に肩入れせず、宗教は政治に利用するものであつて、信仰するものではないというスタンスだったと思われる。ちなみに、信長も仏教勢力を禁忌し（比叡山の焼き討ちをしているので）、イエズス会に近づいたのも実利を得るためや仏教勢力の抑えとして利用しようとしたただけであつた点は、秀吉も同じであつた。

秀吉は、善光寺如来像（武田信玄が長野から甲斐に運び、信長がそこから岐阜まで運んだ）を京に運ばせた。善光寺如来は阿弥陀如来（阿弥陀仏）で浄土宗・浄土真宗のご本尊である。また、秀吉の出身地の尾張国は日蓮宗がさかんな土地柄で、秀吉の姉の日秀（関白秀次の生母）などは日蓮宗であつた。そして、秀吉が溺愛した子の鶴松を弔うために建立した寺が臨済宗であつた。ということで、秀吉の宗旨には諸説ある。

しかし、最高権力者としての秀吉は、特定の宗教に肩入れして政治に混乱を起こさないよう配慮し、各宗教をそれぞれ取り込んでいく政策をとり、民衆の支持を取り付けようとしたのかも知れない。

「新武者物語」には、次のような話がある。

- ・慶長元年7月に大地震が起きた（300年に1回の規模だといわれている）。京都伏見では多くの家屋の倒壊し、召使の下女やはしたどもが多く亡くなったため、京都伏見大坂堺から遊女数百人をかり集めて使う有様だった。

- ・京都の大仏殿も崩れ、仏像も壊れてしまった。

- ・秀吉は上洛のついでにこれを見て、「仏像を安置するのは国家安泰のためなのに、自身の身体さえも保持できないで張り裂けるとは何事か。何の役にも立たん」と言って、楼門に登って自ら弓を引いて矢を二筋射た。そして、この仏像を壊して、銅像を作ろうと言った。

この逸話が示すように、「仏像を安置するのは国家安泰のため」と言っており、宗教は政治利用するものだとの考え方が垣間見える（筆者やこの説話を作つた者の意図は、秀吉がとんでもない仏敵だったと、こき下ろしたのかも知れないが）。キリスト教の教義はもちろん、仏教の本質も理解していなかったかも知れない。

9・豊後国内の様子―大友義統の態度が硬化

一方、大友宗麟の時代に保護を受けて隆盛を極めた豊後国のキリシタンであったが、宗麟から家督を継いだ大友義統（秀吉から吉の字をもらい義統改め吉統となっているが、義統で記述する）は、秀吉の伴天連追放令によって、キリシタンに冷淡になっていることがイエズス会の書簡から明らかになっている。

「彼（引用者注 大友義統）は若輩だったし、彼も老中も自分たちがキリシタンとなったのは、自分たちが救われたという真実の願望によるというよりはシメアン官兵衛殿の説得によるものであった。彼らの救済はすべてシメアン官兵衛殿の掌中に握られている。だから、関白殿によって迫害がおこされ、キリシタンであることをやめるように命ずる伝言に目を通すとすぐ、彼らは吐唾すべき状態に逆戻りしてしまい、もともと胸に秘めていた悪意をあらわにし始めた。このことに手を貸していたのはほかでもない国主の伯叔父である（田原）親賢やその他異教徒にとどまっている連中であつた。彼らは常にキリシタン宗団の敵であり残酷な迫害者であつたが、豊後にはその他の多くの人々とともに真実のキリシタンといえる多数の高貴な諸侯がすでに大勢いたから、新しい国主（引用者注 大友義統）は副管区長師およびその他の司教たちに対しては大いに礼を尽くしていた。彼の言い分はこうであつた。自分の国を完全に失わないようにするためには、少なくとも外面的には関白殿に調子を合わせておかざるを得ないだろう。しかし内面的には余（引用者注 大友義統）はキリシタンであり、時の経過とともに、わが父（引用者注 大友義鎮（宗麟））が尽くしたのに負けぬくらいキリシタン宗団のために尽くすことを貴殿らに示すであろう。と。」（1588年度イエズス会日本年報）

他の史料には、次のように記録されている。長くなるので要約すると、秀吉がキリシタンを迫害しはじめたので、自分が統治権を失うのではないかと多大な懸念に囚われた。秀吉からの命令は、豊後にただひとりもキリシタンがいないようにせよということだった。大友義統の理解者であり保護者であつた豊臣秀長も秀吉とのとりなしの書状をしたためてくれたが、やはり秀吉の命令を実行した方がいいと忠告され、豊後にいる司祭たちに国外退去するように要請した。また、家老の筆頭である田原親賢が、キリシタンを叩く口実を見つけるや否や大きな迫害を始めた、と記録されている（1588年度イエズス会日本年報）。

大友宗麟は豊後を始め九州にキリシタン王国を建設することを目指した可能性もあるが、その宗麟はすでに亡く、秀吉の伴天連追放令をきっかけに、その事業は大きく後退してしまった。

他の大名領では、領主が異教徒であつた場合には迫害を受け、キリシタンの領主であつた場合に教団を保護した武将もいたとはいえ、布教などの活動は大きく制約を受けることとなった。追放令には徳川政権時代のように徹底されなかったとはいえ、領主たちは秀吉に睨まれぬように気を遣っていた。官兵衛も苦境に立たされることになったのである。

【Q6】 わし、隠居する！

キリシタンとしての行動を嫌われたこともあり、亀裂が入った秀吉との関係。
このこともあって官兵衛は隠居して家督を長政に譲ります。
隠居してから関ヶ原の戦いに至るまでのあいだ、官兵衛はどう動いたのか？
その行動を通して、キリシタンを棄てたのかどうか、みてみよう。

1・隠居後から関ヶ原の戦いまでの流れ

ここで、年表をみてみよう。それぞれ個別の説明は別巻に譲るが、大まかに流れは、領国の豊前に入封したが、秀吉による新たな支配への抵抗から、肥後で大規模な一揆が起き、自領の豊前での反乱が起き、その対応に追われた。官兵衛は、毛利家からの助勢を受けながら、これらを鎮圧し、家臣団に組み込むことに成功した。そこで、家督を長政に譲って隠居した。しかし、隠居しても秀吉からこき使われた。朝鮮の役では、副官的なポジションで朝鮮に渡海までしている。豊臣政権内の主流派は石田三成ら官僚武将に移っており、秀吉に讒言されて、切腹の危機に陥り、出家した。秀吉の死とともに、朝鮮の役は終わりを告げ、次の天下に向けて、官兵衛は家康に接近を図ることとなる。

和暦 (西暦) 年齢	官兵衛に関係が深い事項	一般的な事項
天正17 (1589) 44	3月 検地のため、肥後に赴く。 4月 長政、宇都宮鎮房を中津城で刺殺する。長政、城井谷に兵を送り、宇都宮一族を撲滅する。 5月 家督を長政に譲る。	5月 秀吉の長男鶴松誕生。
" 18 (1590) 45	3月 小田原攻めのため京都を出発。 山中城の戦いで、妹婿の柳直末が戦死。 6月 小田原城に入り、北条氏政、氏直に講和を説得。	7月 北条氏直が降伏を申し出、北条氏政・氏照は切腹を命じられる。
" 19 (1591) 46	8月 肥前国で名護屋城の縄張りを行う。	1月 豊臣政権を支えるナンバー2である秀長が死去。 2月 千利休が切腹を命じられる。 12月 秀吉は関白職を養子の秀次に譲る(太閤と呼ばれるようになる)。
文禄元 (1592) 47	5月 秀吉の訓令を奉じて朝鮮に渡海し、漢城にて諸將と軍議をする。 8月 秀吉の許可を得て帰国。	3月、秀吉、京都をたち肥前国名護屋城に向かう。 5月 日本軍、漢城を占領。 7月 日本水軍、李舜臣率いる朝鮮水軍に敗北(閑山島、安骨浦の戦い)。
" 2 (1593) 48	2月 秀吉の命で再度朝鮮に渡海。東 城寨の囲基事件(浅野長政と囲基をして石田三成ら奉行を待たせて怒りを買う) 7月 秀吉の許可なく帰国し、秀吉の怒りを買う。剃髪して如水円清と号する。	1月 碧蹄館の戦い後、戦線が膠着し講和の動きが起こる。 8月 秀吉、次男秀頼誕生。
" 3 (1594) 49	8月 長政に5か条の教訓を書き渡す。 秀吉は長政の朝鮮での武功に免じて、如水の軍紀違反を許す。	2月 秀吉、吉野の花見を行う。
" 4 (1595) 50	8月 京都滞在の費用補填のため、播磨国揖東郡で2千石の加増を受ける。	7月 秀吉の甥秀次が高野山で切腹させられる。
慶長元 (1596) 51		閏7月 山城大地震で伏見城倒壊。 9月 秀吉、朝鮮再出兵を決意。
" 2 (1597) 52	2月 朝鮮再征で渡海軍の主将の小早川秀秋の補佐を命じられる。 6月 秀秋と共に釜山に上陸し、朝鮮各地での日本式城郭の築城を指導。	
" 3 (1598) 53	1月 梁山城に來襲した明軍8千をわずかな兵で撃退。 4月 秀吉の命で帰国し、伏見で戦況報告。 12月 中津を出発し、伏見の新邸に入る。	11月 明の大軍が漢城に到着し、蔚山城の攻防戦がはじまる。
" 4 (1599) 54	12月 家康に暇をもらい、中津に戻る。	3月 秀吉、醍醐の花見を行うが、その後体調を崩す。 8月 秀吉死去。 朝鮮から撤兵命令が出される。
" 5 (1600) 55	9月9日 長政、9千の兵を率いて中津を出発。 9月13日 如水、石垣原の戦いで、大友義統の軍勢を破る。 10月14日 小倉城を落とす。 10月18日 久留米城を開城させる。 10月25日 立花城(柳川城)を開城させる。 11月15日 中津城に凱旋。 12月8日 長政と共に筑前国名島城に入る。 12月31日 大坂に上り、家康と会見。	閏3月 前田利家死去。 石田三成襲撃事件で、三成が奉行職を免じられ、居城の佐和山に退く。

(「黒田如水―百姓の罰を恐るべし―」小和田哲男著 ミネルヴァ書房 2012年1月発行 の巻末年表に加筆修正して作成)

2・官兵衛、隠居する

九州平定戦での軍功により豊前国六郡を与えられ、領国支配を開始する。検地をはじめ諸々の掟を定めるが、在地の国人領主たちの抵抗を受けてしまう。豊前には元々強力な戦国大名がなく、近隣の強い大名についたりはなれたりして、在地領主たちはそれぞれ好き勝手にしてきたのに、秀吉の支配はそれを許さなかったため、反抗したのである。そのうち、城井谷の宇都宮鎮房の抵抗は頑強だった。しかし、毛利輝元の援軍を得て鎮圧することに成功し、鎮房の一族を滅ぼした。

これにより、豊前国に反乱のリスクがなくなり、長政に家督を譲って隠居しようとした。秀吉はなかなかそれを許さなかったと言われるが、秀吉の帷幄に残ることを条件に、これを許した。そして天正17年（1589）5月、息子長政に家督を譲り、如水（如水軒）と号して隠居した。

3・一般的な隠居の意味

ここで、隠居の意味って、そもそも何だったか確認してみよう。

隠居とは、「戸主が家督を他の者に譲って、隠退すること。または家督に限らず、それまでであった立場などを他人に譲って、自らは悠々自適の生活を送ることなどを指す。もしくは、第一線から退くことなど。隠退（いんたい）とも言う。」などと辞書には書かれている。

隠居したからと言って、それで悠々自適の生活を送って（楽隠居）、第一線から退くとは限らない。

たとえば、室町幕府では、第3代将軍・足利義満が1394年、まだ9歳の嫡男・足利義持に将軍職を譲って出家し、居所も北山御所に移している。しかし義満も1408年に51歳で死去するまでは、政治の実権を握り続けた。

信長は、順調に天下布武を進めていた1576年、嫡男の織田信忠に家督を譲って隠居し、居城も岐阜城から安土城に移している。しかし家督は譲ったといっても、信長は1582年に本能寺の変で死去するまで、政治の実権を握り続けており、信忠の家督相続は形式的なものに過ぎなかった。一説では、信長が存命中から後継者の立場を明確にしておきたかったため、信忠に譲ったのだとも言われている。なお、信長は隠居後、「上様」という呼称を用いている。

そのほかの戦国大名では、後北条氏の歴代当主のほとんどが存命中から隠居して、家督を次代に譲って、次代の体制作りに務めている。

江戸幕府を開いた徳川家康も1605年、つまり将軍職に就任してからわずか2年で、三男の徳川秀忠に将軍職を譲って居城を駿府城に移している。ただし、これは将軍職が以後は徳川氏によって世襲されるものであるということを諸大名や朝廷に知らしめるために行われただけであり、家康も信長と同じく、死ぬまで政治の実権は握り続けていた。現に、家康は存命中に将軍職は譲ったが、「源氏長者」の立場は決して秀忠に譲らなかった。

このように、自分が一線を退いたら、権力基盤が揺らいでしまい、せっかく自分が築いてきたものが崩れてしまうから不安で一線を退けない、とか、あるいは権力から離れられないなどの理由で、形式上隠居しても実質的に力を持ち続けたのであった。

4・官兵衛が隠居した理由

次に、官兵衛が隠居した理由は何だったのだろうか。

これには諸説あり、史家や作家たちによっていろいろな推測がなされているところだ。

このうち、秀吉から疎まれていたのを察知し、お家取り潰しなどのリスクを回避しようとしたという説が主流で、それに加えて、長政に早めに家督を譲って引き継ぎをうまくやろうとした説、豊臣政権の中の石田三成らの台頭で自分の居場所がなくなったとする説など色々あるが、それぞれ見ていこう。

○『黒田家譜』

まず『黒田家譜』では、「今年官兵衛は領地を長政に譲った。官兵衛が秀吉に言ったのは、病気になったので、とても長生きできそうにありません。できれば生きている間に、愚息吉兵衛に領地を譲り、吉兵衛が頂いた領地の経営をさせて、家臣をうまく使って、上様の役に立てるように後見して安心したいと、何度も願ったが、秀吉が許さなかった。官兵衛はなおも食い下がつて、北の政所を通して強く願ったので、領地を長政に譲ることが許された。しかし、秀吉は、官兵衛の才智を惜しんで、年齢がいまだに50に達していなかったので、楽隠居のような生活は許さなかった。常に近くに置いて、謀や計略を用いた。官兵衛が早めに引退して、家督を譲り、官職を捨てたのは、利欲が薄くて心が広い・・・（中略）・・・だけでなく、秀吉が、（官兵衛には）野望があつて武略が優れているのを知つて恐れていたからで、秀吉の家臣たちも官兵衛の功名や英才が人より大きく勝っていたことを妬んでいた者が多かったことから、それらの人々の中傷を避けて災難を逃れようとしたためである。これは明察であつて、身を保つ道であつた。」としており、

・【体調悪化説】

・【秀吉から疎まれ説】

・【家督引き継ぎ円滑説】

・【豊臣政権内での立場の変化説】

がとられている。

○『黒田如水伝』

次に『黒田如水伝』には、大意を示すと、

・宇都宮一族が減び、領内の騒乱の心配がなくなったので、引退しようとした。

・引退の望みは、豊前国を拝領したときからあつたが、忙しかつたので引退できなかつた。

・この年の5月15日、秀吉は勘解由引退の願いを容れ、嫡子長政に豊前6郡12万石を継がせ、上奏して従五位下に叙し、甲斐守に任じられた。

・貝原益軒は、官兵衛の引退が、機を見て身を処する明があると称賛した。

君主からしたら、自分を忌み嫌うだろうと察して、50歳より前に引退。

・秀吉は常に、世に恐ろしきには、徳川と黒田だ。徳川家康は温和な人柄だが、黒田の瘡あたまは、何とも心を許しがたいものだと言っていた（『名将言行録』）。官兵衛の容貌は、一種の異彩を放っていて、秀吉の眼に映っていたことは疑いない。

・官兵衛も秀吉の気持ち察して、44歳の働き盛りに、引退したのだ。官兵衛は、英邁俊鋭で、囊中に錐を包むように、いつもその光芒を露出して憚らなかつたので、官兵衛が、もし機をみて身を処すようにしなければ、早々に身を減ばし、家を危うくするだろうから引退するというのが、官兵衛が引退する理由であつて、さすがに彼は一世の智者であつた。惜しいことに一代の風雲児も、今や多望な時代を捨てて、引退せざるを得なくなつた（第6編第5章 勘解由の引退）とされており、

・【秀吉から疎まれ説】

をとっている。

○福本日南氏『黒田如水』

そして、福本日南氏の『黒田如水』には、

「如水は病弱を理由に引退を願ひ出た。関白秀吉はこれを受け入れなかつた。お前はまだ40を超えただけだ、どうして病氣と称して安逸を貪ることができるのか。官兵衛が再三願つたので、秀吉は帷幄に参画すること続けるなら、吉兵衛（長政）に世襲を許そうと言つた。如水は感謝した。

史伝の立場では、秀吉を、陰険・狹隘・猜疑・忌刻の人だと評価しているだけ、福本日南氏はこれを否定する。

その立場からは、

・蒲生氏郷・・・太閤が彼の雄才を忌み嫌い、これを殺したとする。

・上杉景勝・・・謙信以来の封国に拠つていたのを嫌がり、これを会津に転封したとする。

・竹中半兵衛・・・秀吉がその知恵が自分に優つているのを忌み嫌い、半兵衛はこれを察して遁世を志したとする。

・官兵衛・・・秀吉がその大志を嫌悪して、高松城以来西征に至るまで、殊勲があつたのに、大封を与えなかつたとする。

このほかにもたくさんあるが、これら皆は、徳川氏のために秀吉の人格を傷つけようとしたものに過ぎない。

福本日南氏は、これを否定する。

・蒲生氏郷・・・太閤が最も信頼していた人物。だから、小田原征討の後、これを会津の大封に封じ、東北の抑えとし、家康を背後から牽制させた。その人の持病が再発すると、秀吉が心配し、氏郷が亡くなったことを秀吉は嘆いている。

・上杉景勝・・・会津に転封されると、栄としてこれを受け、その待遇に報いようとした。後年関ヶ原の一举に先

立って、家康の追討の挙兵をしたのは、その証拠だ。

- ・竹中重治・・・太閤がまだ播磨の新領主だったに過ぎないときに、その賢豪を招致するのに汲々としていた。
- ・官兵衛・・・播磨の一豪族に過ぎなかったが、これを信頼して疑わなかった。

これらのことをみても、（秀吉がこれらの人々を信頼していたことが）理解できるだろう。

また、官兵衛が高松以来の西征で大功を立てたものの、太閤が与えたのは豊前6郡18万石に過ぎなかったのは、如水が大志あるのを忌み嫌って、これに巨封を与えなかったわけではない。そのような見解は天下の経略をみていない。小早川隆景と比べてみればわかる。隆景は毛利家一ヶ国の首脳で、九州征討では、自ら3万の軍勢を率いて、事実上先鋒軍の主将であった。その隆景ですら、九州平定後、太閤はこれを封ずるのに、筑前一国37万石として、これを榮譽だとしたのではなかったか。

官兵衛は3千の軍勢を募って九州征討に参加し、殊勲をたてたが、先鋒軍の一軍監であり、およそ1カ国18万石を与えられた。これをどうして少ないと言えるだろうか。

しかし、官兵衛はなぜ引退を告げたのか。大坂の内閣当局がだんだん三成一派の手に移ってきていたからであった。官兵衛と石田三成は、それぞれ秀吉のために智恵を出す人であり、この種の人物は往々にして相容れない。秀吉はむしろ隠居を惜しみ、依然としてその知力を用いた」（26 如水の引退）としており、

・【秀吉から疎まれ説】の否定

・【豊臣政権内での立場の変化説】

をとっている。

○その他の書籍

現代の関連書籍においても、これらの説に依拠するか、あるいは、わからないのでお茶を濁しているのが実情のようである。

5・私の立場

私自身は以下のように考えている。

・【家督引き継ぎ巴潰説】

官兵衛には嫡子は1人しかいなかったの、生前に後継者を確定させる必要はなかった。むしろ、自分の父親の時と同様、早めに家督を譲って後継者を育成しようとしたのだろう。官兵衛の父職隆は43才頃、家督を官兵衛に譲って隠居している。官兵衛もちょうどその年齢になっており（44才）、長政も官兵衛が家督を継いだ年齢に差し掛かっていた。後継者を育成することなく亡くなってしまったら、家中が混乱して弱体化した例はたくさんあった。だから、自分から家督を譲るべきタイミングを図っていたのだろう。しばらく、領国内の反乱が続いたが、それも鎮圧されたので、安心して譲ったのだろう。

・【自由な立場になりたい説】

また、豊前国12万石に封じられてから政務が増えたので、政務に忙殺されることなく、自由な立場で領国全体や中央の政治情勢を見通しておくことを重視したのだろう。また、隠居することによって領国は長政に任せ、ある程度自由な立場で秀吉に近侍しつつ、茶の湯や連歌を通じて諸大名とも親しく交際して、お家の安泰を図っていいと考えたのだろう。

・【豊臣政権内での立場の変化説】

さらに、数千石の弱小大名の家老から、3万石余りの小規模大名、12万石の中規模大名に出世したのであるから、それだけでもかなりの出世だ。収入が当初の100倍以上になっているのである。会社の売上が100倍になったら、それだけで大成功といえるだろう。豊臣政権内での立場も変化してきており、蜂須賀小六や官兵衛は調略や軍略の面で重宝されたが、すでに秀吉に天下が帰するのは明らかであり、官兵衛への依存度が下がってきていた。かわって、平定した領土に対する内政を担当する実務家が台頭してきた。せっかく得た領土を失うことになってはいけなから一線から退き、次の世代に受け継いでいこうと思ったのかも知れない。

・【秀吉から疎まれ説】は限定的に賛成

秀吉から疎まれていたとする説の背景にあるのは、官兵衛が大功の割には小禄だった落差があったと認識されたことや、江戸時代に官兵衛が天下を狙っていたとか狙える実力があつたと秀吉が言っていたと尾ひれがついたことにある。確かに、官兵衛は秀吉に媚びへつらっていなかっただろうし、智恵をズバズバ出してキレキレだっただろうから、主君である秀吉からしたら、頼れる部下だっただろうが、同時に危険視したことはあるだろう。しかし、秀吉には慈悲があつたし、人を見る眼は優れていたと言われる。その秀吉が官兵衛を危険視するだろうか。また、官兵衛が3万石から12万石の領主に出世しているのは、順当であって、決して少ないとは言い切れない（上記で紹介した福本日南氏が言う通り、小早川隆景をはじめとする毛利家関係者に多めに褒美が与えられたのは、その軍役負担の大きさなどからは順当だった。秀吉の直轄領として増えたのは決して多くなく、諸将に与えられたのである）。

そのため、褒美が少なかったことからする秀吉から疎まれていた説は根拠が不十分ではないかと思う。

もし疎まれたとすれば、私は、金子堅太郎の説とは正反対になるが、キリシタンだったからではないかと思う。官兵衛の才智があつたとしても、家康と違って、天下を狙えるような立場にはいなかった。たかが1万石前後の大名を怖れる必要があるだろうか。それよりはむしろ、より反体制分子になりやすいキリシタンとして、熱心に伝道活動をし、教団を保護していたことがリスクと捉えられたのではないかと思う。北条氏はまだ健在であつたし、それが終わって日本が統一されれば、次はシナへの出兵という計画を持っていた秀吉は、まだ官兵衛を必要とした。また、官兵衛は寺社勢力に対して穏健な立場をとっていたため、秀吉として、官兵衛にお免をすえて、働かせればよいと思ったのではないだろうか。

ということで、この説については、疎まれたのは確かだが、それは、キリシタンだったからということに限っては賛成する。

6・如水の意味

官兵衛が名乗った「如水」の意味は何だったのだろうか。

この真意からやはり官兵衛がキリシタンとして生きる決意が読み取れるのである。しかも、キリシタン王国の建設のために自分が切り込んでいこうとする決意が読み取れる。

如水という名前は、老荘思想の「上善は水の如し」を連想するだろうし、禅僧の名前ようでもある。「水徹」を号に用いた竹中重治にちなむとする見方もある。

しかし、それらは真意ではなく、実はこれはキリスト教に則した名前であったという見方がある。モーゼの後継者ヨシュアをスペイン語風に発音するとジョスイとなる。旧約聖書でモーゼの後継者のヨシュアは、神が約束されたカナンの地に入るために戦ったイスラエルの將軍の名前であった。モーゼの死後、神はヨシュアにヨルダン川を渡ってカナンの地を占領するように命じ、ヨシュアは川の手前で野営し、渡った後に3千の兵を先発隊として派遣したという。このことが名に反映されており、官兵衛のキリシタン保護の決意が感じられる。

その後、官兵衛が発行した書状の印判にはローマ字で「Simeon Josui」と刻んでいる（下の画像参照）。また、書状には、シメオン（洗礼名）と如水を併記するなどしている。



7・豊前国内での活動

次に、豊前国内での官兵衛のクリシタンとして活動を見てみよう。

秀吉の伴天連追放令により公然とした布教活動はやんだが、宣教師たちは国外退去するつもりは毛頭なく、クリシタン大名らに置かれて活動した。官兵衛は引退し、長政が国主となった。長政は、秀吉への配慮から、自身もクリシタンであるにもかかわらず、クリスト教団に冷淡さを装ったが、父の官兵衛が信仰を曲げなかったことで、豊前国ではクリシタン教団が繁栄するであろう、ということがイエズス会の書簡の中で述べられている。官兵衛・長政が領国支配を始めた時期の記録である。

「これら西国の9カ国の大部分はクリシタンの領主の手中にある。豊前では行うべきことはきわめて僅かである。我らはここにきわめて偉大な柱石および大規模なクリシタン宗団をもっているからである。新しい国主（長政 引者注）は今のところ態度を不明確にしており、冷淡を装ってはいる。しかし恐れと危険など何食わぬ顔をして必ずや立ち直るに違いない。豊前の国は（黒田）シメアン官兵衛殿の領地で、彼は熱烈なクリシタンである。いま、彼はいささかも信仰を変質させることなく、自らが、昔、関白殿から得ていたと同様の寵愛と優遇を回復している。しかも関白殿からクリシタンのことをとやかかく言われてはいない。」（1588年度イエズス会日本年報）

次に、その1年あまりのちには、すでに2千人の信者があると記録されている。秀吉の伴天連追放令が不徹底で、中津でも布教活動は依然として行われていたのだろう。中津城下には教会や修道院をつくれ、デ・セスペデスが院長として赴任した。



「国主（黒田）シメアン官兵衛殿の息子、（黒田）甲斐守（長政）の領地である豊前国へも、一司祭が2名の修道士と幾人かの伝道士を伴って、その地に居住し同国の改宗を試みるために赴いた。そこにはすでに、2千名以上のクリシタンがおり、このうちには藩庁の重要人物もいた。」（1599－1601年、日本諸国記（フェルナン・グレイロ編『イエズス会年報集』第1部第2巻））

余談ではあるが、この宣教師セスペデスは、文禄の役の際に、日本人修道士ファンカン・レオンを伴って朝鮮に渡り、クリスト教を朝鮮半島に初めてもたらした、と言われている。

ただ、官兵衛がクリシタンに冷淡になりつつあったことが記されていた書簡がある。多少長いが、重要なので引用しておきたい。

「父（引用者注 官兵衛）は憚ることなく、多数のクリシタンとともにミサや説教に耳を傾け、司祭や教会の諸事には欠かさず慈愛をもって恩恵を施し、常にクリシタンとして振舞っていたが、時が経つにつれて悪魔は父からそのような献身的な信仰を奪おうと能うる限りのことをし始めた。しかしながら、彼（引用者注 官兵衛）自身が救霊の諸事にやや冷淡になっており、彼の息子も当然のことながらクリシタン宗団に厚意を示さないことを誰もが知っていたために、彼自ら（引用者注 官兵衛）が望んで司祭を傍らに置いていたので、彼（官兵衛 引者注）を介して、当初はその地で多くの成果が期待されていたが、今日までそれは得られなかった。・・・（中略）・・・」

この司祭館の司祭はたしかに成果を上げていたが、巡察師は国主（黒田）シメアン官兵衛殿が高邁にして信心深いクリシタンとして望まれる良き模範を以前ほど示していないことを知ると、彼に書簡をしたため、その冷淡さを穏やかに戒めるとともに次のようなことを伝えた。

貴殿の息子の甲斐守（長政）は、司祭がその地にいることにあまり良い顔をしていないし、以前のように良き志をもつて信仰を深める機会を持つことなく、務めを果たしもしないために、私は司祭に即刻その国を去るよう命じた。というのは、さらに大きな成果を産む他の事業に彼を必要とするからである。しかし、貴殿がより良く機会を利用し、告白を行ない、その模範によつては家臣の改宗と更生を左右する国の統率者たる人物にふさわしい生き方を望むならば、ふたたび彼のもとへ司祭を遣わすであろう、と。

国主（黒田）シメアン（官兵衛 引者注）はこの書状に驚き狼狽した。そして司祭が退去することを決して承服したがらず、巡察師にこの件について書状を書き送るつもりであり、彼からの返信を待つように司祭に伝えた。その時、もし国主が懇願してきたならば、退去を取りやめるよう命じられていた司祭はこの機会を利用して（靈魂の）救済に関することへの彼の怠慢と冷淡さを達慮なく（遠慮なく？）率直に非難した。国主は非難をよく受け止め、自身の誤りを認めてこれまでのことを大いに後悔した。そして、自らの靈魂の救済のために司祭が命ずることすべてを行なうと誓った。彼はただちに、巡察師のもとへ一人の非常に敬虔なクリシタンの家臣を、多大な敬意と感情を込めた書状を携えさせて派遣し、司祭を留まらせておくよう懇願するとともに、告白をし生活を正すとの誓いを果たすと約束した。巡察師は彼の目を覚まし、正気に戻すために先の書状をしたためたのであったが、それゆえに、国主からの書状にこう答えた。「私は貴殿の魂の善を深く敬愛するが、もし貴殿が行動を望ましいように改めるなら、喜んで司祭をその地に留めておくであろう。しかし、もしそうしなければ、私は貴殿に司祭を退去させるよう請うであろうし、かつまた司祭に対してただちに豊前から戻ってくるよう書状をしたためるであろう」と。（1599－1601年、日本諸国記（フェルナン・グレイロ編『イエズス会年報集』第1部第2巻） 傍線引者注）

上のように、秀吉の伴天連追放令の発令後、秀吉は追放令を徐々に徹底していった。次第に官兵衛への圧力がかけられ、たとえばクリシタンとして熱心な活動をするることによる領地の没収のリスクを感じていたのか、クリシタンとしての熱心さが以前に比べて失われつつあるように映ったようだ。さすがに高山右近は改易されてしまったし、秀吉や側近たちの眼を欺く必要があったため、宣教師たちが期待していたような行動は表立ってとることができなかっただけかも知れない。後述するが、晩年の博多において教会堂を建てて真摯に保護しているので、政治的な配慮からクリ

シタン教団に若干疎遠になっていただけで、棄教したわけではないだろう。前述のとおり、イエズス会の使節の上洛を小西行長らと共に秀吉に認めさせるために動いている。

8・小田原攻め

小田原攻めについて、官兵衛のキリシタンとして明確な活動は見られないが、関係するとしたら、北条家一族や家臣たちを極力助命する方向で動いていたことだろう。それ以外はご参考までに読んで頂ければ十分である（詳細は別巻にて述べたい）。

天正18年（1590）、奥州と関東を除き平定した秀吉は、関東の北条氏や奥州の諸侯に上洛するように促した。関東の支配を確立していた北条氏はこれに従わずに、態度を鮮明にしないまま、秀吉に軍を差し向けられることとなる。

後世、誤った情勢判断が北条氏の評価を下げてしまった。北条氏が抵抗のよりどころとしたのは、三国同盟（徳川氏、伊達氏）があった。また、北条氏五代のあいだに善政を敷いた関東に独立国を樹立していて、中央の政治情勢に疎く、秀吉の実力に対する認識が甘かったことが考えられる（すでに我が国の半分以上を制覇し、朝廷も戴いて関白となっていた）。その昔、小田原城に拠って上杉謙信や武田信玄を撃退していることについての過信があったのかも知れない。そのころの上杉も武田も兵農未分離であり、農繁期（秋）になると軍を引き揚げざるを得なかったが、秀吉軍は兵農分離が進んで農繁期になったからと言って撤退する必要はなかった。

フロイスは『日本史』の中で、以下のように述べている。大意としては、こうだ。秀吉は狡猾だったので、北条氏を攻略するために、徳川氏を懐柔する必要があり、北条氏の領国を与えるという約束をした。北条方には食糧の備蓄がある一方、関白の軍勢は寄せ集めの兵で、敵地での恐怖感があるし、すでに食料の不足が彼らの間で囁かれている。まして冬季ともなれば、積雪に悩まされる。敵軍が撤退するときこそ北条軍には好機である。一挙に攻撃して敵を粉碎するのが北条の戦略であった。

主城の小田原城は巨大な城郭で、街ごと城壁の中に囲み、城内で食糧生産も可能であった。小田原に通じる箱根の天嶮や各地の支城を固め、それらを破られても小田原城で籠城して、秀吉軍も撃退する戦術をとった。

一方、秀吉の軍勢は、圧倒的な数で、北条方の各地の支城を落とし、箱根の天嶮もハイスピードで抜き、小田原城を囲んでしまった。北条方が各地の豪族の人質を入れていた支城が落ち、もはや、秀吉軍に抵抗するのは小田原城のみ、しかし、さすがの名城小田原城は20万の大軍で囲んでもなかなか落ちない。一般には、秀吉は能楽や茶の湯などを催し、大名の女性たちを呼び寄せ、楽しみながら日々を過ごし、石垣山の一夜城を作り、周囲の木々を伐採して北条方の戦意をくじいたと言われる。ちなみに、戦場で楽しんで過ごしていたのは、なにも秀吉が特殊だったわけではなく、よく行われていたことらしい。

「小田原評定」と後世言われるように、籠城中の北条家中では秀吉に降るのか、徹底抗戦を続けるのか、なかなか決しなかった。確かに、秀吉軍が優勢だったが、京都を出発したのが3月で、すでに6月に入っており、このまま徒らに滞陣の日数を伸ばすだけでは、秀吉の威信にも関わることであった。そこで、官兵衛の登板となったのである。野球でいうクローザーと言ったところだろうか。当主北条氏直に降伏を勧め、無血開城させることに成功する。有岡城のときと同様に、ほとんど丸腰で単身乗り込んだのだが、官兵衛はすでに隠居していて、有岡城に乗り込んだ時より一回りも二回りも大きな人間になっていた。なるべくこれ以上の犠牲を出さないために、小田原城の無血開城を目指していたことは、もしかしたら、キリシタンとして、殺戮を好まない彼の思いもあったかも知れない。

この時、北条氏直から名刀「日光一文字」などの家宝を与えられている。名刀「日光一文字」は、日光二荒山の宝物で北条早雲が譲り受けた一文字派の逸品で、現在国宝に指定されている。降伏をする側が、心ざしとして家宝を差し上げるという行為はよく見られることであったが、おそらくそれまで面識がなかった氏直に、非常に短時間で信頼された証であろう。絶対に助命するという覚悟が伝わったのかも知れない。

ちなみに、このとき長政は中津に在城して九州守備の任に命じられていて、出陣はしていない。おそらく、関東・奥州平定には、畿内・東国・北国の諸大名の力を中心にする、この次に朝鮮渡海のために西国の諸大名を利用する腹があり、極力休ませていたのであろう。また、西国に不穏な動きがないように監視する意味もあったであろう。

9・官兵衛、出家する（文禄の役）

（1）出家に至る経緯

小田原攻めが終わり、関東や奥州の諸大名も秀吉に降った。そして、秀吉が九州平定戦の前後に宣教師たちに語った「シナ征服計画」が現実のものとして動き出した。官兵衛はシナ征服の拠点として秀吉が築城を命じた肥前名護屋城の築城に關与し、文禄の役では、大将宇喜多秀家の補佐のポジションとして渡海した。官兵衛はその後、病気の療養を理由に帰国を許され、慶長の役では、大将小早川秀秋の補佐として再び渡海し、軍勢を率いて明軍8千を寡兵で打ち破るなどしている。しかし、許可なく帰国したことを理由に秀吉の怒りを買ひ、剃髪して辛うじて切腹を免れた、といわれている。

『黒田家譜』には、「その後、官兵衛は、太閤に考えを聞くことがあって、朝鮮から帰国したときに、三奉行が朝鮮での囲碁のときの対面ができなかったことを恨んで、太閤に色々と言ったので、太閤が大いに怒って、これ以降、官兵衛は疎んぜられた。官兵衛はこのとき剃髪して如水円清と名乗った。・・・（中略）・・・如水はこの石田の讒言によって、太閤と疎遠となり、時折殿中に出仕したが、長らく対面を許されなかった」と記されており、石田三成ら奉行との仲が良くなかったこともあってか、彼らが秀吉に讒言し、あげあしとられて窮地に陥っている。このとき、一緒に囲碁をしていた浅野長政は一足先に帰国し、薩摩と肥後の国境付近で起きた一揆の平定をさせられている（梅北一揆）。囲碁の話は本当かどうかかわからないが、官兵衛の豊田政権内でのポジションは、相変わらず「軍目付」「補佐役」としての立場であって、全国の検地を成功させ台頭してきた官僚たちとの軋轢が生じていたのだろう。無断帰国は軍令違反で本来なら死罪である。豊田政権は、播磨時代のように、秀吉と官兵衛の個人的関係で事が進められず、組織として動いていたので、ルール違反を個人的な関係で許すことが難しかった。

『黒田如水伝』には、「秀吉は三成・行長らの言葉を信用して、日明の講話を樂觀していた。しかし、明からの回答がないため疑いだした。・・・（中略）・・・如水は上申稟議することがあって帰国したが、秀吉の許可がなかったため、如水の謁見を許さなかった。石田・増田・大谷の三奉行は、今こそ東萊城の侮辱の仕返しをするときだと、しきりに如水を讒訴したので、秀吉はますます怒り、如水の登城を差し止め、まさに切腹を命じようとした。・・・（中略）・・・秀吉もさすがの英雄、如水の中国以来の多大な勲功を回顧し、たちまち前言を翻して、切腹のことは沙汰止みになった。・・・（中略）・・・如水は危うく難を逃れたが、深く将来を憂い、「狡兎死し走狗煮らぬ」とは、古今の英雄がその終わりを全うしなかったことを指し、かつて三木城の陣中で、竹中半兵衛が忠告したことともそのことであったと自覚し、断然と剃髪して世捨て人にその姿を変え、円清と号した。」

とあり、石田三成ら官僚たちから足元を拘われて秀吉の怒りを買ひ、切腹の窮地に陥った。死を覚悟して長政に遺言に値する書状を送っている。官兵衛は「狡兎死し走狗煮らぬ」とかつてシナの前漢の創業者劉邦を助けた韓信と同じように、秀吉の飛躍を支えた自分も、用がなくなれば韓信と同じ運命をたどるだろうと慨嘆し、黒田家の存続・安泰を図って出家したとされている。

（2）円清の号の意味

官兵衛は隠居したときに「如水」と号した。これは、当Q&Aで述べた通りである。そして、今回出家するにあたり、「円清」と号した。この「円清」は彼が亡くなったときの法名にもなるのであるが、どういう意味があったのであろうか。

これについては『黒田如水伝』に、「如水が円清と号した意義を解釈すると、円の字は、父聯隆の法号宗円の円と、幼年の教師円満坊の円を採り、かつ彼が常に私淑していた「水は方円の器に従う」の古語により、また、清の字は、如水の雅号にちなみ、「身は毀誉褒貶の間にあるといえども、心は水のごとく清し」との意味に基づくものであろう。」とある。

「円」の由来とされている「水は方円の器に従う」とは、「方」とは四角のことで、「円」とは円形のことで、四角い器に水を入れれば水も四角い形になり、丸い器に水を入れれば水も円形になるという意味で、それが転じて、人も環境や付き合う人物いかんで良くも悪くもなるということ。孔子の言葉で、『韓非子』に「人君為る者は猶孟のごときなり。民は猶水のごときなり。孟方なれば水方に、孟圓なれば水圓なり（君主たる者は水をいれる鉢のようなものである。人民は、その鉢の中の水のようなもの。鉢が四角なら水も四角い形となり、鉢が丸ければ水も丸い形を作る）」とあるのに基づいている。

また、「清」の由来とされている「身は毀誉褒貶の間にあるといえども、心は水のごとく清し」の古語から来ており、「毀誉褒貶」とは、ほめたりけなしたりする世間の評判のことを言い、小田原陣での無血開城の成功、朝鮮の陣で再び大役を任されての、秀吉の怒りを買って窮地に陥って、世間の評価も浮き沈みが激しいが、自分自身はそのようなものに喜一憂せず、水のように澄んで一点の曇りもない、ということになる。

思えば、普段の生活では、世間の評価に一喜一憂しているが、官兵衛にとっては、そのようなものは本当にあてにならないものだという悟りの境地に達していたのかも知れない。昨日時代の寵児だった人が、次の日には警察に逮捕され世間の誇りを受ける。アジア解放の戦争を礼賛し、それに殉じた人々を軍神とか英霊とか言っていたのに、次の日には侵略戦争だと言い出す。そのようなはかない世評でも、それを少しでもよくしようと必死にもがいているのが、私たちの実態ではなからうか。もちろん、その営みすべてを否定しないし、悪いことばかりではなからう。しかし、官兵衛はそんなことから一線を画して、もっと大事なことを追究していたに違いない。その1つは、自分の魂の問題の解決であったろう。

如水のようにキリスト教を背景した号と異なり、この円清という号にはそのような意味が語られることはない。出家という方式は仏教式ではあるから、キリスト教とは全く関わりがなかったということに間違いないかも知れない。

この「円清」は、官兵衛の法名に「龍光院殿如水円清大居士」にも入れられている。また、官兵衛の股肱の臣であった栗山四郎右衛門利安（備後）が、官兵衛の亡くなった慶長9年（1604）にその冥福を祈るために、知行地の朝倉市に建立している。官兵衛の法号「龍光院殿如水円清大居士」から龍光山円清寺と名付けられた。この寺には黒田如官兵衛・長政、備後の位牌が安置しており、3人の画像も寺宝として保存されている。これについては、Q1で述べ

た通りである。

（３）出家の意味

ここで基本に戻って、出家の意味を確認したいと思う。出家とは、師僧から正しい戒律を授かって世俗を離れ、家庭生活を捨てて仏門に入ることである。ただ、戦国武将にとっても出家の意味はそのような意味とかけ離れている場合が多かったと言われている。

整理すると、次のように意味があった。

- ・仏教勢力の政治利用

武将自らが特定の宗派の僧侶として出家して、その宗派との親和性を高めることを狙った。

例）武田信玄 一向宗徒の利用のため出家。領国の安定のためだけではなく、信長と対峙していた一向宗勢力と結ぶ。

- ・実質的な廃嫡の表明

自分の後継者候補のうち、嫡子であった者を「仏門にぶち込んでしまえば跡目候補では無い」ということを、一族や家臣、領国内、他国へ向けて表明になる意味があった。出家すると、俗世から離れるため、出家したら妻は原則も持てず（浄土宗・浄土真宗は例外）、そうなれば家を継ぐという概念から外れることになるからである。

例）豊臣秀次

ただ、この出家の場合は還俗、つまり俗世に簡単にもどる。信仰に寄る出家ではないため。

例）今川義元 今川氏親の五男として生まれたが、既に同母兄の氏輝が跡継ぎであったために4歳で出家。太原雪斎と共に京都に上り、五山に学ぶ等、学識を深めていた。その後、兄・氏輝が急死、兄彦五郎までもが死亡したために重臣たちから還俗を乞われて家督を継いだ。

- ・降伏や反省（猛省）の意思表示

戦で負けた後に出家して降伏したという例は非常に多い。

これは、「私はもう出家して政治などにはかかわらないから家は許してほしい」「もう出家して戦の意思はないからとりあえず命だけは・・・」といった感じの意思表示。ほかに、明智光秀に味方しないと表明した細川のように「あんたとはもう手を切る」という表明でもある。

出家には上記のような意味があり、仏教の本来の出家とはかけ離れた使われ方をしていた。

官兵衛の出家については、半分は秀吉や諸大名に対する反省の意思表示の意味があったことだろう。とにかく、黒田家の改易は避けられなかった。豊後の大友義統は朝鮮の役の軍令違反で所領の豊後を没収されている（鎌倉時代以来の豊後の名家である大友家は豊後から追放されてしまった）。当時の秀吉であればそれくらいのことは簡単であった。自分は隠居していて、息子長政も一人前に家督を継いでいるから、出家することに未練はない。捨て身で秀吉への申し開きをしたのだろう。このあと、朝鮮で手柄を立てた長政が、秀吉への申し開きした。、秀吉自身はいくら三成らの讒言とはいえ、官兵衛を死に追いやって黒田家を取り潰すほどではない、まだ官兵衛に利用価値はあると思っていて、許したのだろう。そのとき、タイミングよく淀君が鶴松を産み、秀吉が上機嫌になり、難を逃れたとも言われている。

10・慶長の役、秀吉の薨去

秀吉から許されたあと、天正4年（1595）8月、京都滞在の費用補填のため、播磨国揖東郡上岡庄内で2千石の加増を受けている。この年の7月、関白秀次が秀吉から高野山に追放（出家）させられ、秀次は切腹した（切腹自体は秀吉の命令ではなかったとする説がある）。秀頼の誕生で邪魔になったのであろうか。

そして、慶長2年（1597）2月、再び朝鮮渡海が命じられ、主将の朝鮮再征で渡海軍の主将の小早川秀秋の補佐を命じられる。6月、秀秋と共に釜山に上陸し、朝鮮各地での日本式城郭の築城を指導。1月、蔚山城救援のために梁山城を離れた長政の隙を突いて明軍が来襲。しかし、官兵衛は来襲した明軍8千をわずかな兵で撃退するなどの活躍を見た。不利な戦いが続いた日本軍は、晋州城攻めで勝利を収めた。

その後、4月に秀吉の命令で帰国し、伏見で戦況報告をした。

翌年の慶長3年（1599）3月、醍醐の花見のあと体調を崩した秀吉は、8月に死去した。死去の直前、秀吉は朝鮮在陣の諸大名以外を集め、秀頼を盛り立てていくよう誓紙を書かせ、秀頼のいく末を祈るようにして亡くなった。享年62歳。

その後、五奉行の名義で朝鮮からの撤退命令が出された。

11・家康への接近

慶長4年(1600)、豊臣政権は秀頼の傳役である前田利家、諸大名の筆頭である徳川家康をはじめ、次の天下の趨勢を諸大名が見守る中、官兵衛は長政とともにいち早く家康に接近した。長政は蜂須賀家の系姪と離縁し、保科家の栄姫を家康の養女として徳川家と姻戚関係を結んだ。これは、露骨な政略結婚である。このあたりも、キリシタンと関係ないので、他巻で述べたいと思う。

家康は、じっくり時がくるのを待ち、諸大名との縁組で味方を増やしていった。前田利家が亡くなり、家康に追い風が吹いていく。石田三成ら家康と対立する奉行たちと、三成との対立関係にある加藤清正、福島正則らの豊臣恩顧の大名たちをうまく利用して、自分に有利な状況に導いていく。

福島正則らによる三成襲撃事件が起きたとき、家康は自らの懷に逃げ込んだ三成を匿い、懇ろに奉行職を辞して居城に蟄居するように言った。三成はこれを容れ、奉行の職を辞して居城佐和山に蟄居する。家康は、佐和山への帰路に福島正則らから襲われないように、次男の結城秀康に護衛を命じている。

前田家から利長の生母まつを人質を取ることに成功する。このようにして、敵を減らしながら、時を待っていた。

黒田長政は、毛利方を調略するために吉川広家に近づいた。また、去就の定まらない小早川秀秋を味方に引き入れるべく動いている。

確証はないが、家康に接近した背景には、石田三成が過去に博多奉行だったときに、キリシタンの迫害をしている点もあろう。イエズス会の宣教師の書簡には、秀吉が伴天連追放令を発令したときに三成がとった行動の内容が記されている。「これらの不信仰の人々の中で重立った者の中に太閤様の非常な愛顧を受けていた博多の奉行がいた（引用者注 石田三成のこと）。彼は己がキリシタンたちに対して〔その数は千名にのぼっていた〕重大な脅迫に加えて、こう命令した。キリシタン（宗門）に対し背教し、すべてのロザリオを自分のもとへ返し、彼らの家々の門戸には異教徒たちが偶像神の名前や、その他の幾つかの文言を書くのを常とした板を打ち付けておくように、と」（1597年3月15日付、ルイス・フロイスのイエズス会総長宛、長崎における二十六殉教者に関する報告書）。もし、豊臣政権下で石田三成ら奉行が権力を掌握することがあれば、キリシタン王国建設の夢は、秀吉時代に悪夢に逆戻りしてしまうと思って、積極的に家康支援に動いたのかも知れない。

12・関ヶ原へ

天下が風雲急を告げる。兵乱は東北会津で起こった。上杉景勝が家康打倒を掲げて挙兵したのである。家康は伏見や大坂にいる間には、三成は動けなかった。上杉景勝にしても、それを討とうとした徳川家康にしても、いずれも豊臣家の家臣として挙兵したのであった。

三成は周旋し、反家康の名の下に、大谷吉継を口説き、毛利輝元を総大将に、宇喜多秀家、小西行長、島津義弘、長宗我部盛親らを集め、その他の地域でも諸將に檄文を送って味方につけることに成功した。三成らはこのとき大坂城に行き、大坂城にいた諸大名の人質を確保することに成功する。この状況で、家康は豊臣恩顧の大名たちが本当にこのまま自分の味方であるのかどうか見極めるため、上杉討伐の途上、小山の軍議において、諸將に去就を問うた。このとき、あらかじめ黒田長政が家康に言い含められ、福島正則が軍議の当日、自分は家康の味方をすると言口火を切らせた。このことによって、家康の目論見通り、豊臣恩顧の大名たちは家康につくことに決したのであった。

そして、上杉・佐竹は、伊達、最上をはじめとする奥州や関東の諸侯に任せ、反転して江戸に戻った。

長政をはじめ、福島正則や池田輝政らは、福島正則の所領尾張清洲城に入り、家康の本隊の到着を待っていたが、家康は慎重を期して動かない。正則らは家康家臣の本多忠勝、井伊直政らの監視の下、織田秀信の岐阜城攻めの火蓋を切るのである。

このとき、官兵衛は中津におり、瀬戸内海の早船で、上方の情報をいち早く入手する体制を築いていた。実に用意周到だ。これがのちの効いてくる。三成挙兵の知らせを受けて、いよいよ官兵衛の軍事行動が始まるのであった。

（1）キリシタン王国の建設

官兵衛が早々に家康に接近し、長政を家康につかせて信頼を得たのは、慧眼であった。博打ではなく、先見の明があったのだと思う。また、三成が勝ってしまったら、どちらにしても望みが絶たれるだろうから、家康に賭けるしかなかったということかも知れない。まさか、家康に付けた長政を捨石にしてまで生き残りを図ったことはないだろうし、諸大名の中には家族で東西両方に分かれて家名の存続を図ろうとした者もあったが、官兵衛は長政を家康につけ、自分が三成側について、どちらが勝っても生き残れるような行動をとったふしもない（最初から西軍の諸城を標的にしている）。このあたりの官兵衛の意図も別巻で述べたいと思う。

この巻で重要な視点は、官兵衛の軍事行動の意図は何だったか、単に所領を増やしたいという欲に駆られたものだったのか、という点だ。官兵衛の意図については残念ながら直接証拠がないので、状況証拠の積み重ねによるほかはない。

私は、官兵衛は九州を平定して、かねてからの念願だったキリシタン王国を築くつもりだったかも知れないと考えている。

関ヶ原の合戦に先立って、家康から九州は切り取り次第（自分の力で占領した地域はそのまま与える）との約束を取り付けていた。秀吉の九州平定戦のときには実現できなかったキリシタン王国、幾多の九州の諸大名が実現し得なかったキリシタン王国、みんなが安心して自分が信じたい宗教を自由に信仰できる国、つまり、信教の自由が保証された国の建設・・・秀吉が死んだ今、今度こそ造れるかも知れない。家康はキリスト教勢力を毛嫌いしていないし、もしかしたら、伴天連追放令も撤回してもらえるのではないかな。あるいは、海峡を隔てた九州内だけはキリシタン保護区にできないだろうか。家康に相当な恩を売っておけば、それを許して海れないだろうか。それは、関ヶ原の戦いの前に、官兵衛が藤堂高虎を通じて、長政には恩賞として宇喜多領などの京・大坂に近い土地に欲しい（自分は九州切り取り次第で）と言ったことと無関係ではないだろう。大友宗麟はキリシタンを信じるあまり、神道や仏教などの既存の宗教勢力との共存を図ることなく、軋轢が生じ、国力の衰退を招いてしまった。それを反面教師として、自分はいまやうまくやってみせる・・・

残念ながら関ヶ原の戦いは、予想外にも半日で終わってしまった。官兵衛は家康からの停戦命令を受けて九州制圧の半ばで終わってしまった。

しかし、なぜ、関ヶ原の戦いが終わったことを知ったあとも、その後1ヶ月近くも、官兵衛は九州でも軍事行動を続けたのであろうか。その理由としては、家康との次のような書状のやりとりがあったことによるものと考えられる。

・関ヶ原の戦い（9月15日）の前（8月25日）

家康の重臣井伊直政→官兵衛 「切り取り自由に働かれよ」

意味は、官兵衛が九州で攻めとった城は、（秀頼公から）与えられるだろうから、存分に働かれよ、ということ。うまくやればそれだけ領地が増える確約だったわけだ。これは頑張るきやない！

・関ヶ原の戦い直後（9月16日）（この時点で関ヶ原の戦いの結果はまだ官兵衛は知らない）

官兵衛→藤堂高虎 「これより加藤清正と相談し、海路広島城（引用者注 毛利輝元の本拠）を攻め込もうと思う。清正と自分は、今回切り従えた領地を秀頼様名義で戴く由、井伊直政と話がついている。さらに、出来れば、長政に宇喜多秀家の旧領（引用者注 備前・備中・美作周辺51万石）を賜りたく思っている。この事を内緒で家康にとりなしてほしい。」

藤堂高虎は家康に親近していた武将で、腹心の部下と言ってもいい人物。この高虎に家康への取りなしをたのいでいる。なぜ、「内緒で」なのか。長政が吉川広家に対して、再三毛利家を何とか西軍に関与しないようにせよと忠告していたことが実らず、毛利輝元は西軍の総大将に祭り上げられてしまった。だから、官兵衛がその本拠地の広島城を攻めても基本的には何ら問題なかったはず。しかし、毛利家や吉川・小早川家と黒田家は長い付き合いであった。その交誼を裏切るようになってしまう。だから、表沙汰にせず内緒で告げて欲しいと言い、家康に忠誠心を見せようとしたのだろう。

あるいは、広島城を急襲する計画が公になるのを防ごうという意図もあったかも知れない。この時点で、官兵衛はまだ豊後より平定していなかったのだ。とても、中国地方に攻め入る余裕はなかったが、すでに関ヶ原の戦いが半日で終わったことを知らない。それなのに、加藤清正と協力して九州を平定し、返す刀で中国地方を攻め上ろうと家康に宣言してしまった。その手前、最低限、九州を平定するまではやめられなかったのかも知れなかった。

また、攻めとった領地はもらえるものとの確約を得ており、この確約を実現するため、目いっぱい行けるところまで行ったこともあるだろう。官兵衛の願望としては、早々に家康に賭けた以上は、自分には九州一国以上、長政に宇喜多領三カ国余りの恩賞を狙っていたのだらうから、関ヶ原の本戦で長政がどの程度の手柄を立てたかどうかの詳細が不明であった以上は、自分ができる限りのことをして長政の手柄を補おうとしたのかも知れない。

彼の行軍進路を見ると、中津城→豊後石垣原→豊前香春岳→豊前小倉→筑後久留米→筑後柳河→(肥後熊本)→肥後宇土→肥後八代(妻島)ないし水俣、というルートをとっており、西軍についていた諸城が関ヶ原の敗報を聞いて開城し、官兵衛の軍に合流した。彼らはいったん西軍についてしまっていたし、本軍は上方に行っていて単にその留守を守っていたに過ぎなかった。西軍は負けていたことを知っていたから、何とか東軍に寝返って働きを見せ、所領安堵を図ろうとしていた。官兵衛はそれをうまく利用して、ひたすら九州平定を目指す。東軍の大津城攻めに失敗した立花宗茂は、所領の柳河に下向し西軍として徹底抗戦をしようとしたが、官兵衛に説得されて開城している。

しかし、あまりに長期間、官兵衛が停戦しなかったために、家康が官兵衛に野望があることを疑ったことと、官兵衛の最後のターゲットであった薩摩の島津が長政を通じて家康に密書を送ったことで、家康から停戦命令が出された。こうして、官兵衛の最後の戦いは薩摩を目前にして終わったのである(上記は、関ヶ原の戦功の証拠となった書状のやりとりのごく一部。やりとりの全貌については別巻で詳細を述べることとしたい)。

このあとの伏見における家康との会見で、長政とは別に領地を与えることを家康から示唆された官兵衛は、すっぱり恩賞を断っている。九州にできるだけ広い領土を得て、そこでキリシタンを保護しようと思っていたが、小さな欲にとらわれずに、家康の猜疑心を解こうと思いついたのだらう。その代わりに、官兵衛はキリシタンのために伏見で周旋して、家康にキリシタンへの弾圧をしないように頼んでいる。また、領地の博多においてキリシタン保護に積極的に動いている。

秀吉が発令した伴天連追放令は生きていたものの、徳川政権が発足当初は一時キリシタンを黙認する態度をとったため、筑前だけでなく日本各地でキリスト教布教が隆盛を迎える。官兵衛と同じく熱心なキリシタンであった弟の直之は、秋月1万5千石に知行され、秋月はキリシタンを保護され隆盛を迎える(詳細は中巻Q16で述べる)。

官兵衛の晩年の行動をみると、キリシタンの布教を保護するためには、自分が力をもつから、家康にも恩を売った、少しでも広い領地が欲しいという欲は捨てて、自分の意図するキリスト教も自由に信仰できる国造りを目指し、そのために家康に賭け、55歳の老骨に鞭打って九州を駆けたように見えるのである。

(2) 官兵衛の活動に対する教団からの感謝

官兵衛が関ヶ原の戦いの折のキリシタンとして活動したことについては、Q3で一部触れた。ここでまとめてみると、

- 大友義統を改心させたこと
- 久留米城にいたマセンシア夫人(毛利秀包の妻)とそのキリシタン家臣を鍋島直茂の攻撃から守り、城番として弟惣右衛門直之(熱心な信者として知られる)をおいて保護させたこと
- 旧小西領を占領した加藤清正の命令で投獄された肥後の宣教師の釈放を清正に働きかけ、釈放に成功したこと

などがあった。

教会側でもこれらの功績を高く評価して、セルケイラ司教や準管区長バジオは、官兵衛に感謝状を送り、官兵衛こそ小西行長に代って、日本のキリシタンの柱石と保護者になるようにと期待していた(1601年2月25日、長崎発、カルヴァリヨの書簡)。

ちなみに、旧小西領内でキリスト教布教が盛んな土地であった八代が、関ヶ原の戦いのあと、日蓮宗の熱心な信者であった加藤清正の領有になってから、宇土・八代地方のキリシタンには受難が続いた。

「暴君(清正)は、その政策を続けて信者の領内から出ることを禁じ、或る者からはその父を、またある者からは、その妻を、人質にとった。同時に彼は、彼等の財産収入の全部を没収し、その犠牲者からは、任官以来扶持や知行としてあった米を強請した。かくして無一文になったキリシタンは、家族と共に藁小屋の下に逃れた。しかもその領内を出ることを、死をもって禁じられていた」(バジエス『日本切支丹宗門史』)。

清正が小西家の旧臣のキリシタン武士に対してとった弾圧をこのように伝えている。武士にとって、死にまさる制裁である。

「その他一般の人々に対しては、彼等に家を貸すこと、食べ物売ること、商取引をすることを、重刑をもって厳禁されていた」(バジエス『日本切支丹宗門史』)。

これでは、農民、商人は生きていくことはできない。

こうした制裁によってもキリスト教を改宗しない者には、苛酷な極刑によって惨殺された。

慶長8年(1603)から寛永元年(1624)までに八代地方で行われたキリシタン弾圧は、よく知られている天草・島原地方のそれに決して劣るものではなかったのである。

慶長8年(1603)12月、清正の命によって、先に刑死したヨハネ南五郎左衛門、シモン竹田五兵衛の“家族”が、清正の命によって磔刑に処せられた。シモン竹田の母ヨハンナ(55歳)、ヨハネ南の妻マグダレナ(33歳)、その養子ルイス(8歳)、シモン竹田の妻イネス(30歳)が磔刑にされた。その四人の遺骸は、清正の命により1年間放置された。肉が腐れ、骨がバラバラになつて地に落ちたという。「遺骸は落ちかかるに連れて集められ、予て準備してあった棺に納められて長崎に送られ、イエズス会の学林に移された」という。見せしめとされたのだ。

秀吉の禁教令により官兵衛のキリシタン熱は冷めたかに見えたが、秀吉の死後、再びキリスト教団の保護に積極的になったことで、イエズス会が官兵衛に期待を抱いたのであろう。

関ヶ原の戦いで軍功があった官兵衛。果たして、望んだキリシタン王国は実現したのか。また、晩年をどのように過ごしたのか。

(中巻につづく)

注釈

(注1)

金子堅太郎（かねこ けんたろう、嘉永6年2月4日（1853年3月13日） - 1942年（昭和17年）5月16日）は、明治期の官僚・政治家。

嘉永6年（1853年）2月4日、福岡藩土勘定所附・金子清蔵直道の長男として、筑前国早良郡鳥飼村字四反田（現在の福岡市中央区鳥飼）に生まれる。幼名は徳太郎。

文久3年（1863年）1月、藩校・修猷館に学ぶ。明治維新後、修猷館での成績が優秀であることから永代士分に列せられ、岩倉使節団に同行した藩主・黒田長知の随行員となり、團琢磨とともにアメリカに留学。ハーバード大学法学部（ロー・スクール）に入学。小村壽太郎と同宿し勉学に励む。ハーバード大学を卒業し法学士（Bachelor of Laws）の学位を受領。伊藤博文の側近として、伊東巳代治、井上毅らとともに大日本帝国憲法の起草に参画する。また、皇室典範などの諸法典を整備。司法大臣、農商務大臣、枢密顧問官を歴任し栄典は従一位大勲位伯爵。慶應義塾夜間法理科（後の専修学校講師）、日本法律学校（現日本大学）初代校長、二松學舎専門学校（二松學舎大学）舎長。

『黒田如水伝』を書いたのは、大正5年。書いた動機としては、その序文に以下のように書かれている。

「黒田侯爵に上つる書

侯爵黒田長成卿閣下、私の祖先は閣下の所領筑前国に在住し、累代貴家の微臣として、俸禄を受け、私もその余沢により成長した。回顧すると、明治元年4月、私は16歳で父を失い、その家督を継ぎ、すぐに維新の戦争が起きて、軍隊に編入されたが、明治2年の春、突然藩命により、秋月に留学し、ついで東京に遊学し、そうして明治4年の廃藩置県の大改革により、藩庁から帰国の命令に接したが、私は心に期することがあって、東京に居残り、知人の許に寄食して、苦学していたところ、ある日閣下の祖父長傳卿から呼び出され、アメリカ留学の恩命を拝し、閣下の父君長知卿に従って、彼の国に赴き、アメリカに8ヶ月、法学を学び、帰国後、官途につき、それ以来36年、諸官を歴任し、あるいは閣班に加わり、あるいは枢府に列して、国務に参画し、少ない忠義を皇室に致し、聖恩の万分の一を報じられたのは、すべて貴家のおかげであった。

私はこのように、貴家の恩恵に浴したので、報恩の念もまた切に有り、寝ても貴家を忘れることができず、この頃、私は公務の余暇に、貴家の始祖如水公の事蹟を収集した。寛永の昔に貴家において編纂された黒田家譜を始め、その他の諸書、概ね幕府をはばかって、その真相を記述することができなかったことにより、同公の撥乱反正の勲業は、段々消滅して、あるいは誤謬の事実を後世に伝えることは、残念だ。

しかし、今や王政復古したので、如水公に関する事蹟を忌憚なく記述して、公にし、天正慶長の時代において、秀吉家康と並び立つ一大英傑の実伝を、世に紹介することができれば、単に私の朝臣としての如水公に対する景慕の私情を充たすにとどまらず、あるいは本朝歴史の不備の一斑を補うことができよう。

私はかつて袁随園の言葉を聞いた。彼が言うには、作史には3つの長所が必要だと、才、学、識の3つのうち1つがなくてもダメだと。私は才能が乏しく、学が浅く、識もまた足りず、如水公の史伝を作るにおいても、3つの特徴がことごとく欠けているので、如水公の如き英雄の史伝を編述する資格はないとはいえ、本編は単に私が収集した材料と、私の所感を記述したに過ぎないので、これ以上は史家に任せよう。

本書編述の体裁の如き、如水公をはじめ、他の諸卿を呼ぶに、敬称を用いず、また、評論の如きも、真摯率直にして、あるいは不敬に涉る嫌いがあるが、貴家の家譜を編集するわけではなく、日本の歴史の一部を補足する意図なので、もし、この一編によって如水公の盛徳勲業を不朽に伝えることができれば、私が貴家に対して報恩の一端にもなるだろう。今春、草稿ができたので、ここで閣下の閲覧を経て、これを世に公にしようと思う。閣下が私の微意を了解されることを願う。

大正5年3月21日

如水公の祥月命日において

子爵 金子堅太郎 謹白」

（注2）

鉢かづき（はちかづき）は、古典の「お伽草子」の話の1つ。鉢かづき姫、鉢かつぎ姫とも呼ばれる。「かづき」は「頭にかぶる」という意味の古語「かづく」（被く）の活用形であり、現代語にもある「かつぐ」（担ぐ）の活用形ではない。

場合によっては「かづき」の表現を現代語に訳して鉢かぶり姫ということもある。

<説話の内容>

昔、河内国に寝屋備中守藤原実高という長者が住んでいた。長谷観音に祈願し、望み通りに女の子が生まれ、やがて美しい娘に成長した。しかし母親が亡くなる直前、長谷観音のお告げに従い娘の頭に大きな鉢をかぶせたところ、鉢がどうしてもとれなくなってしまった。

母親の死後この娘（鉢かづき姫）は、継母にいじめられ家を追い出された。世をはかなんで入水をしたが、鉢のおかげで溺れることなく浮き上がり、「山蔭三位中将」という公家に助けられて、風呂焚きとして働くことになった。中将の四男の「宰相殿御曹司」に求婚されるが、宰相の母は下女との結婚に反対し、宰相の兄たちの嫁との「嫁くらべ」を行って断念させようとする。

ところが嫁くらべが翌日に迫った夜、鉢かづき姫の頭の鉢はずれ、姫の美しい顔があらわになった。しかも歌を詠むのも優れ、学識も豊かで非の打ち所が無い。嫁くらべのあと、鉢かづき姫は宰相と結婚して3人の子どもに恵まれ、長谷観音に感謝しながら幸せな生活を送った。

なお、藤原実高がすんでいたのは、現在の寝屋川市のあたりとされており、寝屋川の民話として紹介されていることがある。また、姫の名は、初瀬山の長谷観音にちなんで付けられた「初瀬姫」と伝えられている。

その後、若君の兄嫁たちと美貌や宝物や才覚を競う話がつづき、継母と不仲になって屋敷を出た父君との再会が果たされたという。

（注3）

宣教師が教理の翻訳に際し、浄土宗・浄土真宗の概念や用語を借用したので、日本人のキリスト教理解を容易にした。最も日本人に理解出来ない「贖罪信仰」を伝える箇所では、「一にはデウスをよくたのみ奉り。二にはよく信じ奉り。三にはよき所作をなすみちをしる事これなり」、「ゼズスとは御たすけてと申心也」、あるいは「にんげんに後生をたすかるまことのみちをひろめよ」（ドチリナ・クリシタン）のような苦勞の跡が見られる。浄土真宗の蓮如が「阿弥陀仏お助けください」と弥陀にすべてを投げだし「後生助け給え」の救済構造が、その対象をデウスならびにキリストに置き換える事で、日本人に理解しやすい表現となった。利用された仏教用語の例とし、内証、色身、果報、功力、歡喜、色体、慈悲、六根、菩提心などがある。しかし、誤解を招くケースでは言語が使われた。アニマ（靈魂）、ガラサ（恩寵）、オラショ（祈祷）、サカラメント（聖典礼）、アンジョ（天使）、エウカリスチャ（聖餐）、クルス（十字架）、ヒイデス（信仰）など。

（注4）

中川 秀政は、中川清秀の嫡男で、中川秀成の兄。妻は織田信長の娘・鶴姫。右衛門尉。はじめ父と共に織田信長に仕えた。信長没後は羽柴秀吉に仕え、1583年に父が佐久間盛政の攻撃を受けて賤ヶ岳の戦いで戦死すると、家督を継いで摂津国茨木に5万石を領した。1584年の小牧・長久手の戦い、1585年の四国平定戦で功績を挙げたため、秀吉から賞されて播磨国三木城13万石に加増移封された。

文禄3年（1594年）2月、敵前逃亡の罪で大友吉統が豊後国を没収されると、豊後国岡城に7万4千石の所領を与えられ移封する。慶長5年（1600年）の関ヶ原の戦いでは、家臣を西軍方の丹後田辺城攻めに派遣したが、関ヶ原において行われた本戦が終結した後に東軍に与した。西軍の白杵城主太田一吉を攻撃し、佐賀関の戦いでは太田方に多くの家臣を討ち取られたものの、その功績によって戦後徳川家康から所領を安堵された。当初西軍に与したが、官兵衛勸降により東軍につき白杵城攻めの武功を上げることで何とか当初の判断ミスを取り戻したのであった。

（注5）

毛利秀包は、永禄10年（1567年）、毛利元就の九男として生まれ、天正7年（1579年）に兄の小早川隆景の養子となり、元服した後は小早川元総（こばやかわ もとふさ）を名乗った。天正11年（1583年）、人質として甥の吉川広家と共に大坂の羽柴秀吉の下に送られた際に「秀」と「藤」の字を賜り、藤四郎秀包（ひでかね）と改名（イエズス会の文書には「シモン藤四郎殿」という名前ですばしば登場する）。人質でありながらも、翌天正12年（1584年）の小牧・長久手の戦いにも秀吉に従い出陣。秀包は秀吉に愛され、優遇された。天正14年（1586年）から始まる九州平定戦では養父・隆景に従い豊前香春嶽城を攻略し、戦後に隆景が筑前・筑後を領すると、筑後三郡7万5千石を領した。天正15年（1587年）には久留米城を築き、居城とした。

受洗以後はキリシタン大名としての活動が目立つようになり、天正19年（1591年）には久留米城下に天主堂を建設、キリスト教信者は7千人と言われる。

文禄の役での戦功により筑後久留米のまま5万5千石を加増されて13万石となり、筑後守に叙任された。

文禄3年（1594年）、秀吉の養子・木下秀俊（後の小早川秀秋）が隆景の養子となったために廃嫡され、別家を創設する。

慶長5年（1600年）の関ヶ原の戦いでは西軍に加わり、8月に大坂城玉造口を守備した。9月3日には兄の末次元康や立花宗茂らと共に、京極高次の籠る大津城を攻めた。西軍が敗れたため、大津城を撤退して大坂城に帰還する。

この時、国許でも戦が起こっており、10月14日に久留米城は官兵衛、鍋島直茂率の軍に攻撃を受けていた。城中には宿老桂広繁、白井景俊以下わずか500の兵しか残っていなかったが、数日城は持ちこたえた後、両人は開城勧告に応じて城を明け渡した。官兵衛の弟直之が秀包の妻以下（キリシタンが多かった）を保護するため、久留米城の城番を命じられている。

関ヶ原の戦い後は改易され、毛利輝元より長門国内に所領を与えられる。その頃、小早川秀秋の裏切りへの謗りを避けるため、小早川姓を捨てて毛利姓に復し、大徳寺で剃髪して玄済道叱と称した。帰国後は体調が悪化し、長門赤間関の宮元二郎の館で療養したが、翌慶長6年（1601年）に35歳の若さで病没。

遺体は当時の秀包の知行地で、館があったと伝えられる現在の山口県下関市豊北町滝部に安置された。後に久留米には秀包を祀る小早川神社が建てられた。

（注6）

熊谷家は安芸国の有力国人で、毛利元就と敵対し戦ったこともある（永正14年（1517）、有田合戦）。

熊谷元直は、慶長9年（1604）、毛利輝元が新たな毛利氏の本城を萩城と定めたとき、益田元祥と共にその築城を命じられた。その際に、益田元祥の家臣が元直の一族である天野元信配下の者から築城の材料（五郎太石）を盗む事件が発生。その責任をめぐって両者は対立したため、築城作業は遅延する（五郎太石事件）。

このことで徳川家康の不興を買うことを恐れた毛利輝元は、慶長10年（1605）に萩城の築城の遅延の責を問うという理由で兵を送り込み、熊谷元直は一族の天野元信らと共に討たれた。この肅清の際に熊谷元直の妻子も殺害された。また、これと前後して毛利領内のキリスト教関係者の多くが処刑された。

この事件については、きな臭さが漂っている。輝元が自分の手の者に石を盗ませて、対立を扇動し、築城の遅延という口実を作って、キリシタンの弾圧をしたかったか、あるいは、次いでに弾圧したかったのかも知れない。次のような著述がある。

「この慰安の最中、色々の波瀾が起った。長門と周防の主で、山口を城下とする毛利殿が宣教師を追放し、キリシタンに迫害を加へた。彼は著名な大名ベルシオール豊前殿（熊谷元直）と、熱心な伝道士である盲人ダミアンの首を刎ねた。」（レオン・バジェス著『日本切支丹宗門史』第7章 1605年（慶長10年））

後世、元直はキリスト教信者の働きかけにより殉教者として扱われ、キリシタンの禁教が解除された明治時代には教会に墓所が設けられた。また、平成19年（2007）3月4日には、ローマ教皇庁が17世紀前半に江戸幕府の迫害を受けて殉教した、元直を含む日本人カトリック信徒188名に対して福者の敬称を与えられることとなり、同年6月にローマ教皇ベネディクト16世によって正式承認された（ベトロ岐部と187殉教者）。

（注7）

父職隆とともに出陣し、近隣の土豪を討ったと伝えられる（『黒田家臣伝』）。他の史料にも誰が相手だったかは明記されていない。

卷末史料

官兵衛 関連年表

和暦 （西暦） 年齢	官兵衛に関係が深い事項	一般的な事項
天文15 （1546） 1	11月 姫路城で生まれる（姫路城主小寺職隆の長男、幼名は万吉）。	
弘治元 （1555） 1		1月 毛利元就が陶晴賢を厳島で破る。
永禄2 （1559） 14	11月 母（明石氏）が亡くなる。	
〃 3 （1560） 15		5月 織田信長が桶狭間で今川義元を討ち取る。
〃 4 （1561） 16	小寺職隆の近習として御着城に出仕（禄高81石）。	
〃 5 （1562） 17	父、職隆に従い、初陣。	
〃 7 （1564） 19	2月 祖父重職が亡くなった。	
〃 10 （1567） 22	家督を継ぐ。	
〃 11 （1568） 23		9月 信長、足利義昭を擁して上洛。
〃 12 （1569） 24	5月 青山合戦（赤松政秀を破る）	
元亀元 （1570） 25		6月 信長、姉川の戦いで、浅井・朝倉連合軍を破る。
天正3 （1575） 31	7月 織田家に従属するため、使者として岐阜に赴く。	5月 信長・家康連合軍、長篠・設楽原の戦いで、武田勝頼を破る。
〃 4 （1576） 31	4月 英賀合戦（毛利方の浦宗勝を破る） 9月 松寿丸を人質として差し出す。	2月 信長、築城中の安土城に入る。
〃 5 （1577） 32	1月 秀吉が中国計略のため播磨に下向。居城姫路城を秀吉に提供。 11月 作用城（福原城、西播磨）攻略。上月城攻略。	1月 信長に謀叛した松永久秀、信貴山城で自害。
〃 6 （1578） 33	2月 別所長治が叛旗を翻す。 5月 宇喜多直家が織田方に転じる。 1月 摂津国有岡城に幽閉される。	7月 上月城が落城。 11月 木津川河口の戦いで、織田水軍が毛利水軍を破る。
〃 7 （1579） 34	1月 有岡城落城。官兵衛が救出される。	6月 竹中半兵衛、平井山の陣所で病没。
〃 8 （1580） 35	2月 小寺政職が御着城から出奔。官兵衛は小寺姓を捨て、黒田姓に復姓。 3月 人質となっていた松寿丸が黒田家に戻される。 4月 国府山城を築き、これに移る。 6月 因幡、伯耆の国境に出兵。 9月 播磨国揖東郡に1万石を与えられる。	1月 三木城の別所長治が自害し、開城。
〃 9 （1581） 36	3月 揖東郡で加増され、2万石となる。 6月 因幡国鳥取城攻め。 7月 淡路国志賀城に入り、四国の長宗我部元親に備える。	1月 鳥取城の吉川経家が自害し、開城。
〃 10 （1582） 37	3月 備中国に出陣。 4月 宮路山城攻め。 冠山城攻め。長政の初陣。 高松城攻め。 6月 山崎の戦いで明智光秀を破る。	6月2日 本能寺の変で信長が明智光秀に包囲され自害。 6月27日 清洲会議にて織田家の後継者及び領地再配分問題の決着。
〃 11 （1583） 38	8月 大坂城の普請総奉行として秀吉から5箇条の掟を受ける。 9月 大坂城築城開始。	4月 賤ヶ岳の戦いで、秀吉が柴田勝家を破る。
〃 12 （1584）	1月 秀吉の媒酌で、長政に蜂須賀正勝の娘を迎える。	4月 尾張の長久手で、池田恒興・元助父子、森長可が徳川軍に

39	3月 蜂須賀正勝とともに、毛利・宇喜多との国境画定のため中国に赴く。	討たれる。
" 13 (1585) 40	5月 4月攻めの軍監として、讃岐・阿波に進攻。阿波国岩倉城を攻める。 8月 父・職隆が亡くなる。	7月 秀吉、関白に就任。
" 17 (1589) 44	3月 検地のため、肥後に赴く。 4月 長政、宇都宮鎮房を中津城で刺殺する。長政、城井谷に兵を送り、宇都宮一族を撲滅する。 5月 家督を長政に譲る。	5月 秀吉の長男鶴松誕生。
" 18 (1590) 45	3月 小田原攻めのため京都を出発。 山中城の戦いで、妹婿の一柳直末が戦死。 6月 小田原城に入り、北条氏政・氏直に講和を説得。	7月 北条氏直が降伏を申し出、北条氏政・氏照は切腹を命じられる。
" 19 (1591) 46	8月 肥前国で名護屋城の縄張りを行う。	1月 豊臣政権を支えるナンバー2である秀長が死去。 2月 千利休が切腹を命じられる。 12月 秀吉は関白職を養子の秀次に譲る（太閤と呼ばれるようになる）。
文禄元 (1592) 47	5月 秀吉の訓令を奉じて朝鮮に渡海し、漢城にて諸將と軍議をする。 8月 秀吉の許可を得て帰国。	3月、秀吉、京都をたち肥前国名護屋城に向かう。 5月 日本軍、漢城を占領。 7月 日本水軍、李舜臣率いる朝鮮水軍に敗北（閑山島、安骨浦の戦い）。
" 2 (1593) 48	2月 秀吉の命で再度朝鮮に渡海。東 城寨の囲碁事件（浅野長政と囲碁をして三成ら奉行を待たせて怒りを買う） 7月 秀吉の許可なく帰国し、秀吉の怒りを買う。剃髪して如水円清と号する。	1月 碧蹄館の戦い後、戦線が膠着し講和の動きが起こる。 8月 秀吉、次男秀頼誕生。
" 3 (1594) 49	8月 長政に5か条の教訓を書き渡す。 秀吉は長政の朝鮮での武功に免じて、如水の軍紀違反を許す。	2月 秀吉、吉野の花見を行う。
" 4 (1595) 50	8月 京都滞在の費用補填のため、播磨国揖東郡で2千石の加増を受ける。	7月 秀吉の甥秀次が高野山で切腹させられる。
慶長元 (1596) 51		閏7月 山城大地震で伏見城倒壊。 9月 秀吉、朝鮮再出兵を決意。
" 2 (1597) 52	2月 朝鮮再征で渡海軍の主将の小早川秀秋の補佐を命じられる。 6月 秀秋と共に釜山に上陸し、朝鮮各地での日本式城郭の築城を指導。	
" 3 (1598) 53	1月 梁山城に來襲した明軍8千をわずかな兵で撃退。 4月 秀吉の命で帰国し、伏見で戦況報告。 12月 中津を出発し、伏見の新邸に入る。	11月 明の大軍が漢城に到着し、蔚山城の攻防戦がはじまる。
" 4 (1599) 54	12月 家康に暇をもらい、中津に戻る。	3月 秀吉、醍醐の花見を行うが、その後体調を崩す。 8月 秀吉死去。 朝鮮から撤兵命令が出される。
" 5 (1600) 55	9月9日 長政、9千の兵を率いて中津を出発。 9月13日 如水、石垣原の戦いで、大友義統の軍勢を破る。 10月14日 小倉城を落とす。 10月18日 久留米城を開城させる。 10月25日 立花城（柳川城）を開城させる。 11月15日 中津城に凱旋。 12月8日 長政と共に筑前国名島城に入る。 12月31日 大坂に上り、家康と会見。	閏3月 前田利家死去。 石田三成襲撃事件で、三成が奉行職を免じられ、居城の佐和山に退く。

（「黒田如水―百姓の罰を恐るべし―」小和田哲男著 ミネルヴァ書房 2012年1月発行 の巻末年表に加筆修正して作成）

参考文献

- 「16・7世紀イエズス会日本報告集」松田毅一監訳 同朋舎
- 「完訳フロイス日本史4 豊臣政権Ⅱ秀吉の天下統一と高山右近の追放」ルイス・フロイス著 中央公論新社
- 「完訳フロイス日本史5 豊臣政権Ⅱ「暴君」秀吉の野望」ルイス・フロイス著 中央公論新社
- 「完訳フロイス日本史11 大村純忠・有馬晴信Ⅲ黒田官兵衛の改宗と少年使節の帰国」ルイス・フロイス著 中央公論新社
- 「日本切支丹宗門史」レオン・パジェス著 岩波文庫
- 「キリシタン大名」ミカエル・シュタイシェン著、吉田小五郎訳 乾元社
- 「キリシタン研究」キリシタン文化研究会 吉川弘文館
- 「キリシタン大名」吉田小五郎著 至文堂
- 「日本キリスト教宣教史 ザビエル以前から今日まで」中村 敏著 いのちのことば社
- 「日本史小百科<キリシタン>」H.チースリク監修 太田淑子著 東京堂出版
- 「新訂黒田家譜索引・家譜年表」川添昭二校訂 文献出版
- 「黒田如水伝」金子堅太郎著 博文館
- 「黒田如水」福本日南著 東亜堂書房
- 「黒田如水 臣下百姓の罰恐るべし（ミネルヴァ日本評伝選）」小和田 哲男著 ミネルヴァ書房
- 「武者物語・武者物語之抄 （索引叢書）32」松田 秀任著 和泉書院
- 「逆説の日本史」井沢元彦 小学館

.....
キリシタン武将 黒田官兵衛
ー「軍師」官兵衛の実像 天の巻（上巻）ー
（Ver 1.3.）
著者：西山隆則（黒田官兵衛生きるヒントラボ）
発行日：2014年1月1日
当コンテンツは著作権保護の対象です。
.....

【著者略歴】

福岡市生まれ。歴史研究家。
普段は企業経営や投資アドバイス業務、広告ビジネスを営む。
戦国～安土桃山時代を中心に、幅広いデータベースを駆使して、歴史関連の著作物を刊行。城郭、神社仏閣、茶の湯、書画骨董の情報発信をはじめ、NHK大河ドラマの解説記事の発信を行っている。
東京大学経済学部経営学科卒業後、公認会計士登録。上場会社数社の監査経験と、一般事業会社での役員を経て、独立。
（なお、生きるヒントラボは宗教団体、政治団体等とは一切関係ありません。）